長野県中野市

安源寺遺跡

(中野市西部ディサービスセンター建設用地内)

発掘調査報告書

1995－3

中野市教育委員会

長野県中野市

安源寺遺跡

（中野市西部ディサービスセンター建設用地内）

発掘調査報告書

1995－3

中野市教育委員会

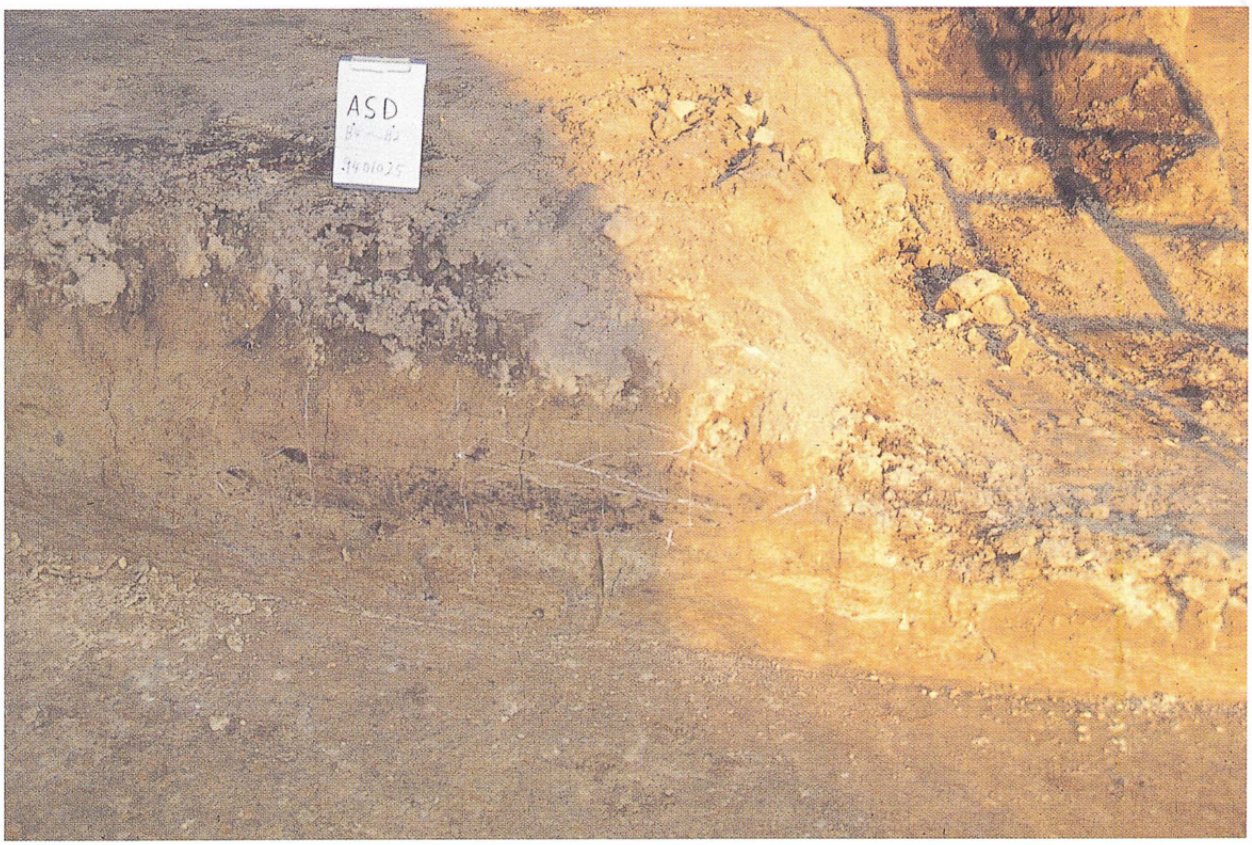
前方後方形周溝墓

前方後方形周溝墓

前方後方形周溝墓周溝セクション

壺棺出土状況

土層



粘土採掘穴セクション

粘土採掘穴セクション

粘土採掘穴セクション

刊行にあたって

中野市の西部に伸びる高丘丘陵上に広がる安源寺遺跡は古くから知られてきた弥生時代後期～古墳時代前期の大遺跡であります。

本調査報告書は中野市西部ディサービスセンター建設に伴う安源寺遺跡の発掘調査報告書であります。

調査した結果、古墳時代前期の前方後方形周溝墓の発見という思いもよらぬ成果をあげることができました。

埋蔵文化財は市民共有の財産であり、郷土の歴史を知る大切な資料であります。

本調査報告書の刊行が埋蔵文化財や郷土の歴史についての、より一層の理解と関心を深めて頂く機会になれば幸いであります。

今回の調査にご協力を頂いた関係各位にあつく御礼を申しあげ、今後のよりいっそうのご協力を賜りたくお願い申し上げて、刊行のあいさつとします。

平成７年３月

中野市教育委員会
教育長　小林治己

緒　言

1　本調査報告書は中野市西部ディサービスセンター建設にともなう長野県中野市安源寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は中野市教育委員会（教育長小林治己）が実施した。調査期間は平成6年8月から平成7年3月の間である。

3　発掘調査等専門的な事柄については、中野市文化財保護審議会会長金井汲次氏の指導のもと、中島庄一、徳竹雅之、関　武が担当した。

4　本調査報告書は金井汲次氏指導のもと、中島庄一、徳竹雅之、関　武が共同執筆した。

5　巻末に金井汲次氏のご協力を得て出土した須恵器の編年的な位置を知るための参考として安源寺遺跡周辺の古窯址出土遺物を掲載した。

目　次

Ⅰ　概要

1.位置……1

2.遺跡の立地……5

3.これまでの調査……5

4.発見された遺構と遺物……5

Ⅱ　各節

1.古墳時代前期の前方後方形周溝墓……6

2.古墳時代前期の粘土採掘穴……7

3.平安時代の土坑 ……14

4.中世の土坑 ……15

Ⅲ　まとめにかえて……19

Ⅰ　概　要

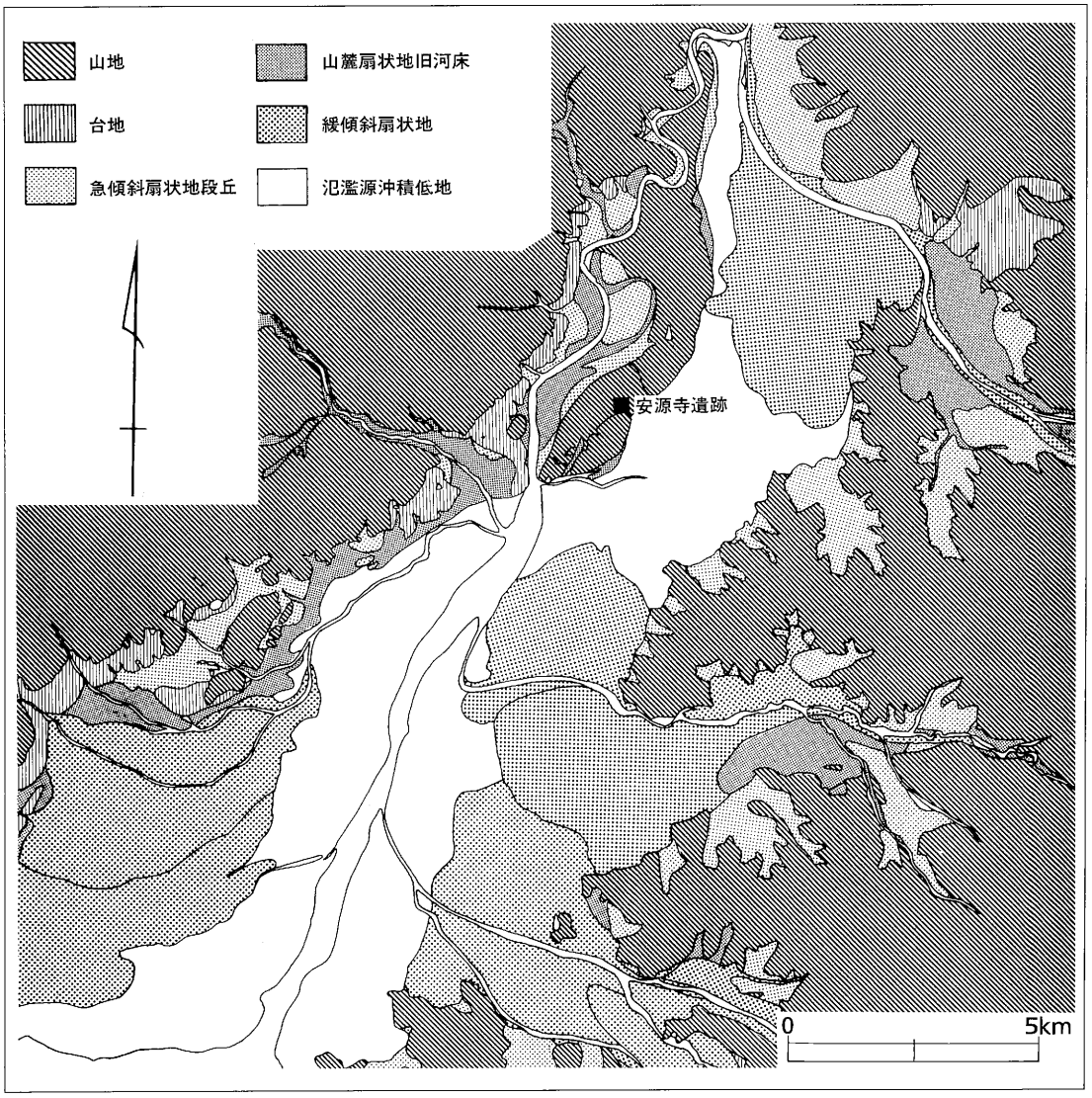
1　位置

安源寺遺跡は東西　10、南北30㎞の広さをもつ長野盆地の北端、長野県中野市大字安源寺・宮裏地籍等に所在している。中野市は長野盆地の集束する部分にあたり、西縁部をなす丘陵と盆地部に形成された扇状地地形からなる。遺跡は盆地の西縁をなす高丘丘陵上にある。高丘丘陵は長野盆地の北西縁部を形成する丘陵地形の一部であり、盆地底部との比高　mを測るなだらかな丘陵である。

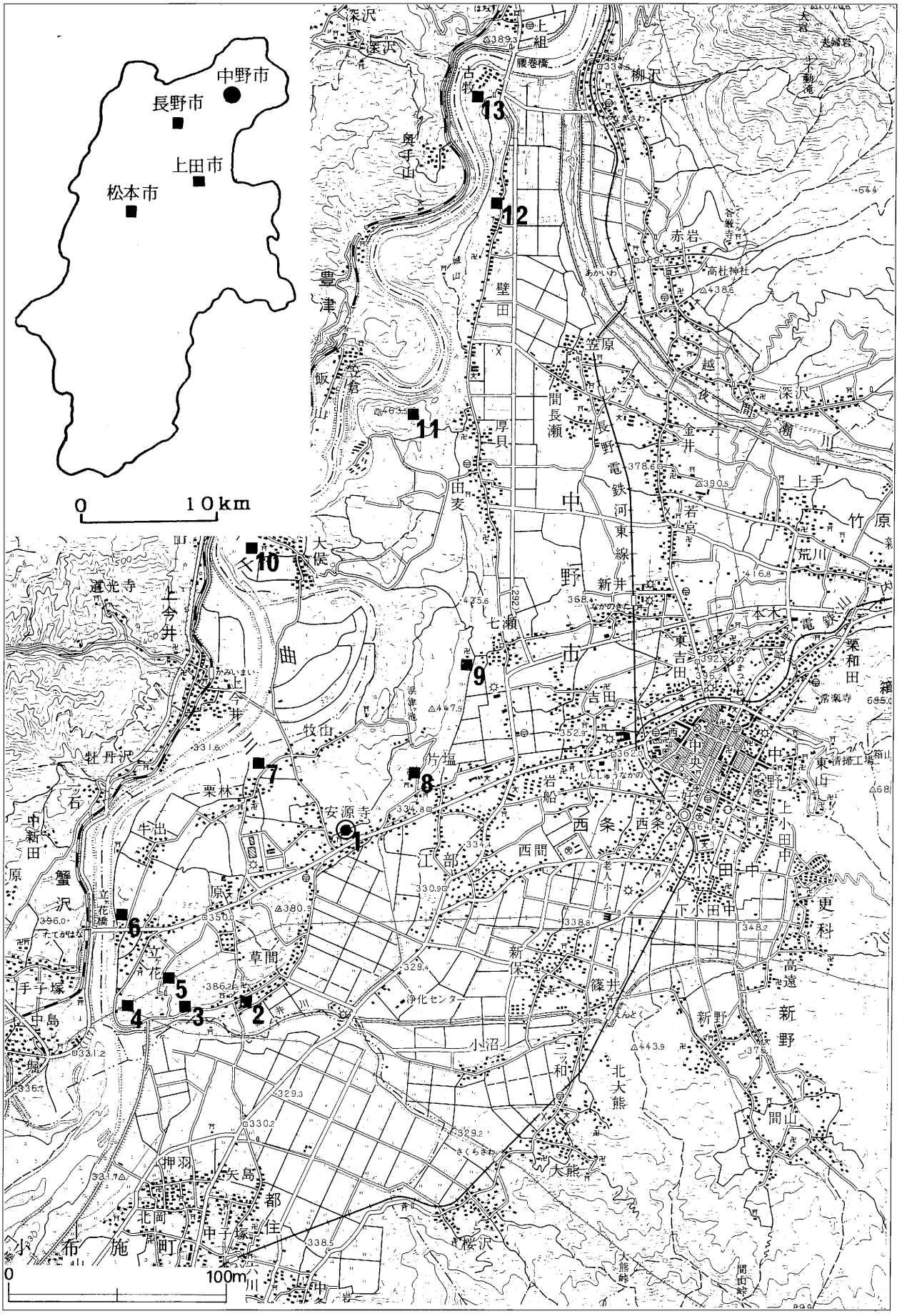
遺跡のある長野盆地の北西縁部は、盆地の西を画する西部山地と丘陵地帯、盆地部とで構成されいる。西部山地の頂部は平坦な地形をなし、前期更新世から中期更新世にかけて形成された原初の準平原と考えられる。丘陵地帯は西に高い階段状の地形をなし、盆地部とは直線的な急崖で接している。

丘陵地帯は長野盆地の主軸方向と同じ、南東から北東方向に並ぶ二列の丘陵群に分けられる。西部山地よりに南から豊野、赤塩、奥手山丘陵が、その東側に南郷、高丘、長丘丘陵が並び、西部山地よりにあるものほど、比高、規模ともに大きく、基盤となる地質も古い傾向を示している。

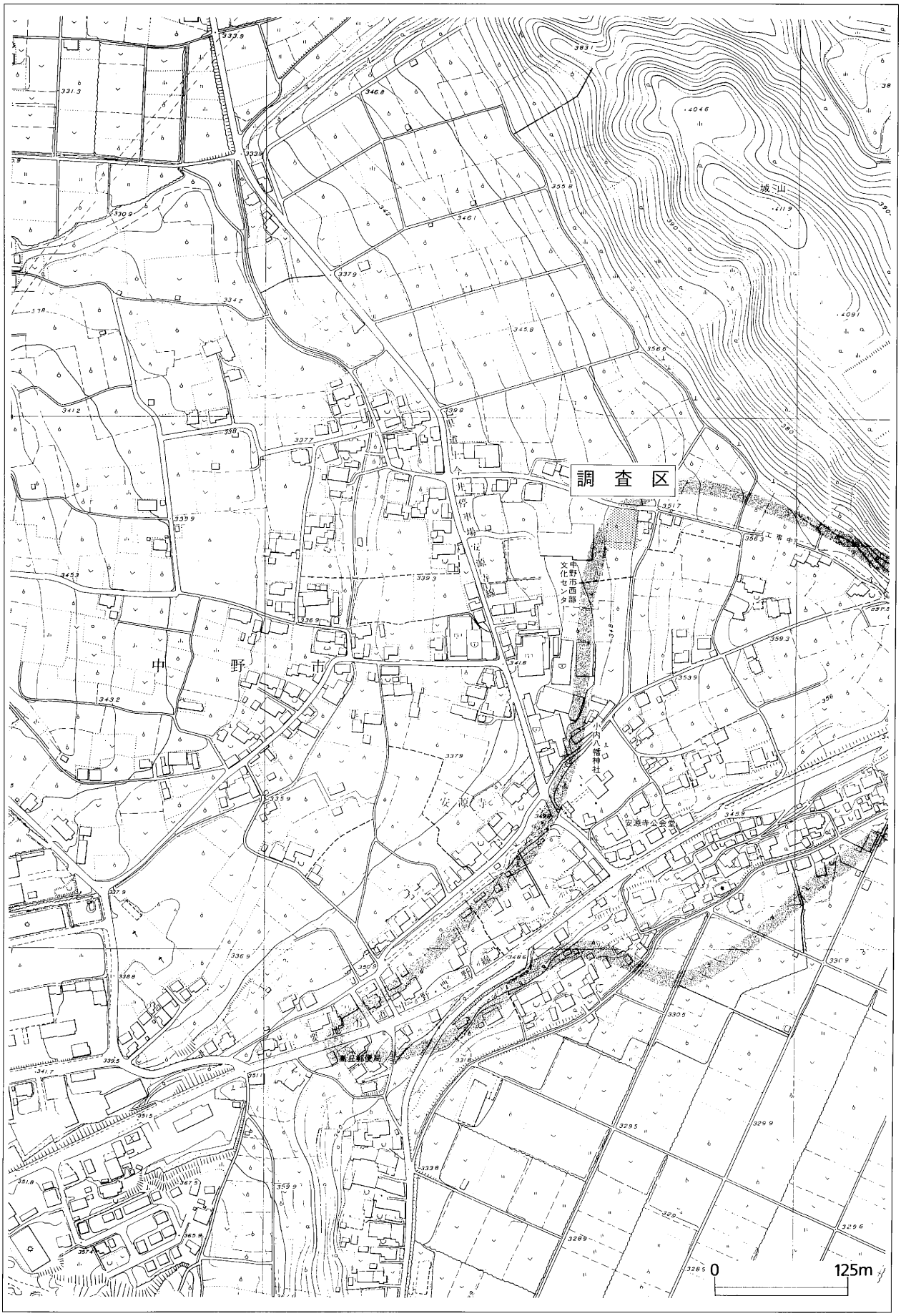
遺跡の立地する高丘丘陵は長丘丘陵と連続し、盆地の北西縁部を形成し、千曲川を挟んで、西側



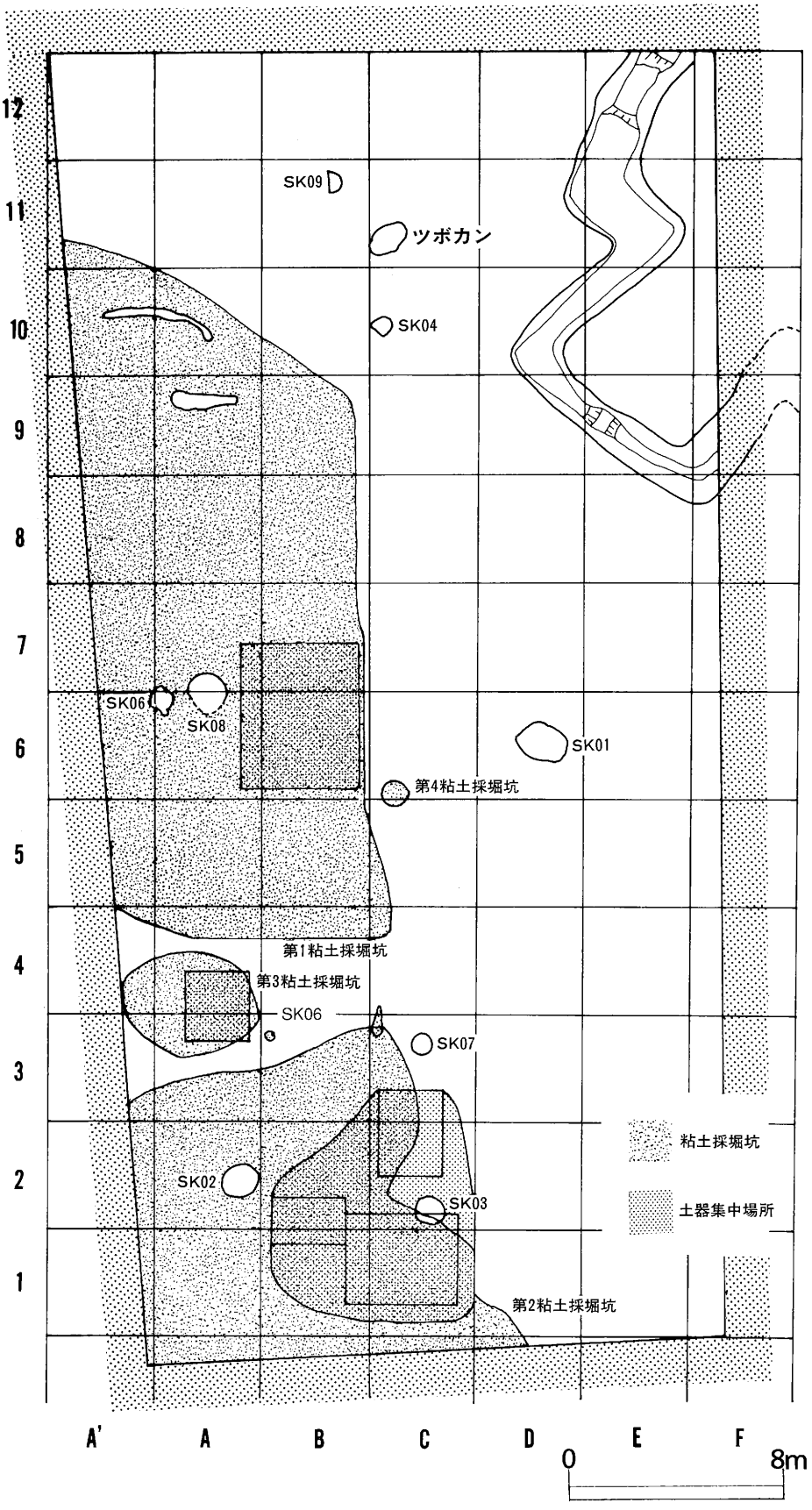
第１図　遺跡の位置



第２図　位置



第3図　調査区


12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A'
A
B
C
D
E
F
SK09
ツボカン
SK04
SK06
SK08
SK01
第4粘土採堀坑
第1粘土採堀坑
第3粘土採堀坑
SK06
SK07
SK02
SK03
第2粘土採堀坑
粘土採堀坑
土器集中場所
0
8m

第4図　遺構配置図

の豊野、赤塩、奥手山丘陵へと続く。千曲川はいわゆる先行性の河川で、丘陵地帯が隆起する以前からの原位置を保っているものと考えられる。連続する高丘、長丘丘陵は西部の豊野、赤塩、奥手山丘陵から、千曲川によって分断され、盆地部に向かって、南西にのびる半島状の地形を成している。高丘丘陵はその先端部分にあたる。

2　遺跡の立地

安源寺遺跡は高丘丘陵の頂部を中心に東西の緩斜面に広く広がる。

高丘丘陵は東側を延徳沖と呼ばれる低地、西側を千曲川で画された南北に延びる細長い丘陵で、低地との比高は約60ｍを測る。

安源寺遺跡の位置する丘陵部は頂部が平坦で、西側は緩やかな斜面を経て、千曲川にいたる。一方、東側は急斜面を介して低地へと連なる。

安源寺遺跡は平坦な頂部から緩やかな西斜面にかけて広がる。

遺跡は東西450、南北750ｍの範囲に広がるものと想定されるが、明確ではなく、さらに広い範囲となる可能性も否定できない。

今回調査した地点は、現在確認している遺跡の範囲の最も西側の部分にあたる。

3　これまでの調査

案源寺遺跡は、大正時代にすでに知られており、「高丘村誌」や「下高井郡誌」に記載されている。遺跡が学会に知られるようになったのは、昭和23年に第一次の栗林遺跡が発掘調査され、その報文中に「縄文・弥生・土師にわたる大複合遺跡である」と記載されてからである。

こうして、存在が知られた安源寺遺跡は昭和26年、畑地が果樹園に変更されるに先立ち、神田五六・田川幸生によって発掘調査が実施された。当時、弥生時代後期の変形住居址とみられていた遺構は、その後の検討から周溝墓である可能性が指摘されている。

さらに、昭和41年県道豊野－中野線の改良工事に伴い、金井汲次によって発掘調査が実施された。

この調査で弥生時代の23基からなる土壙墓群が検出されている。土壙墓は長軸1.5ｍ、短軸１ｍの楕円形を呈し、床面は船底状、平坦なものなどが発見されている。土壙墓の上面には破砕された土器片が覆っていた。特殊な例として、両縁にそって柱がはいされたもの、溝がめぐるものが検出されている。

昭和51年、さらに調査が実施され、弥生時代後期の住居址が三棟検出されている。

4　発見された遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓１基、同期のものと思われる粘土採掘穴３基、平安時代の土壙、中世の土壙、及び当該期の土器が発見されている。

特に、前方後方形周溝墓は当地域、長野盆地の古墳時代を考えるうえで、重要な発見となった。

また、粘土採掘穴も、全国的にはそう発見例の多いものではなく、古墳時代の土器製作を考えるうえで重要なものと考える。

Ⅱ　各　節

1　古墳時代前期の前方後方形周溝墓

1）遺構の所見（第5図）

①位置：

調査区の北東隅、D～F，8～13グリッドで検出した。本周溝墓よりやや西側に壺棺が1基検出されている。

②検出：

Ⅲ層の上面で検出したが、Ⅲ層は粘土質層で検出は困難であったため、遺構検出を明確にするためにやや強めに検出作業をおこなった。

なお、周溝墓はさらに調査区の外に延びており、全形を調査することはできなかった。

③規模形態：

前方後方形の周溝墓である。約三分の一を検出したにすぎない。

検出した部分から全景を推測すると、前長約23m、後方部幅約17m、前方部幅は9mを測る。後方部の長さは約16m、前方部は約7mであり、後方部は方形に近いものではないかと思われる。

周溝は前方部で途切れることなく連続しているが、ちょうど前方部の真ん中部分には、ブリッジ状の高まりがある。

また、周溝の屈曲部分の外側は溝の低部付近では強く屈曲するが、検出面では汚れ状に広がっていた。

したがって、周溝の屈曲部は上面での屈曲は弱く、緩やかなカーブを描く可能性があったが、調査時は木の根等の撹乱と判断した。

検出した後方部の周溝部分には、一段深くなる部分が連続して二ヶ所検出された。全形のわかる部分で計測すると、幅約80、長さ約280㎝、周溝底より約4～50㎝程堀り込まれた長方形を呈している。覆土は明確ではないがほぼ水平に堆積し、その上面には黄色味の強い土壌が堆積していた。人為的に埋没された可能性が高いと考える。

④遺物出土状況：

周溝の覆土内から破片が散発的に破片が検出されたが、周溝の屈曲部の溝底近くに集中して、完形品の鉢形土器が四個体集中して検出された。

また、溝底を一段掘り下げた部分の上面、褐色味の強い土壌の上面（溝底と同レベル）で壺形土器の半個体分の破片が検出されている。

⑤備考

周溝の内側の状況は畑の耕作によって削平されてていたため、マウンド等については確認できなかった。

周溝内に認められた一段深い落ち込みは、その平面形態や覆土の堆積状況から判断して、墓壙と推測している。

2）出土遺物（第7図）

1～4は周溝の屈曲部の溝底から、まとまって検出された鉢形土器である。1は口縁部が長く立ち上がり、偏平な胴部をもつ。口縁は刷毛整形の後ヨコナデが行われ、微妙な屈曲が観察できる。胴部はほぼ中位を横方向、上半部と下半部は縦方向の刷毛整形が認められる。2は全形を知ることができないが、1の器形をやや偏平にした器形になるものと思われる。口縁部はやや内湾するように立ち上がり、ヨコナデされれいる。胴部には斜め方向の刷毛成形が成される。3も2と同様な器形となる。底部は小さな凹状を呈する。口縁部と胴部上半部はヨコナデ、それ以下は斜め方向の刷毛成形が施されている。4は口縁がやや内湾するものの微妙な屈曲をもつ。口縁部と胴部上半部はヨコナデ、それより下位は斜め方向の刷毛成形が施される。

5、6は壺形土器、6は溝底が一段深く落ち込んだ部分で検出されたもので、ほぼ半個体分の破片であった。口縁部が微妙な屈曲をもちながら、「く」の字状に外反しながら立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し、最大胴部幅は中位にある。表面の風化が激しく、成形痕等を詳しく観察できないが、胴部下半部には刷毛成形痕が僅かに残り、口縁部や胴部はミガキが施されている。5も同様な壺形土器の下半部である。

2　古墳時代前期の粘土採掘穴

1）調査経過

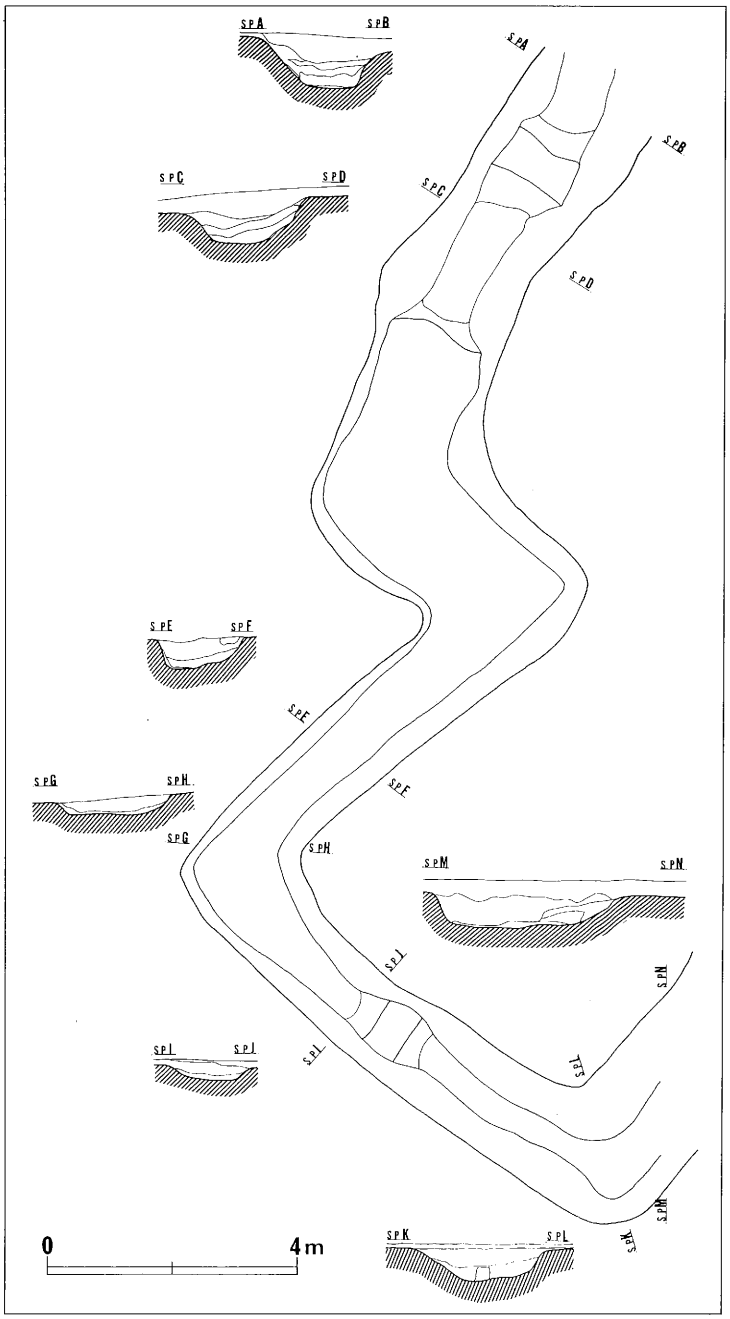
粘土採掘穴の確認はⅢ層上面でおこなった。しかし、調査の過程で最初から粘土採掘穴と確認できたわけではない。

まず、最初のⅢ層上面での遺構検出で、住居址が数棟切り合った、あるいは複数の土坑と考えられる刻色の不定形な落ち込みが確認された。検出面では、あたかも住居址覆土の上面のような遺物の集中した出土状況が観察された。

落ち込みの平面プランの切り合い関係等を明らかにするために、Ⅲ層上面での検出をさらに進めたが、落ち込みは不明瞭のままであり、さらに黒色の落ち込みの周囲も黒色土が混じりこんでいることが明らかになった。こうして、落ち込みの平面プランを追求すると調査区のほぼ二分の一に及ぶものとなってしまう。詳細に観察しても、遺構の重複とも考えられなかった。

面積が広く、人為的な遺構ではなく、埋没谷のような微地形ではないかと判断し、第10図に示したようにトレンチを設定し、重機によって掘削した。

こうしたトレンチ壁を観察したところ、第11・12図に示したような土層断面が明らかになり、粘土採掘穴ではないかと考えるにいたった。



第５図　前方後方形周溝墓

トレンチの土層等の観察から、広く広がった粘土採掘穴は一つのものではなく、３ないし４基の粘土採掘穴であることが明らかになった。

しかしながら、これらの粘土採掘穴をすべて掘り下げるためには余りにも土量が多く、断念せざるを得なかった。

2）遺構の所見

第１～４号粘土採掘穴が検出されている。第１号粘土採掘穴はＡ～Ｃ，４～７グリッドに位置し、12×10ｍの大きさを持ち、さらに西側の調査区外に広がっている。第２号土坑はＡ～Ｃ，１～４グリッド、Ｄ１グリッドに位置し、調査しただけでも約15×12ｍの大きさをもち、さらに調査区の南側に広がっている。第３号粘土採掘穴はＡ，３～４グリッドに位置し、約４×4.5ｍの大きさをもつ。

第４号粘土採掘穴はＣ，５～６グリッドに位置し、１×１ｍの大きさをもつ。第５号粘土採掘穴はＢ，３グリッドに位置し、0.4×0.3ｍの大きさをもつ。

第11図と12図に粘土採掘穴の土層模式図を示し

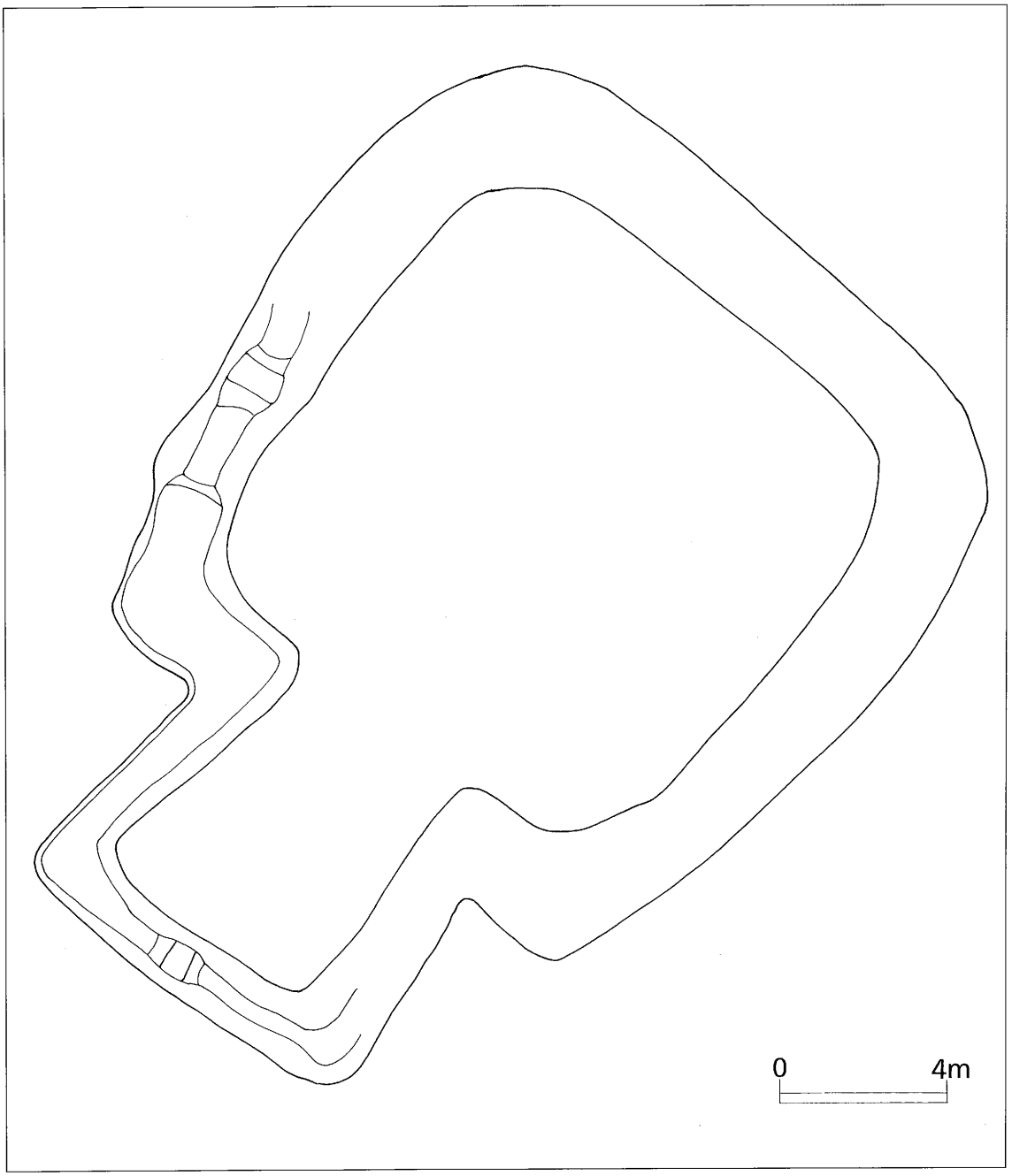
た。

④は粘土採掘穴の空洞に、黒色土と灰白色土（採取した粘土）が混じり合い、自然流入したものと考えられ、ほぼ粘土採掘穴の形状を見ることができる。

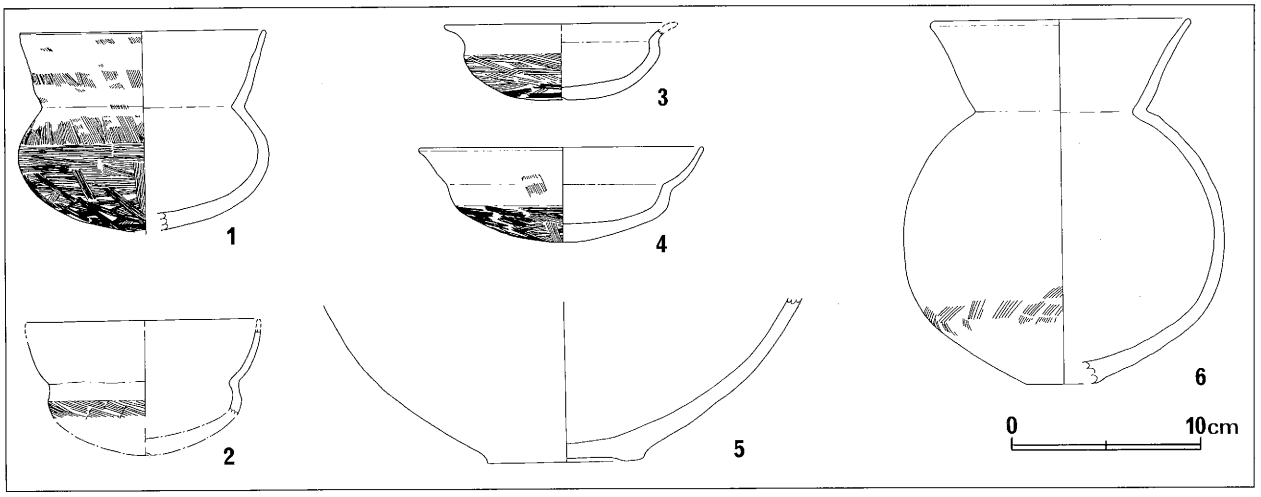
⑱は横方向の粘土採掘穴の天井部が、採掘間もなく崩落し、新たにできた空洞に、黒色土が自然流入したものと考える。崩落の原因には粘土採掘穴が大きくなりすぎたといったことも考えられよう。

⑧は横方向に上下二段に掘られた採掘穴内に黒色土が僅かに流入した後に、上下を隔てる部分が崩落したものと考えられ、覆土中には黒色土が縞状に堆積する。上位のものは下部に落ち込むように折れ曲がっている。この過程については第12図Cに模式的に示した。なお同図Bはその土層を細分したものである。

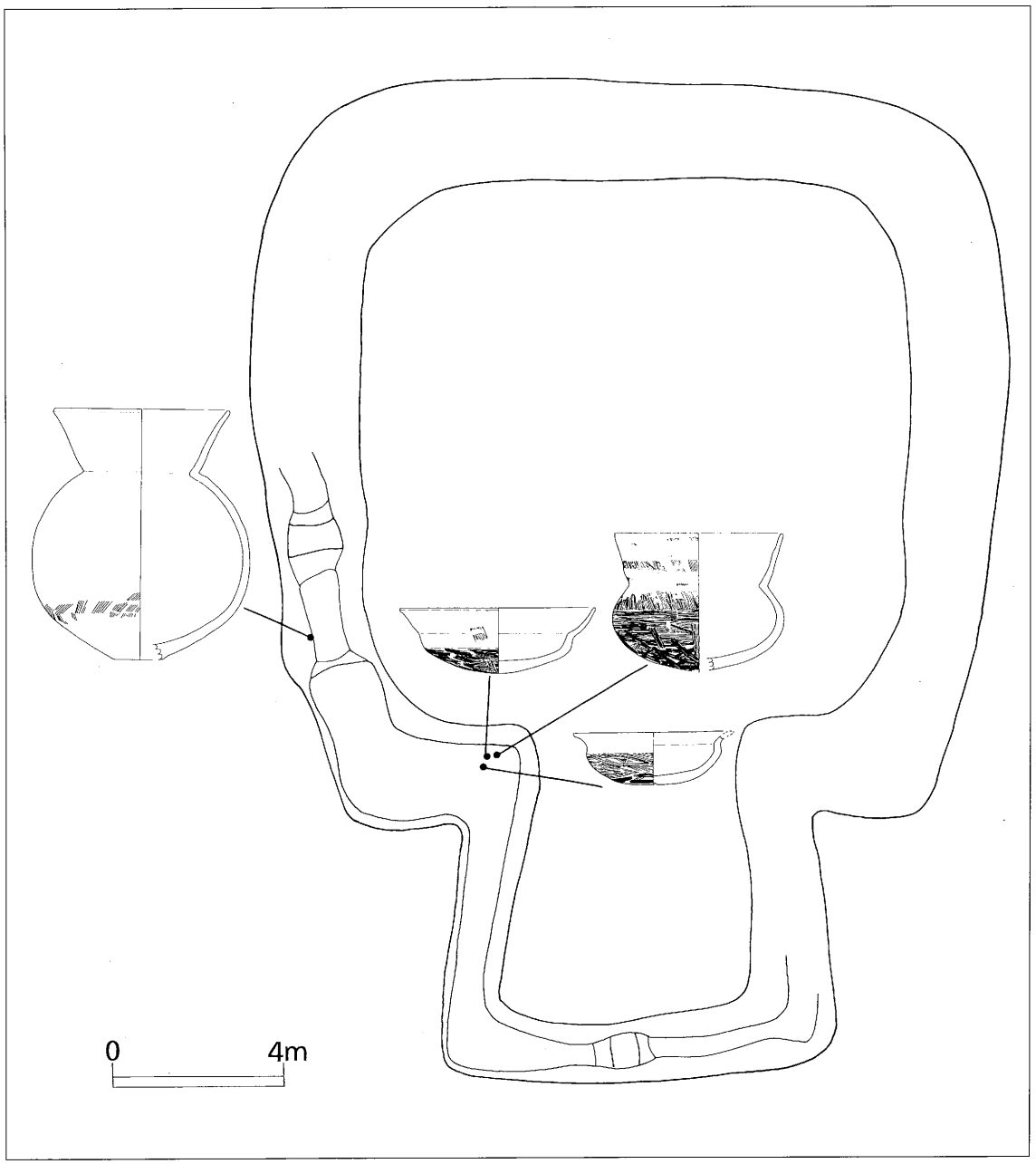
③は皿状になった採掘穴内に灰白色粘土（採取した粘土）と黒色土がブロック状に混じりあったものが堆積する例である。自然流入したものとか、



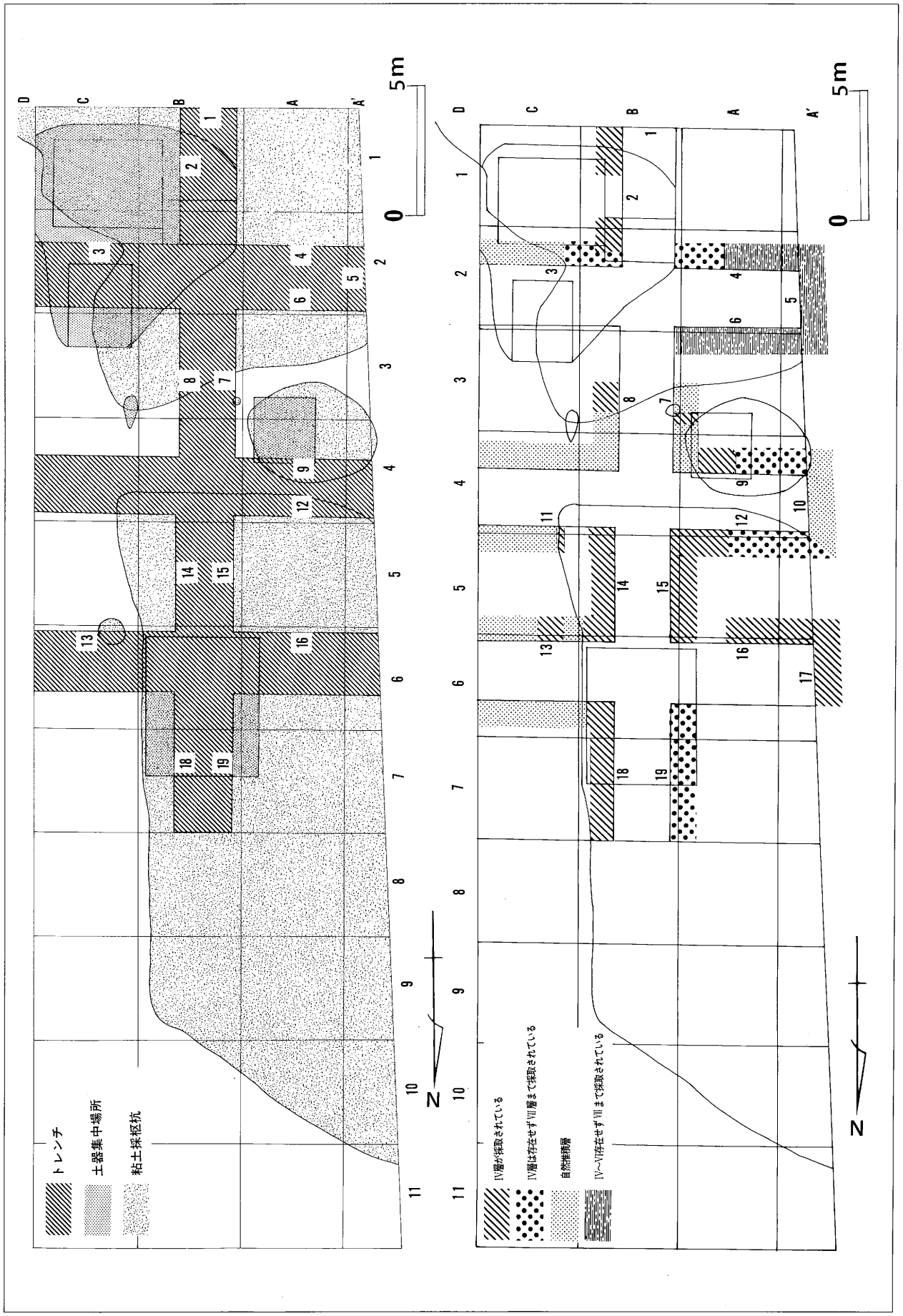
第６図　前方後方形周溝墓復元図



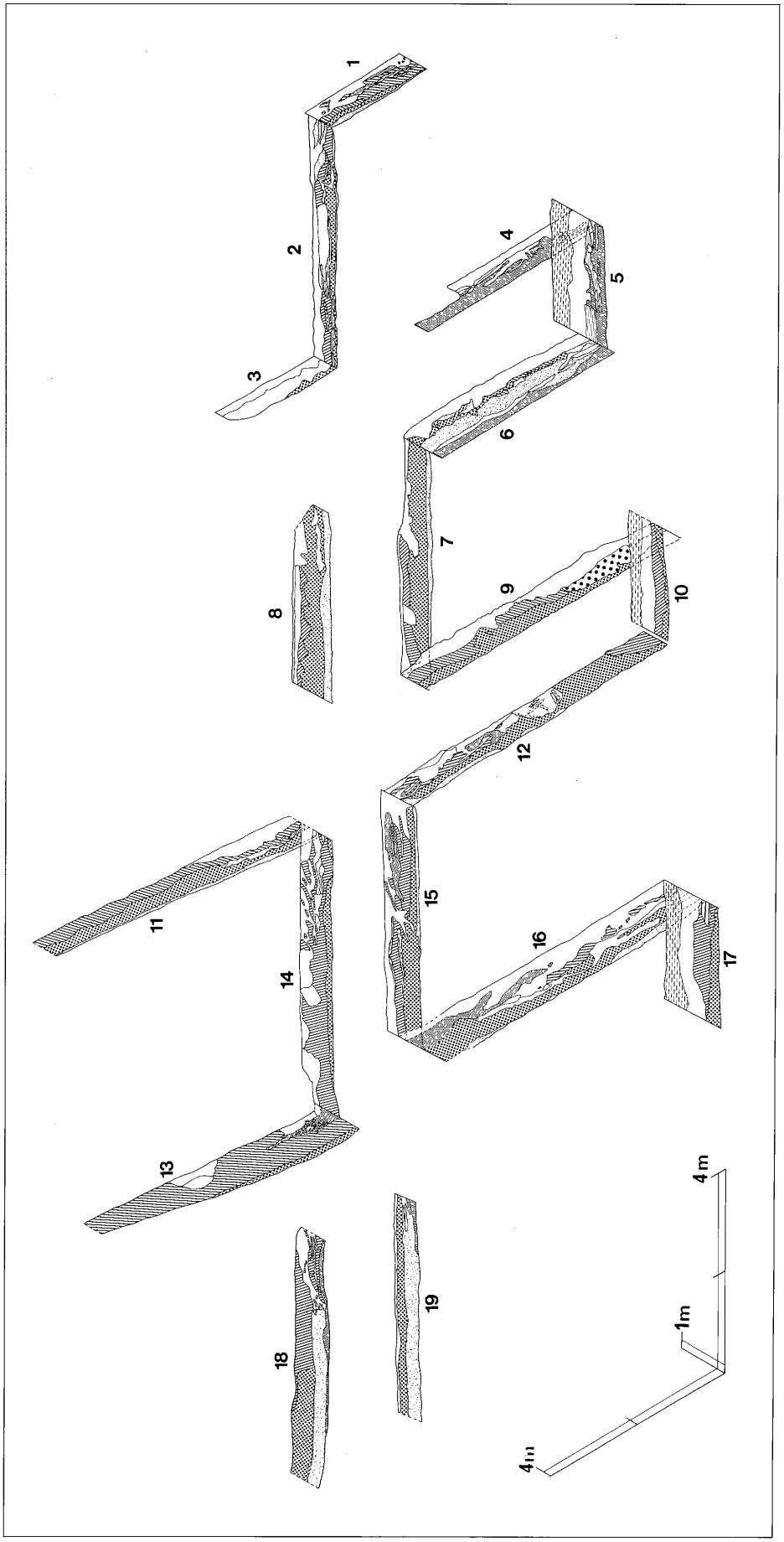
第７図　前方後方形周溝墓出土の土器



第８図　遺物分布



第９図　粘土採掘坑の分布図



第10図　粘土採掘坑の断面図

I 表　土

II 黒色土

III 黄色土

IV 黄色粘質土

V 灰白色粘土

VI 赤黄色粘質土

VII 白黄色粘土

8 黒土に灰白粘土ブロックが混入している。

9 黒土に白黄色粘土ブロックが混入している。

10 黒土に黄色粘質土ブロックが混入している。

11 黄色粘質土に灰白粘土ブロックと黒土ブロックが混入している。

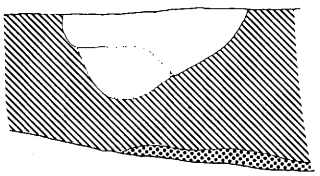
12 黒土ブロックと灰白粘土ブロックと黄色粘質土ブロックが混じり合う。

13 黒土ブロックと灰白粘土ブロックが混じりあう。

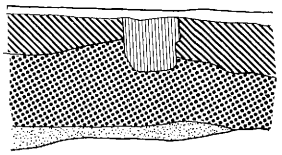
14 黒土ブロックと黄色粘質土ブロックが混じりあう。

15 黄色粘質土に黒土と灰色粘土ブロックと黄色粘質土ブロックが混じり合う。

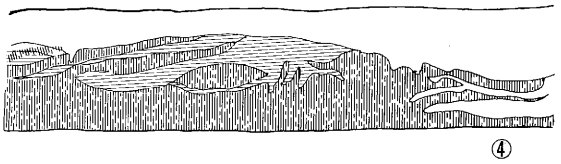
16 黄色粘質土に黒土モヤと黒土ブロックが混じる。



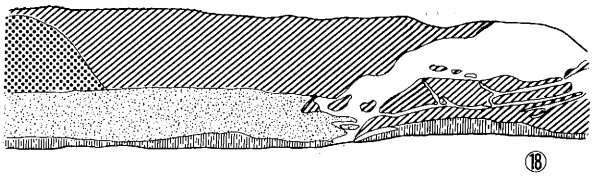
第4号 採堀坑断面図



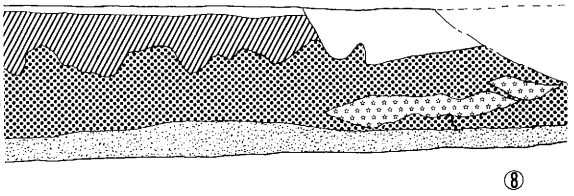
第5号 採堀坑断面図



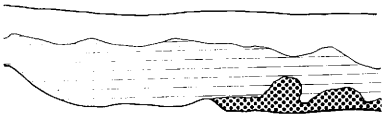
④



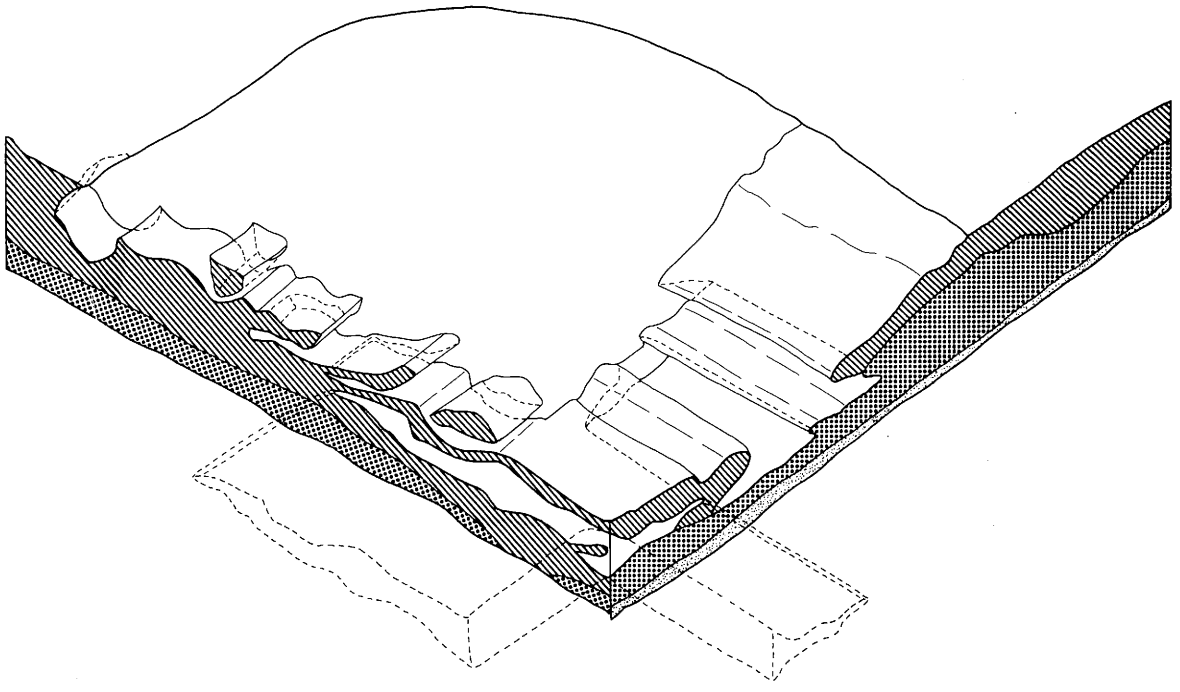
⑱



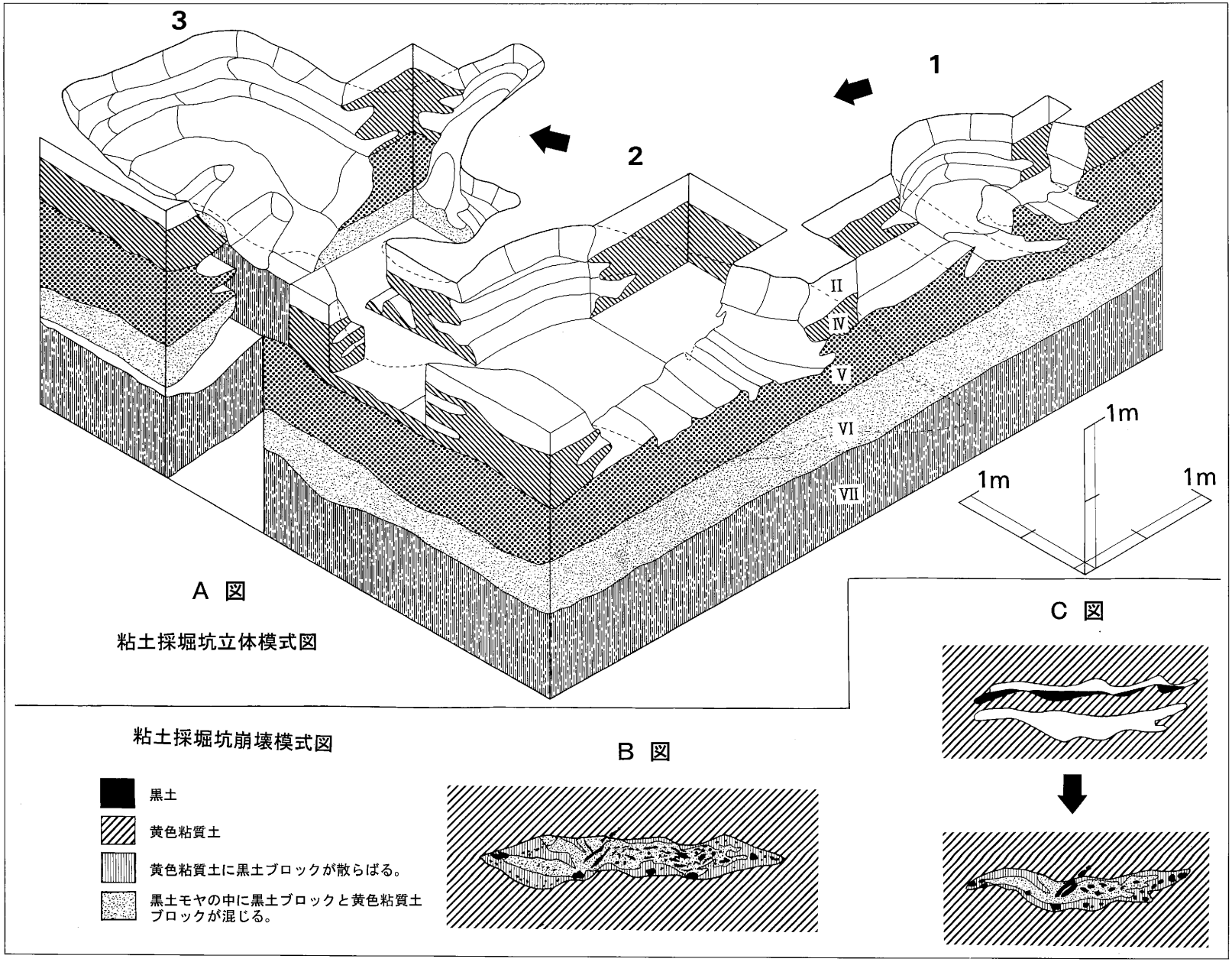
⑧



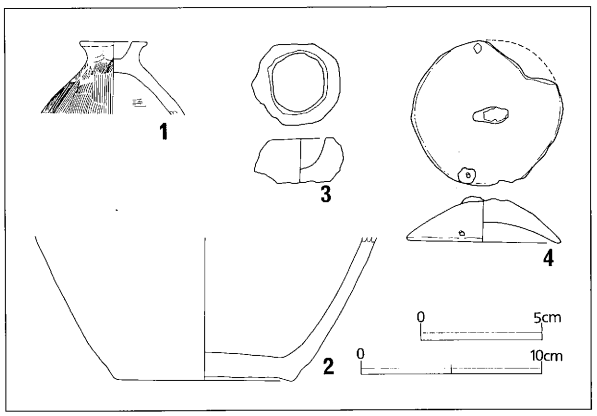
③



第11図　粘土採掘坑の模式図（1）



第12図　粘土採掘坑の模式図（2）



第13図　粘土採掘坑出土の遺物（１）

崩落したものとも考えられず、粘土を採掘した残土を粘土採掘穴に捨てたものと思われる。

粘土採掘穴は断面土層を観察すると、次のように採掘されたと思われる。(第12図)。

まず、人一人が作業できるほどの適当な大きさに、目的とする粘土層にいたるまで縦穴を掘る。次に、適当な方向に粘土層を横穴状に採掘する。場所によっては下方にも横穴状に広げることがある。ある程度の広さになると、溝状に拡張する場合と隣接下部分で同じ作業を繰り返すことがある。おそらく、採掘穴が横穴状に広がりすぎ、粘土の採掘が困難がなったり、良質の粘土が採取できなくなる、あるいは粘土層が薄くなりすぎ、作業効率が落ちる為と思われる。

次に採取対象となった粘土層について考えてみよう。第10図は欠落する土層を表現したものである。最も欠落するのは第Ⅳ層黄色粘土層である、したがって、採取する粘土は第Ⅳ層であったと考えられる。しかし、第Ⅴ、Ⅵ層、Ⅶ層が欠落する部分もある。これらも採取の対象となっていたものと思われるが、第Ⅵ層については避けて第Ⅶ層を採取している部分があり、第Ⅵ層は対象外であったことも考えられる。第Ⅴ層の欠落は第Ⅳ層についで多い。

粘土採掘穴の覆土からは土器は検出されなかったが、拳大から人頭よりやや小さい礫が出土している。

２）遺物

粘土採掘穴の上面から箱清水式の土器の破片が出土しているが、実測できるような個体に復元できたものはなかった。

第13図１は蓋形土器、２は甕形土器の底部、３はミニュチュア土器、４は蓋形土器である。

第15図１は粘土採掘穴上面から出土した磨製石斧の破片。２～４は叩き石。いずれも細長い川原石の両端に叩き痕が残る。２と４は叩面は上下面とも平坦になっているが、３はやや趣を異にし、剥離痕が目立ち、叩面も平坦でない。粘土採掘穴の覆土から出土している。５～10は凹石である。凹石は原則的に縄文時代の遺物と考えられるが、調査区内からは縄文土器片は確認されていない。

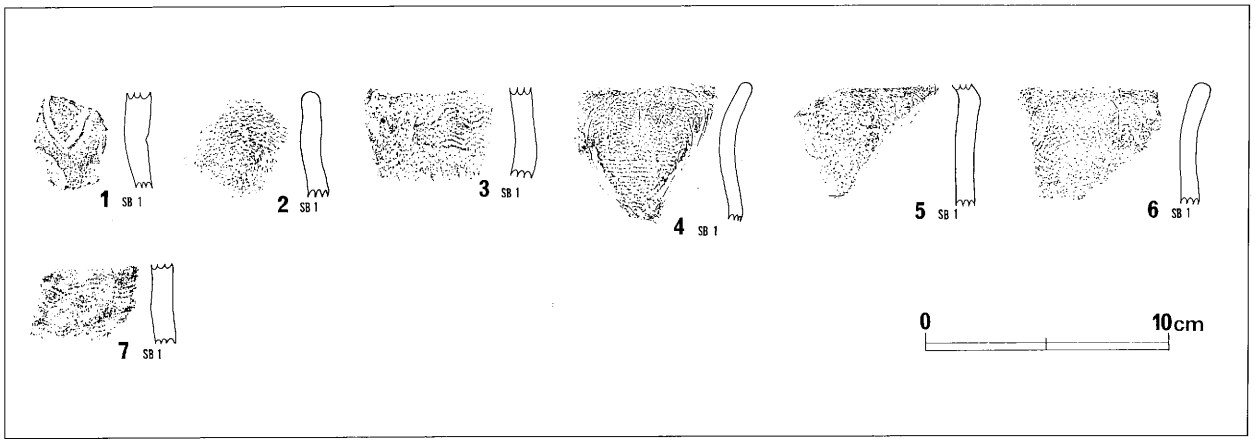
３　平安時代の土坑

平安時代の遺構と明確に判断できるものは１基のみであった。

１遺構の所見（第16図）

・１号土坑（第16図１）

①位置：



第14図　粘土採掘坑出土の遺物（２）

Ｄ６グリッド

②検出：

第Ⅲ層上面

③規模と形態：

約190×149㎝、深さ約10㎝の楕円形の平面プランを有し、断面はたらい状を呈す。

④遺物出土状況：

土坑北壁に偏して、須恵器の坏が完形で二個体検出された。

⑤覆土堆積状況：

壁の立ち上がりが小さく不明。

⑥時期：

平安時代

⑦備考：

性格は不明。須恵器杯が出土している（第16図　１、２）。

第４節　中世の土坑

１遺構の所見

・第２号土坑（第16図）

①位置：

Ａ，２グリッドに位置する。

②検出：

粘土採掘穴上面にて検出した。礫が露出した状態で検出した。

③規模と形態：

約130×140㎝のほぼ円形の平面形を有し、深さ約50㎝のすり鉢状の断面を呈する。

④遺物出土状況：

１から２層の上面にかけて検出されたが、いずれも東壁側に偏っていた。弥生土器片および中世土師質皿片を検出した。

⑤覆土堆積状況：

粘土が混入するか否かで、二層に分層した。下層の２層に粘土粒子が混入する。粘土採掘穴内に位置することから、若干掘りすぎた可能性もある。

⑥時期：

中世

⑦備考：

粘土採掘穴内に位置する。

・第３号土坑（第16図）

①位置：

Ｃ，２グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面で検出された。

③規模と形態：

約110×100㎝の楕円形の平面形を有し、深さ約50㎝のすり鉢状の断面形を呈する。

④遺物出土状況：

土器片、人頭大の礫がⅠ層からⅡ層上面にて検出された。出土した土器片には珠洲系の破片が含まれる。

⑤覆土堆積状況：

３層に分層された。

⑥時期：

中世

⑦備考：

特に無し。

・第４号土坑（第16図）

①位置：

Ｃ，10グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出。

③規模と形態：

80×70㎝の楕円形の平面形を呈し、深さ約25㎝のすり鉢状の断面を呈する。

④遺物出土状況：

１層下面に拳大の礫が出土している。

⑤覆土堆積状況

二層に分層された。２層中に粘土が混入することで分層した。

⑥時期：

不明

⑦備考：

特になし。

・第５号土坑（第16図）

①位置：

Ｂ，３グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出した。

③規模と形態：

約40×40㎝のほぼ円形の平面形を有し、深さ約30㎝のすり鉢状の断面形を有する。

④遺物出土状況：

１層より僅かに土器片が出土した。

⑤覆土堆積状況

粘土粒子が混入するか否かで、二層に分層した。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

特に無し。

・第６号土坑

①位置：

A’～A，６～７グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出。

③規模と形態：

約90×90㎝の楕円形の平面形態を有し、深さ約35㎝のすり鉢状の断面形を有する。

④遺物出土状況：

２層上面と底部で拳大の礫が出土した。

⑤覆土堆積状況：

２層に分層される。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

特に無し。

・第７号土坑（第16図）

①位置：

Ｃ，３グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出

③規模と形態：

約90×80㎝のほぼ円形の平面形を有し、深さ約40㎝のすり鉢状の断面形を有する。

④遺物出土状況：

Ⅰ層より僅かに土器片が出土した。

⑤覆土堆積状況：

粘土粒子が混入するか否かで、二層に分層した。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

特に無し。

・第８号土坑（第16図）

①位置：

Ａ，６～７グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面で検出。

③規模と形態：

158×144㎝の楕円形の平面形を有し、断面すり鉢状を呈する。

④遺物出土状況：

覆土中位から下位にかけて土器片や礫が出土している。土坑底部より土器の底部の大きめの破片が出土している。

⑤覆土堆積状況：

雨水により、調査中にセクションベルトが崩れてしまった為に確認することはできなかった。

⑥時期：

弥生時代後期～古墳時代。

⑦備考：

粘土採掘穴跡に造られている。

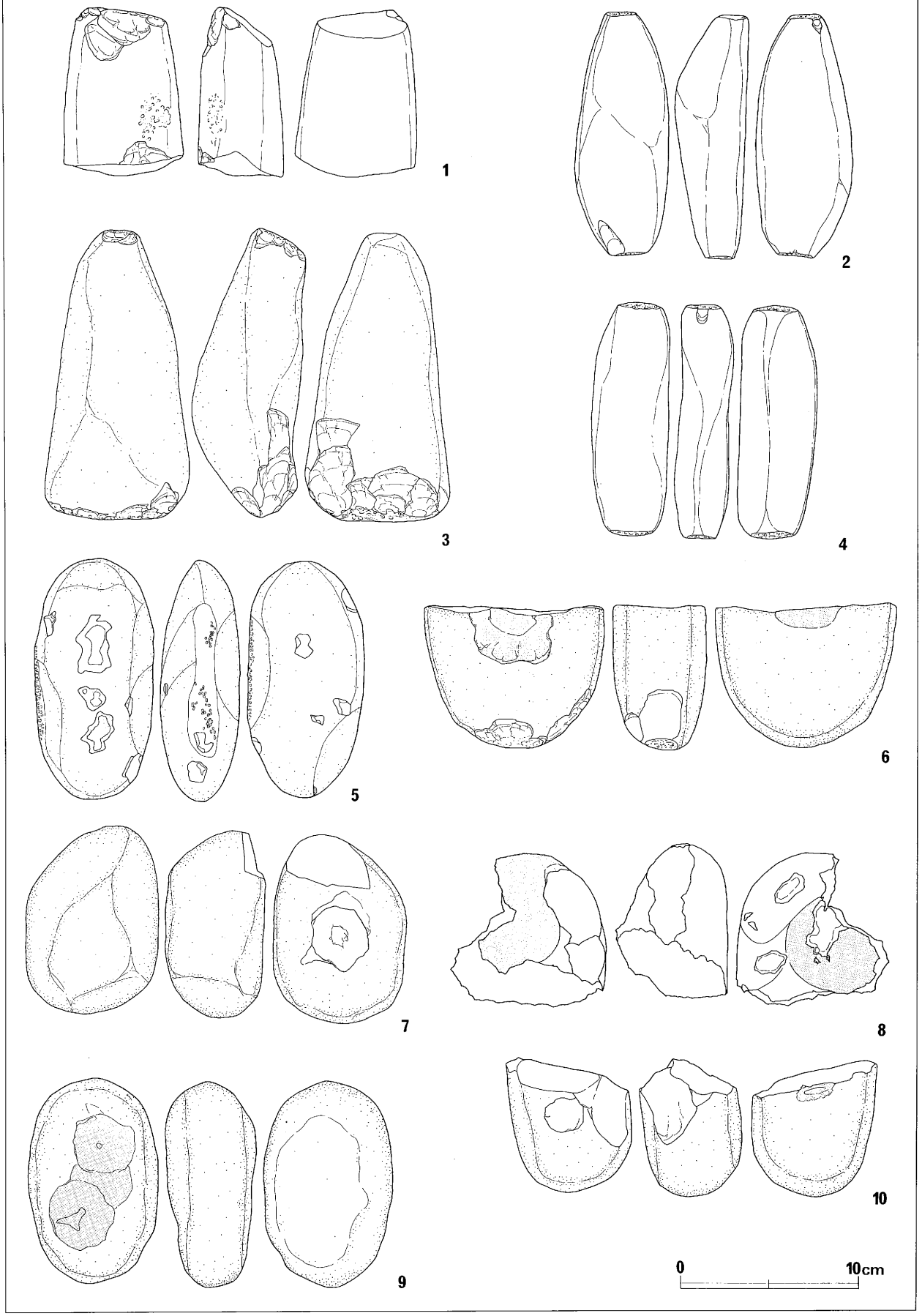
・第９号土坑（第16図）

①位置：

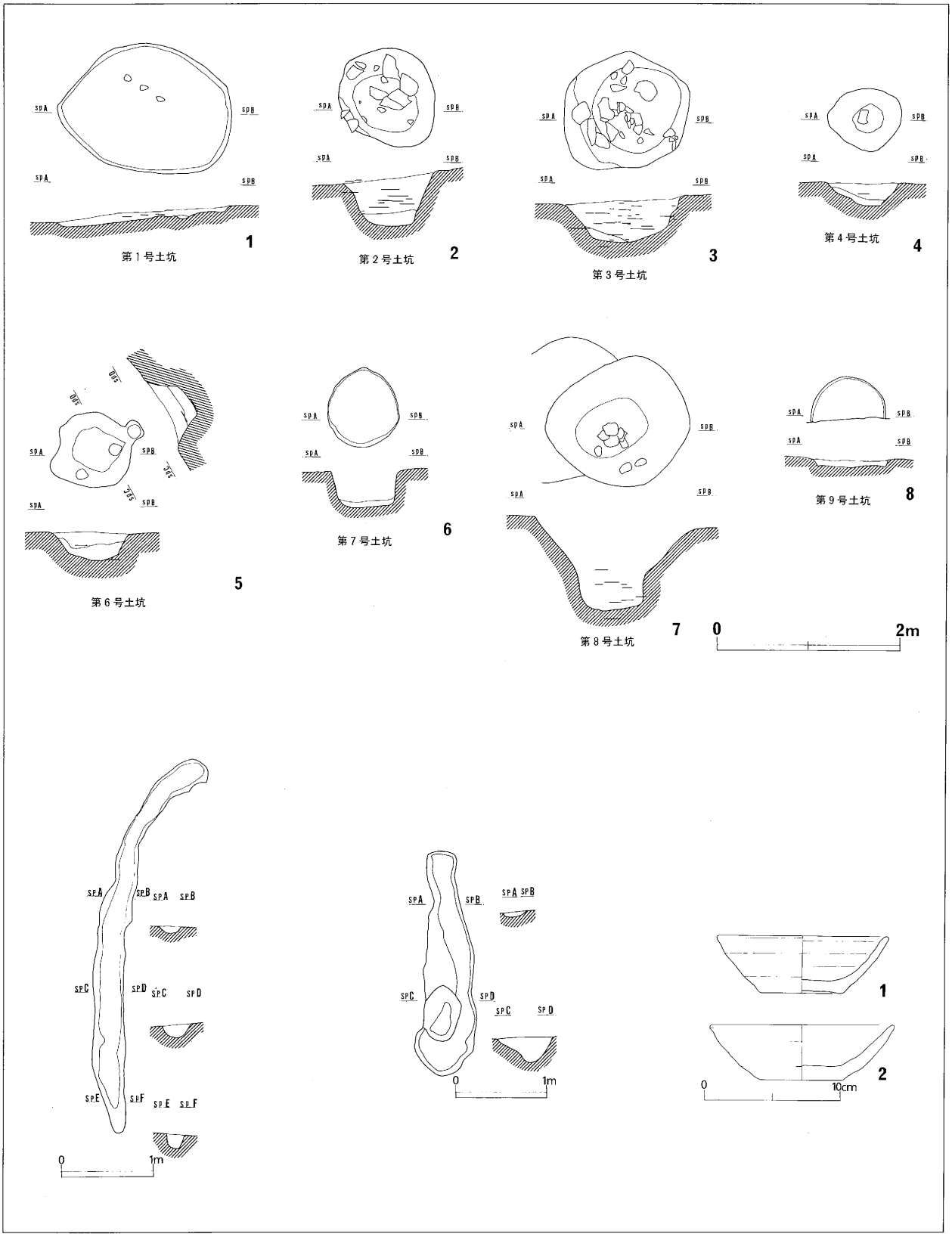
Ｂ，11グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面で検出したが、土坑の西側半分は後世の溝の為に撹乱されている。また、開墾による削平が著しく、壁の立ち上がりは小さい。



第15図　粘土採掘坑出土の遺物（３）



第16図　古墳時代以降の遺構

③規模と形態：

80×80㎝のほぼ円形の平面形を有し、深さ約8㎝の断面たらい状を呈する。

④遺物出土状況：

覆土中に弥生時代後期の小土器片が出土したのみである。

⑤覆土堆積状況：

覆土堆積状況彫り込みが浅く、覆土は分層できなかった。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

特になし。

第1号溝（第16図）

①位置：

A'～A，10グリットに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出した。

③規模と形態：

幅約40～20㎝、深さ約20㎝のU字形の断面形を呈し、全長5ｍ。

④遺物出土状況：

弥生時代後期と思われる土器片が数点、覆土中から出土した。

⑤覆土堆積状況：

単層。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

不明。

第2号溝（第16図）

①位置：

A，9グリッドに位置する。

②検出：

Ⅲ層上面にて検出。

③規模と形態：

幅約70～30㎝、深さ4～30㎝を計測し、深い部分はすり鉢状、浅い部分はU字状の断面形を呈する。

④遺物出土状況：

出土しなかった。

⑤覆土堆積状況：

単層。

⑥時期：

不明。

⑦備考：

Ⅲ　まとめにかえて

今回の調査では前方後方形周溝墓と粘土採掘穴が検出された。

弥生時代後期から前期にかけての遺跡（安源寺遺跡、間山遺跡、七瀬遺跡等）が中野市ではいくつか知られているが、これらの遺跡では外来系（東海系）の土器群が顕著であることが指摘されている。

また、隣接市である飯山市の勘介山古墳、中野市の蟹沢古墳は前方後方墳として知られている。

こうした背景の中で今回前方後方形周溝墓が検出され、注目している。前方後方形周溝墓の周溝内から検出された土器群は古墳時代前期のものと考えられるが、弥生後期から古墳前期にかけての細分された段階区分に位置づけることはできなかった。当該土器群の偏年的位置づけは極めて重要な課題であり、今後さらに検討を加えたい。

粘土採掘穴についてはそう事例の多い遺構ではないと思われるが、中野市高丘地籍においてはかなりの頻度で検出される。高丘地籍は戦前まで、地元の粘土を用いて屋根瓦が生産されており、粘土の質に関係しているのであろうか。今回検出した粘土採掘穴は規模が大きく、採取した粘土量も相当なものである。こうした粘土がどのように利用されたのか、今後の大きな課題である。

また、安源寺遺跡から須恵器坏が検出されたが、中野市高丘地籍には著名な草間古窯址群がある。今回出土した須恵器坏も地元産であろうと推測されるが、細かい地域偏年が完成しておらず、その偏年的位置づけについては不明である。巻末に、金井汲次氏の協力を頂いて、草間古窯址出土の須恵器で、中野市が所蔵しているものを参考の為に

図示した。

安源寺遺跡の調査は思いもよらない成果を得ており、それらを情報化しなけらばならないが、微力のため力が及ばなかった。今後様々な機会を得て、分析結果を公表したい。

附　編

安源寺遺跡の意義

—はじめて報告書を読れた方へ—

赤い土器の国（弥生時代後期）

中野市の弥生時代は前の時代である縄文時代の土器文様を色濃く残した栗林式土器の時代に始まる。やがて、弥生時代中期の栗林式土器に見られた縄文的色彩は時代が新しくなるにつれてうすれていき、やがて新しい形態と文様をもった土器が出現する。新しく生まれた土器群の中で、壺形土器は大きく、赤く塗られいた。壺形土器を赤く塗る習慣は栗林式土器の時代にもあったが、新しく生まれた壺形土器のそれは鮮烈であった。いつしか、赤い土器という呼称が生まれた。赤い土器、正式な名称は箱清水式土器といい、弥生時代後期の土器であり、中野市安源寺遺跡や七瀬遺跡は箱清水式土器の時代の代表的な遺跡である。

この赤い土器が使われる時代は、二・三世紀であると考えられている。後漢書東夷伝や魏志倭人伝によれば、すでにクニと呼ばれる単位があり、倭は大いに乱れ、やがて邪馬台国の女王卑弥呼があらわれ、魏に朝貢したと記された時代である。

ところで、何々式土器、例えば栗林式土器、箱清水式土器という呼び方は考古学で使う用語で、共通の特徴をもつ土器群全体を指す言葉である。たとえば、栗林式土器は中野市栗林遺跡から出土した土器と同じ特徴をもった土器のことをいう。同様に、箱清水式土器には箱清水式土器の特徴がある。こうした同じ特徴をもった土器を考古学では型式と呼んでいる。そして、同じ風俗や習慣、あるいは同じ政治組織の集団によって、つくられた土器が型式になると考えられている。

もし、こうした考え方が正しいとすれば、私たちは遠い昔の集団の様子を知ることができよう。そうした目で、後期の中部日本の中の北信濃を見つめ直してみよう。

箱清水式土器は千曲川水系と犀川水系、長野盆地・松本平・佐久平に分布している。千曲川は新潟県に入って信濃川と名を改めるが、不思議に信濃川になってからは箱清水式土器は分布は少なくなり、新潟県十日町より下流は極端に少なくなる。一方、諏訪盆地から山梨県の甲府市にかけては箱清水式土器とは良く似ているが、異なる部分をもつ土器型式が分布している。また、群馬県の利根川の上流地域、前橋市の付近にも、箱清水式土器にたいへん良く似た土器群が分布し、剣崎式と呼ばれている。これらの各土器型式は互いに良く似ており、大きく一纏めにしても良いといえよう。

また、神奈川県の一部にも朝光原式土器と呼ばれる箱清水式土器に良く似た土器型式が分布する。ところが、大変不思議なことにこの土器型式ではかめ形土器や高杯形土器は大変良く似ているにもかかわらず、壺形土器は全く異なっているのである。

一方、同じ長野県にあり、箱清水式土器の分布圏と隣接しながら、全く様相を異にする土器群が天竜川水系にあり、中島式と呼ばれている。同様に、千曲川と同じ水系にある信濃川流域にも、箱清水式土器は全く様相を異にする土器型式が分布している。

今のところ、倭国多いに乱れるといわれる様子は確認できないが、クニと呼ばれる単位が存在し、互いに複雑な関係をもちながら並立していた事をうかがわせる。北信濃は赤い土器のクニの北のはずれに位置し、畿内地方との結びつきが強い北陸に隣接していた。

この地理的条件が、次の時代である古墳時代のはじまりに、大きな役割を果たす条件を蓄えたのであろう。

安源寺遺跡の意義

中野市の市街地をぬけ、県道中野・豊野線を西に向かうと、前方になだらかな高丘丘陵の姿が見えてくる。水田地帯をぬけ、丘陵の斜面を登りきると、安源寺の交差点にいたる。

交差点の西側に小内八幡神社がある。延喜式にもその名が見え、大きな欅の木が何本もそびえ、社の歴史の古さをうかがわせる。この小内八幡神社の北側の丘陵上一帯に旧石器時代から中世にい

たる大きな遺跡が地下に眠っている。

安源寺遺跡と呼ばれ、古くから著名な遺跡として知られ、すでに「高丘村村史」、「下高井郡誌」に記載されている。昭和26年には神田五六氏・田川幸生氏、昭和46には金井汲次氏、51年には中野市教育委員会によって、部分的な発掘調査であるが、合計３回ほど行われた。こうした調査から、遺跡の様子が少しづつ明らかにされきた。

昨年９月、中野市教育委員会によって、安源寺遺跡の４回目の発掘調査が実施され、「前方後方形周溝墓（ぜんぽうこうほうけいしゅうこうぼ）」と呼ばれる古墳時代始め頃の墓が発見された。

安源寺遺跡の重要性が再認識されるとともに、多くの人々の注目集めたことは記憶に新しい。

なぜ、安源寺遺跡から発見された「前方後方形周溝墓」が多くの人々の注目を集めたのであろうか。

弥生時代の終わり頃から、古墳時代はじめ頃の安源寺遺跡に焦点をあて、安源寺遺跡のもつ意義について考えてみよう。

そのために、まず原始時代の大まかな歴史を概観しておこう。日本列島に人類が登場するのは今から約十数万年前のことである。この時代を旧石器時代（10数万から１万２千年前）と呼ぶ。この時代の人々は今では絶滅してしまったナウマン象や大角鹿などの大形動物を石の道具（石器）で狩って暮らしていた。

やがて、今から約１万２千年ほど前になると土器が使われるようになる。土器に細い縄を転がした文様（縄文と呼ばれる）がつけられていることから、縄文時代と呼ばれている。この時代の人々もやはり狩猟と採集の生活をおくっていた。

今から、約２千５百年ほど前になると大陸から稲つくりの技術が北九州に伝来する。動物を捕ったり、植物を集めて暮らした狩猟採集の社会から農耕社会へと大きく移り変わったのである。稲づくりの始まったこの時代を弥生時代と呼んでいる。

そして、今から千三百五十年程前、三世紀の中頃、畿内地方に大きな前方後円墳が登場し、古墳時代が始まる。

畿内に登場した前方後円墳は日本全国に広まる。

前方後円墳が全国に広まる過程は、それまで小さな国と呼ばれる単位に分かれていた日本が一つに統一されていく過程であると考えられている。

この頃の様子の一端を、中国の歴史書が伝えている。後漢書東夷伝や魏志倭人伝に記載されている邪馬台国や女王卑弥呼がちょうど三世紀にあたり、女王卑弥呼が死ぬのが、三世紀の半ばである。女王の死を境に不安定な情勢がおとずれたことが読み取れる記載がある。

おそらく、日本列島全体が大きな時代の変化を遂げようと胎動を始めたのであろう。

最近の考古学の成果からも、弥生時代の終わり頃から大きな変化が見られることが指摘されている。

安源寺遺跡はちょうど日本列島が統一に向けて大きく変化しようとしている時代に営まれていたのである。日本列島全体の大きな動きを反映しながら、しかも北信濃地域の独自の歴史の歩みが安源寺遺跡に刻まれているのである。安源寺遺跡の重要性はここにある。

さて、話は前後するが、北信濃の弥生時代の様子からみてみよう。。

北九州に伝来した水稲耕作を伴った弥生文化は日本列島に全体に広まり、北信濃に弥生文化の確かな存在が知られるようになるのは、西日本よりやや遅れ、弥生時代中期と呼ばれる時代になってからである。

中野市栗林地籍にある栗林遺跡は千曲川水系の弥生時代中期後半の遺跡として有名である。縄文時代の伝統を残す弥生式土器は栗林式土器と呼ばれ、千曲川水系に分布している。

弥生時代の後期になると、栗林式土器は時間とともに徐々に変化し、櫛歯の文様のつけられた箱清水式土器がつくられるようになる。特に壷形の土器は赤く塗られ、美しい。箱清水式土器も栗林

式土器と同様に千曲川水系に広がっており、弥生時代後期の指標となっている。

弥生時代の終わり頃になると、箱清水式土器と一緒に他地方でつくられた土器や他地方の土器を模倣した土器が発見される。持ち込まれたり、模倣される土器は、北陸地方や東海地方西部の土器である。安源寺遺跡においてもそうした土器が発見されている。最初は隣接する北陸地方の土器が顕著であるが、しばらくすると東海地方の影響が顕著になり、遺跡での占める割合も大きくなる。

おそらく、北陸地方や東海地方の西部から人々が移り住んだか、大きな影響を受けた結果であろう。

こうして、3世紀からつくられた箱清水式土器は、4世紀になると、こうした他地域の影響を受けて、徐々に変化し、古墳時代固有の土器に変化する。そして、しばらくすると大きな古墳が造られるようになる。

北信地方最古の古墳である更埴市森将軍塚古墳が築造されるのは4世紀の半ばである。畿内に前方後円墳が出現してから約1世紀が経過している。

これまで、北信濃の古墳文化の始まりは次のように考えられている。

箱清水式土器に代表される弥生文化は、北陸や東海地方西部の影響を受けて徐々に変化し、やがて善光寺平の南縁に、森将軍塚古墳の築造に示されるような大きな勢力が誕生し、善光寺平全体に勢力を拡張する。

先に述べたように北信濃に古墳が造られるのは畿内から約1世紀遅れた4世紀半ばのことである。

とすれば、大きな前方後円墳が出現するまでの間はどの様なものだったのであろうか。弥生文化の伝統がそのまま続けられる孤立した地域であったのであろうか。

しかし、それでは東海地方西部の影響を受けて、大きく変化した土器はいったい何を意味しているのであろうか。

近年、弥生時代の終わり頃から古墳時代の始まりにかけての研究が進み、東日本の古墳時代の様子が徐々に明らかになってきた。

最近の研究によると、まず弥生時代の終わり頃から、東海地方の土器が多くなる。そのあり方は平均して広い地域に見られるのではなく、東海系の土器が特に多く発見される地域が現れる。こうした東海地方西部の強い影響をうけた地域がまず斑状に出現し、古墳時代の成立に先進的な役割を果たしつつ、前方後円墳に代表される古墳文化に移行するとされる。

すなわち、東日本の古墳時代のはじまりは、まず弥生時代の終わり頃から東海地方西部の強い影響をうけた地域が登場し、古墳時代への先進的な役割を果たす。そして、その後に前方後円墳に代表される畿内勢力によって統一されるというのである。

善光寺平でも同様の現象が見られるに違いないと研究者たちは考えていた。その地域は北信濃で最大最古の前方後円墳をはじめ、多くの大形古墳の分布する善光寺平の南縁の地域であろうと予想された。しかし、今のところそうした事実は認められない。

ところで、安源寺遺跡を代表に中野市には間山遺跡や西条岩船遺跡、新野遺跡などの弥生時代後期の遺跡があり、古い段階の東海系の土器群が多く発見されていた。こうした遺跡のあり方が注目され、中野市周辺地域が東海地方西部の強い影響を受け、古墳時代の成立に先進的な役割をはたした地域ではないだろうかと考える研究者があらわれた。

しかし、東海地方の強い影響を受けた地域とする決定的な確証に欠けていたのである。

こうした背景の中、平成6年度9月、安源寺遺跡の調査が開始された。なにか、東海系の強い影響を受けたとする証拠は発見できないか。そうした期待を受けながら、調査は進められたが、なかなか好結果は得られなかった。

調査は終わりにちかづき、休息用に設営したテントの部分を残すのみとなった。そこには溝が確認されていたが、当初は最近のものか、弥生時代後期の方形周溝墓ではないかと考えていた。

そんな折、遺跡見学に訪れた赤塩仁志氏（中野実業高等学校教諭）は、この溝が前方後方形周溝墓ではないかと指摘された。こうして、にわかに調査は活気を帯びた。

調査が進むにつれ、溝は徐々に前方後方形周溝墓特有の形態となっていき、それは確信となった。

前方後方形周溝墓は東海地方西部に起源をもつ墳墓であり、東海地方西部の強い影響をうけた地域に造られたと考えられているからである。

安源寺遺跡に前方後方形周溝墓が発見された意義は大きい。

なぜならば、土器の検討からのみ、東海地方西部の影響が考えられていたが、そればかりではなく、墳墓の形態までも東海地方（あるいは北陸地方）の影響を受けていたことが明らかになったからである。

精神生活の面にまで東海地方西部の影響が及んでいたことになり、中野市周辺の地域が弥生時代から古墳時代への移行期に先進的な役割をはたした地域である可能性がより一層高くなったのである。

次に問題になるのが、その時期である。前方後方形周溝墓の形態をした墳墓は4世紀の中頃までつくられるからである。今のところ、溝から出土した土器については、確かなことは不明であるが、4世紀の前半のものではないかと思われる。

この年代が正しいとすれば、飯山市勘介山古墳、中野市蟹沢古墳が改めて注目される。二つの古墳は安源寺遺跡で発見された前方後方形周溝墓と同じ形をした前方後方形墳であるからである。

これまでも、二つの古墳の存在は研究者の注目をひいていた。前方後方墳という形態は東海地方西部の影響で出現すると考えられ、中野市周辺が弥生時代の終わり頃から古墳時代にかけての先進地域であった証拠のひとつと考えられるからである。

また、これから前方後方墳は森将軍塚古墳の築造年代よりも古い可能性も考えられることもあったが、残念なことに二つの古墳は発掘調査されておらず、その年代が不明であった。前方後方墳は4世紀の中頃までつくられるからである。

しかし、安源寺遺跡の前方後方形周溝墓が4世紀前半代のものであるとすれば、同様の形態や意義をもつと考えられるふたつの古墳もそうした年代が与えられる可能性が高くなる。

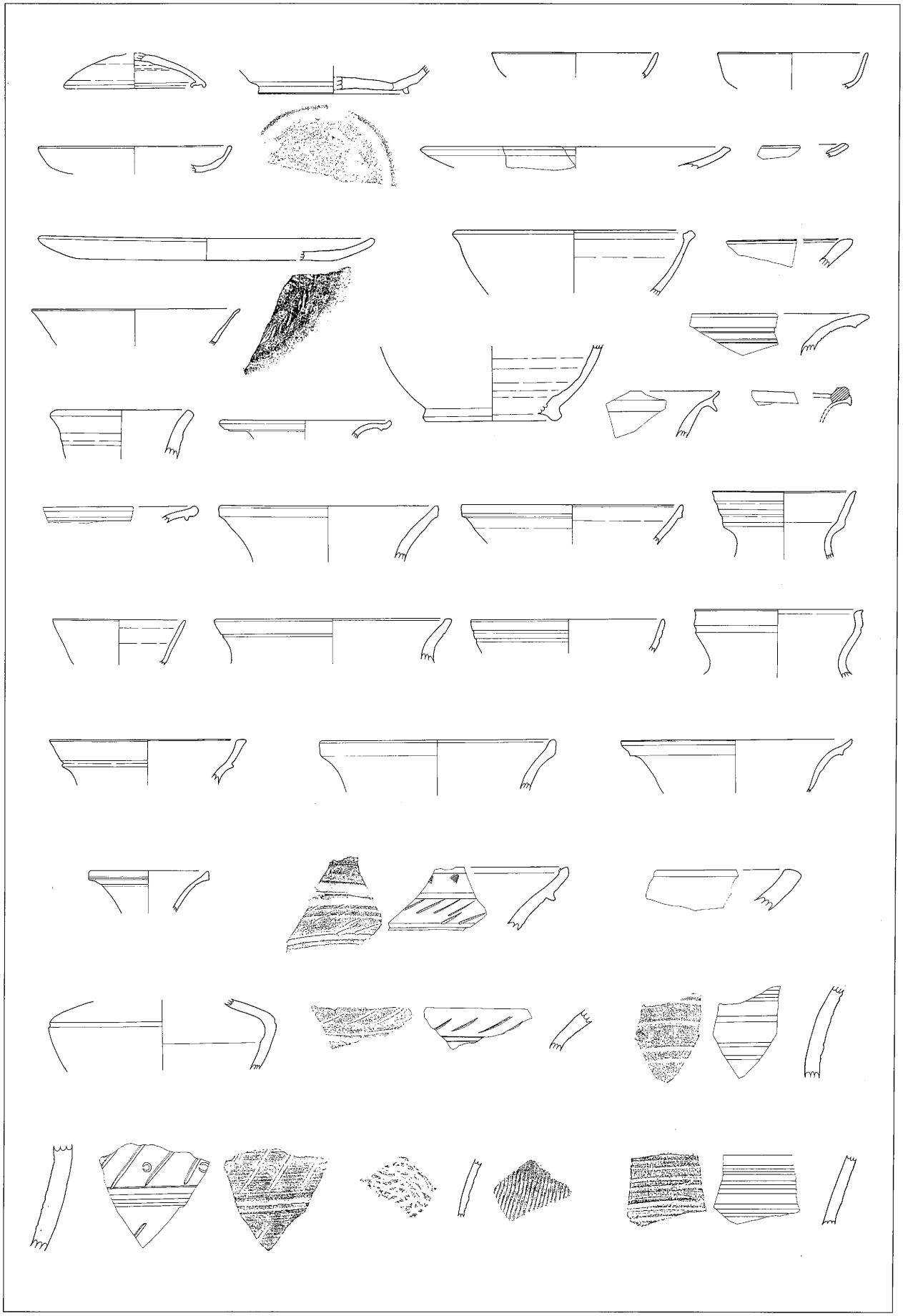
仮に、勘介山古墳、蟹沢古墳が4世紀前半代のものであるとすれば、善光寺平における最古の古墳であるということになる。善光寺平における古墳時代の夜明けは中野市周辺から始まったとすることができるのである。

このように、昨年度の安源寺遺跡で発見された前方後方形周溝墓は善光寺平の古墳文化さらには、古墳文化全体を考えるうえで、極めて貴重なデーターとなった。安源寺遺跡の前方後方形周溝墓は私たちに大きな古代のロマンを提供してくれたことだけは確かである。

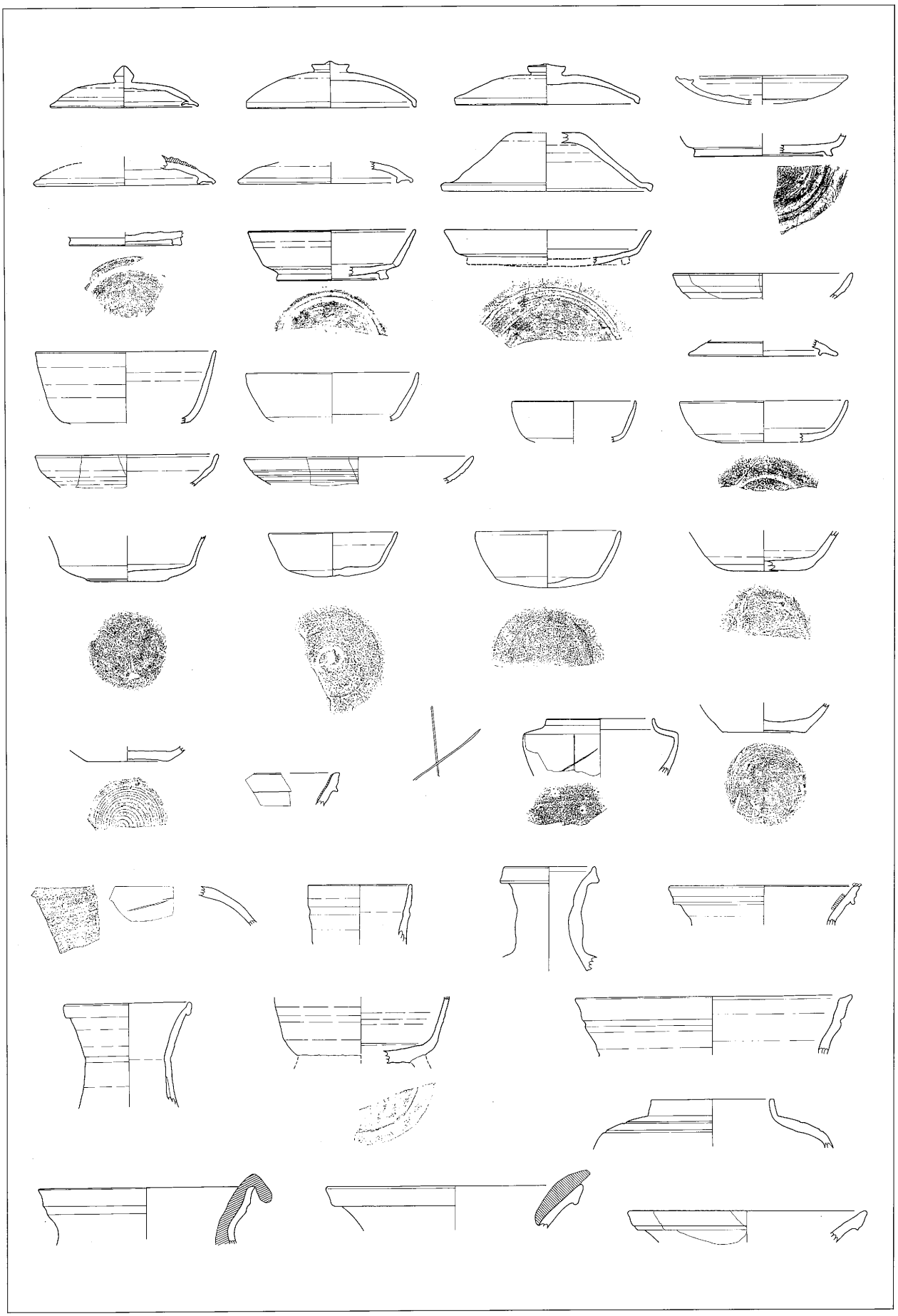
参考図版

中野市草間古窯址群

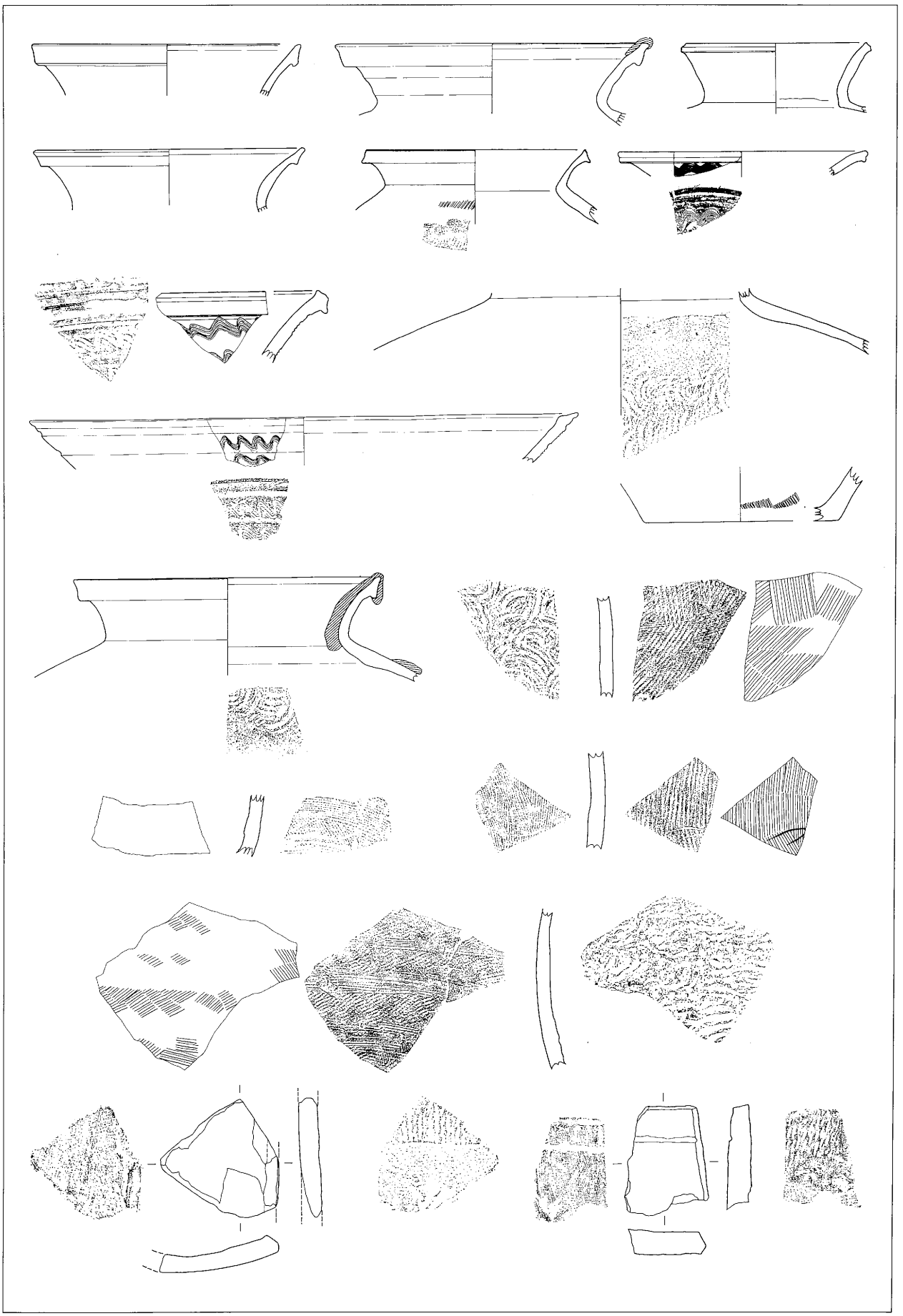
出土の須恵器



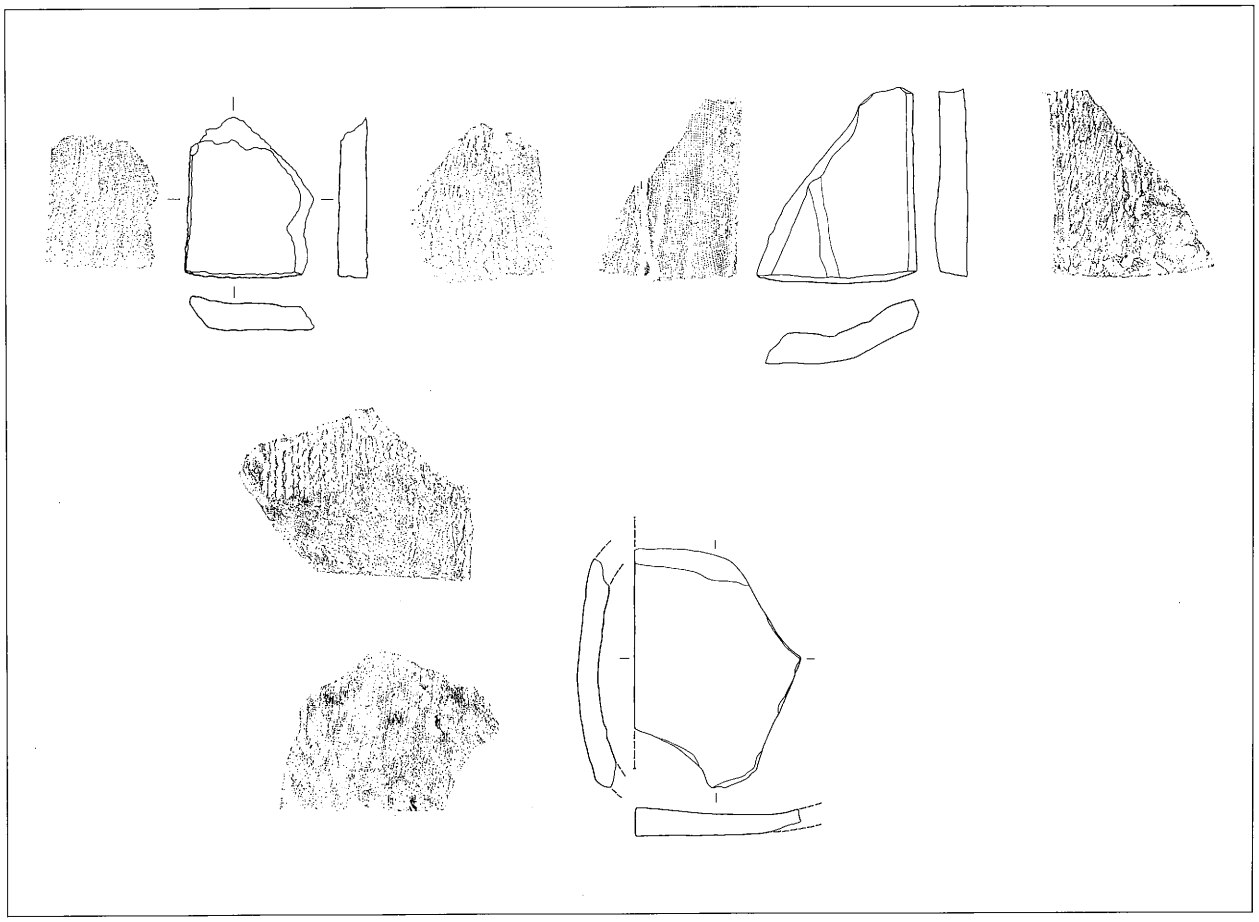
17図　茶臼峯 6 号窯



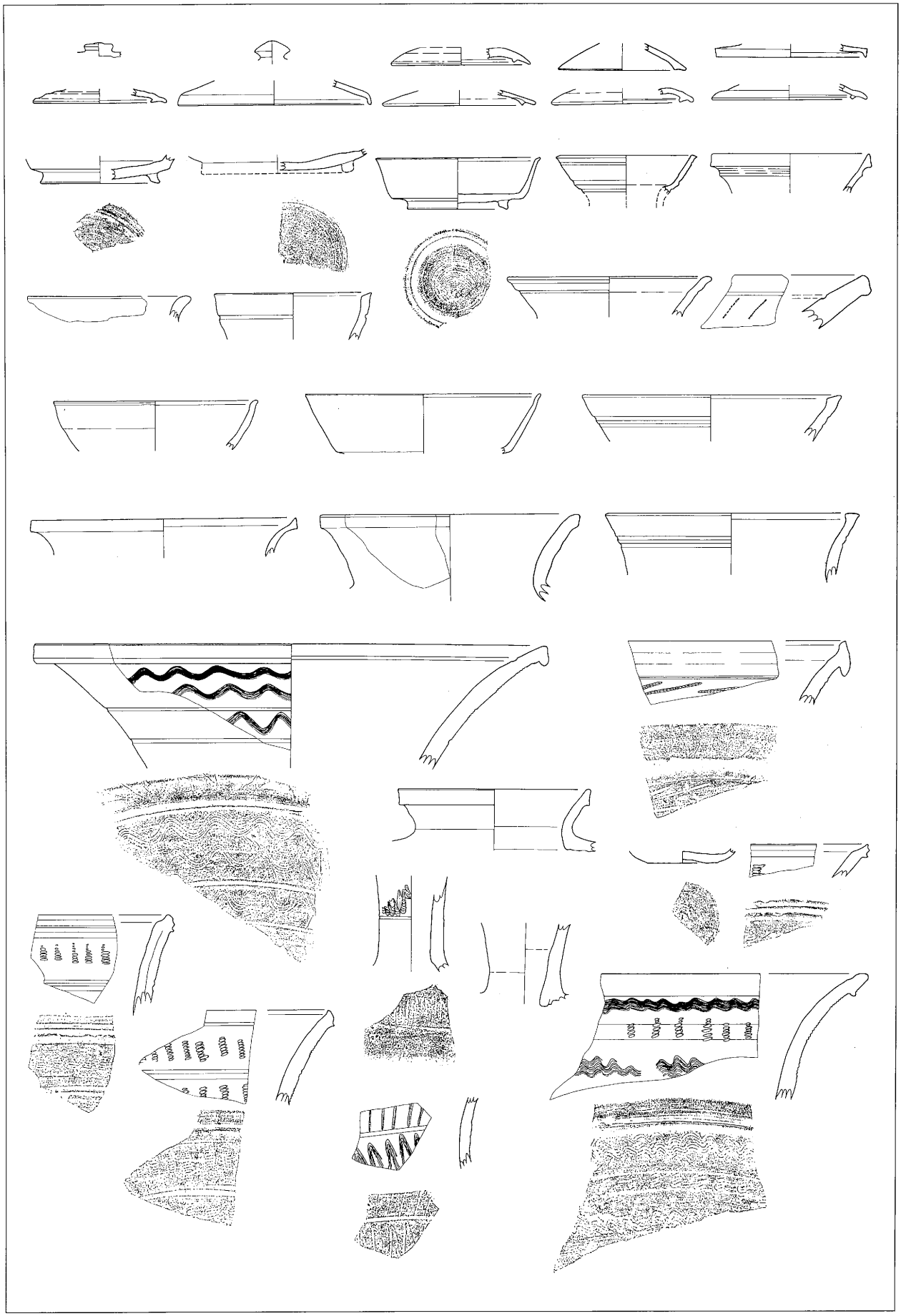
18図　がまん渕



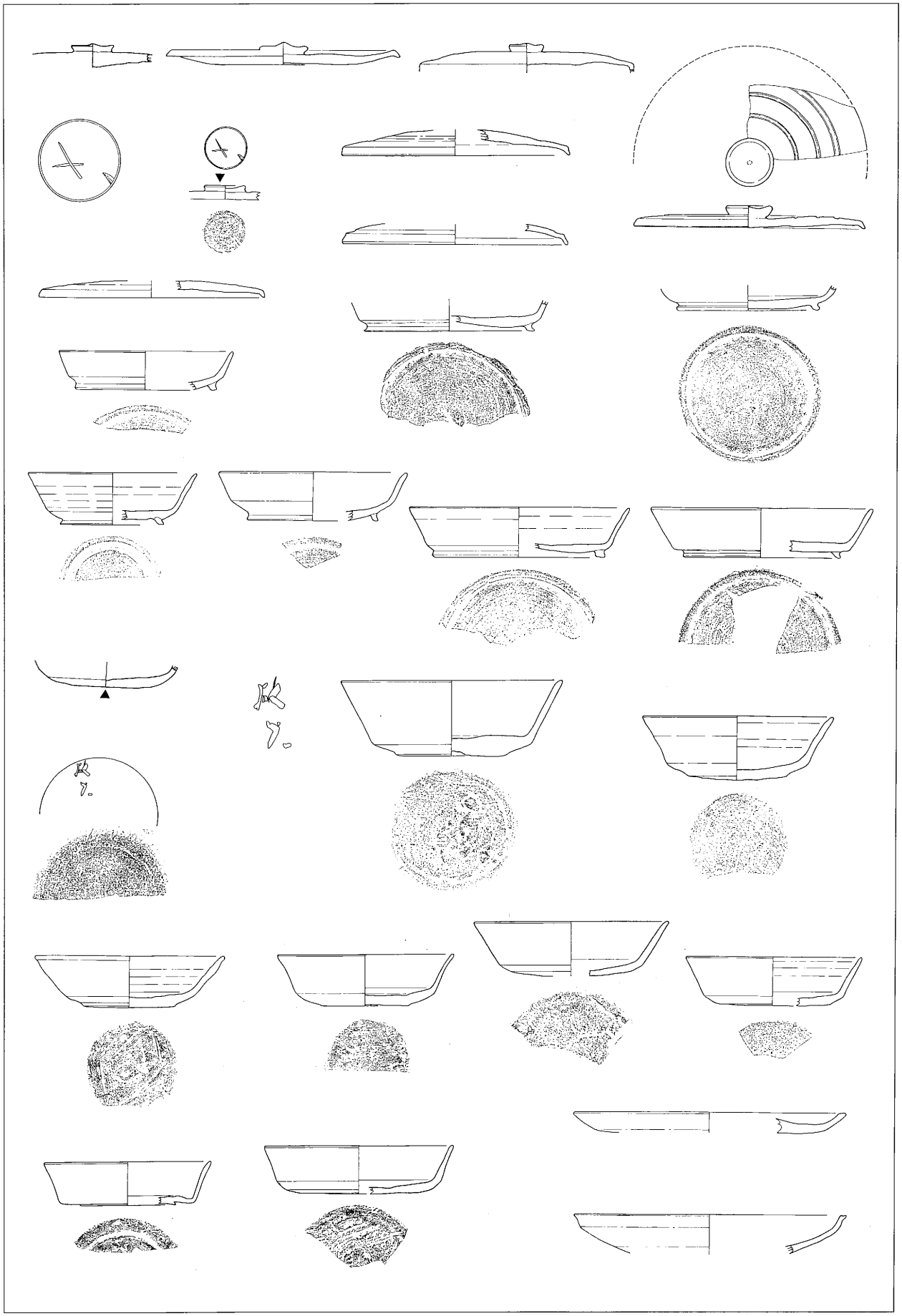
19図　がまん渕



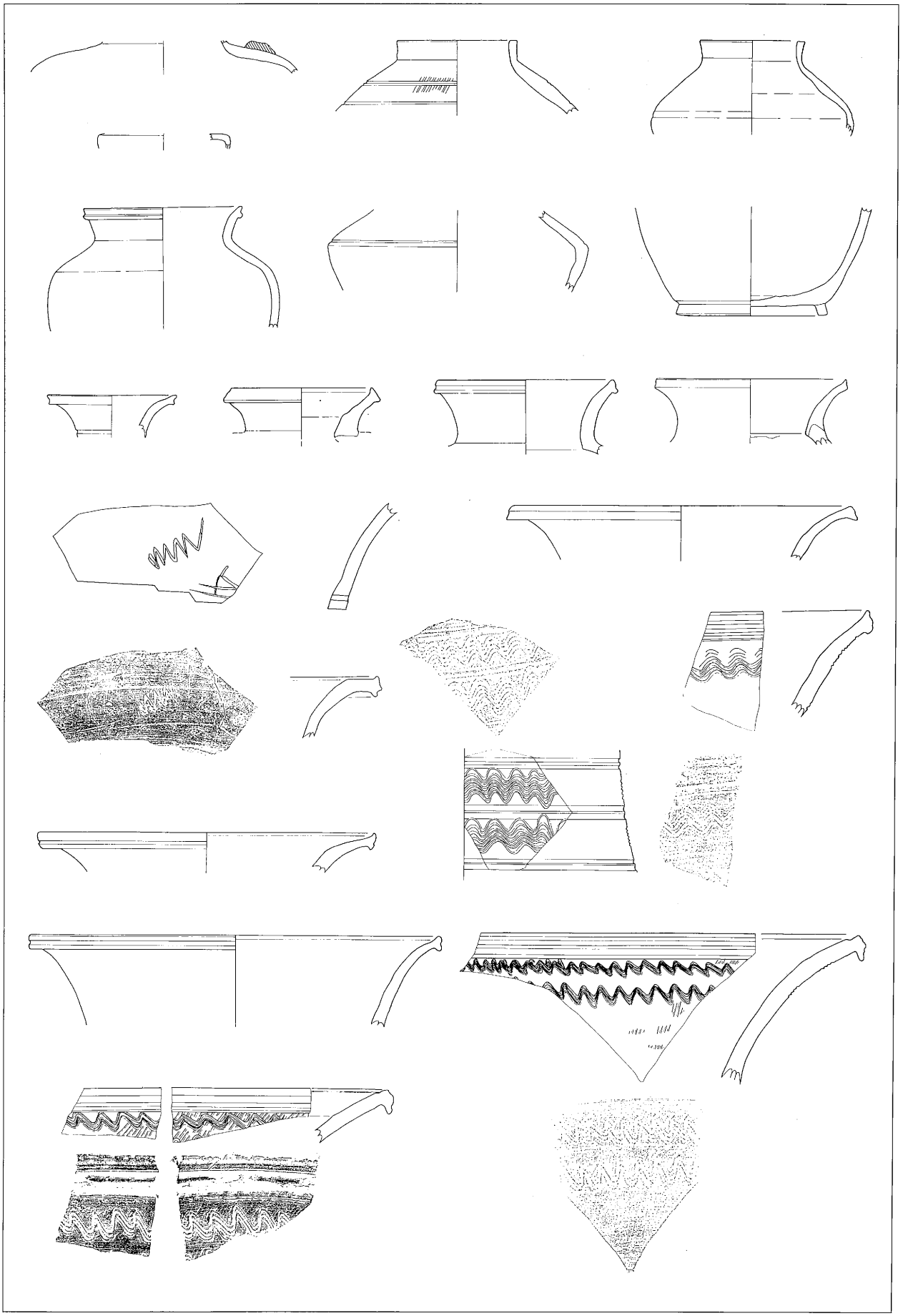
20図　がまん渕



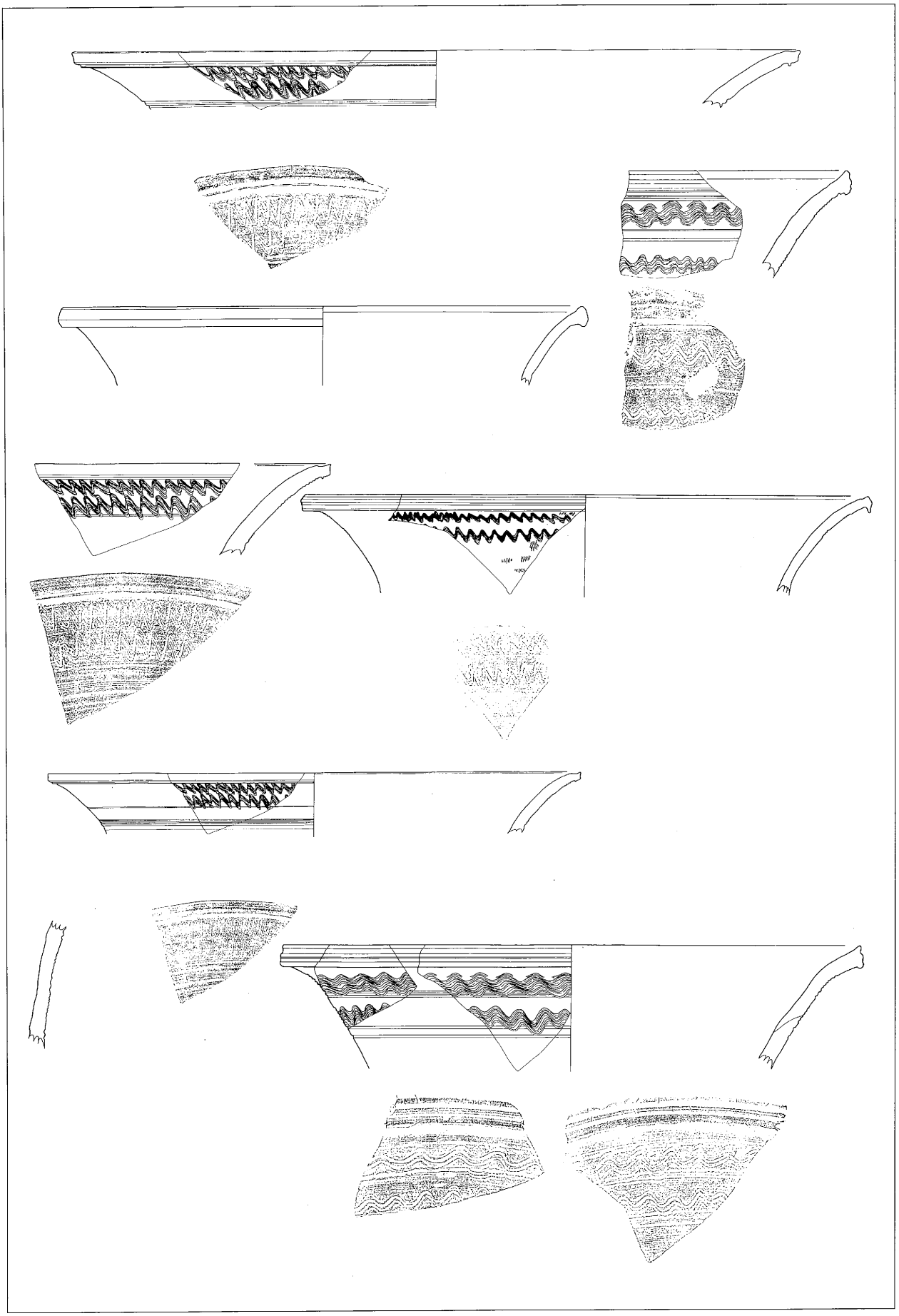
21図　茶臼峯 8 号窯



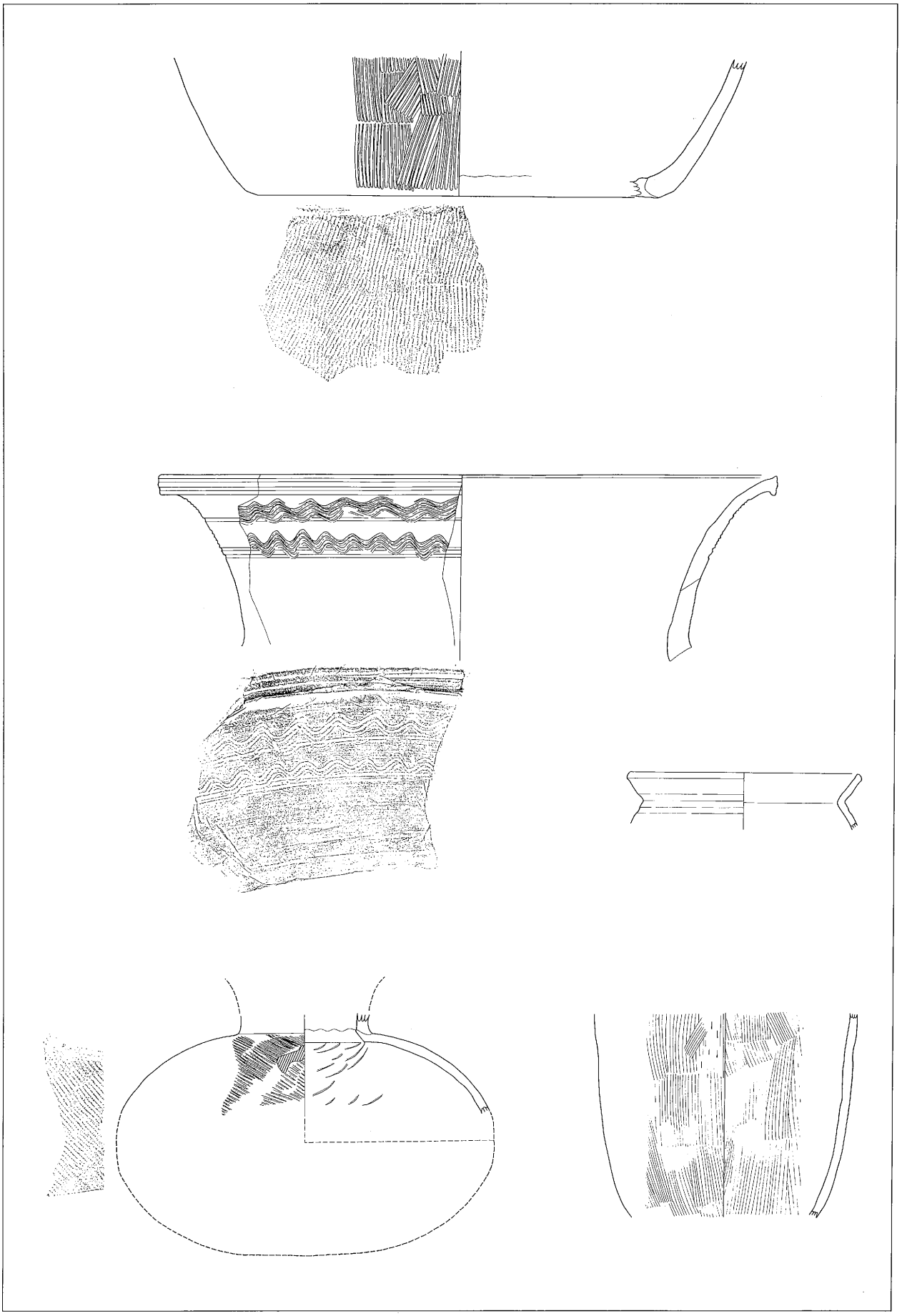
22図　立ヶ花表山



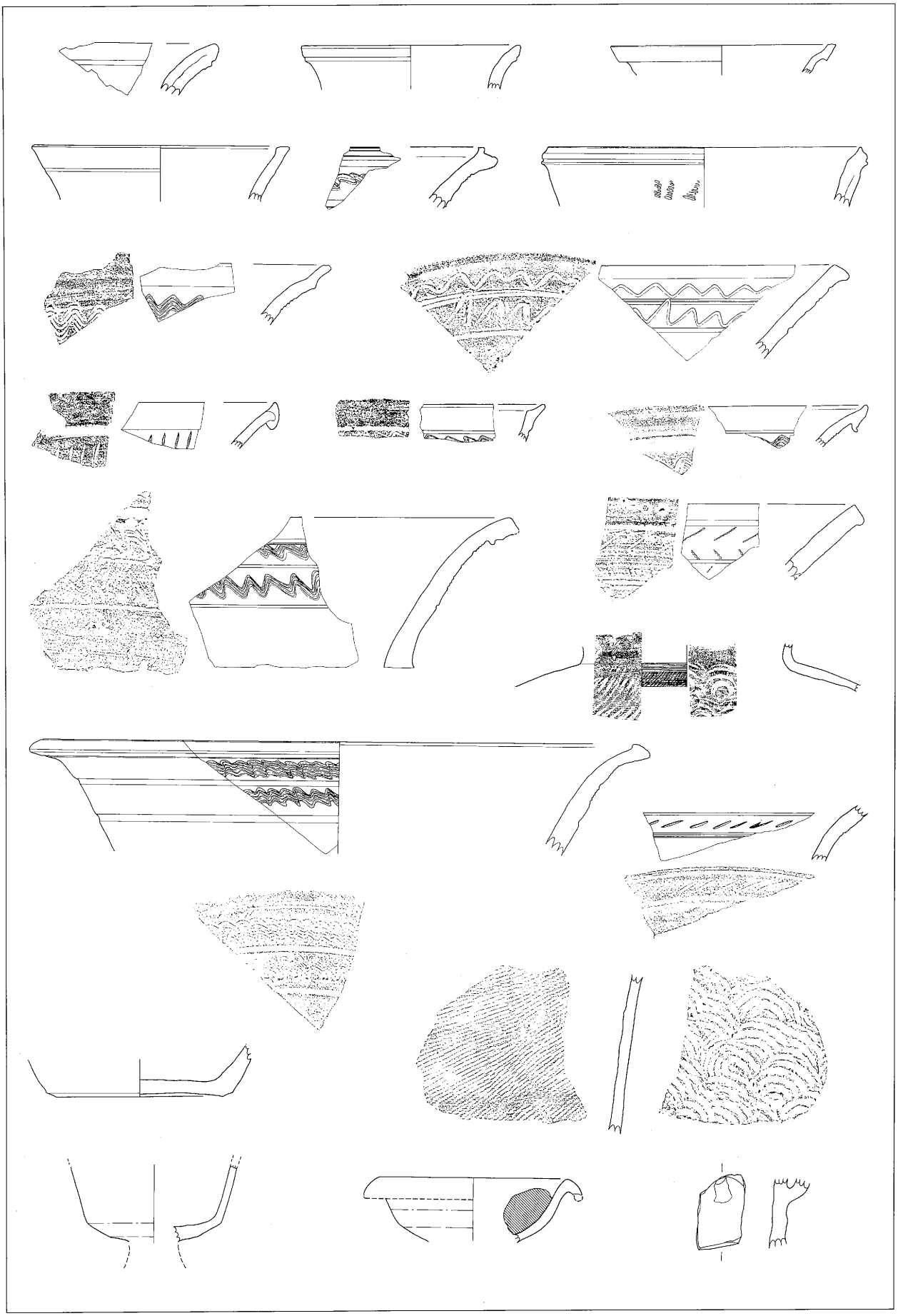
23図　立ヶ花表山



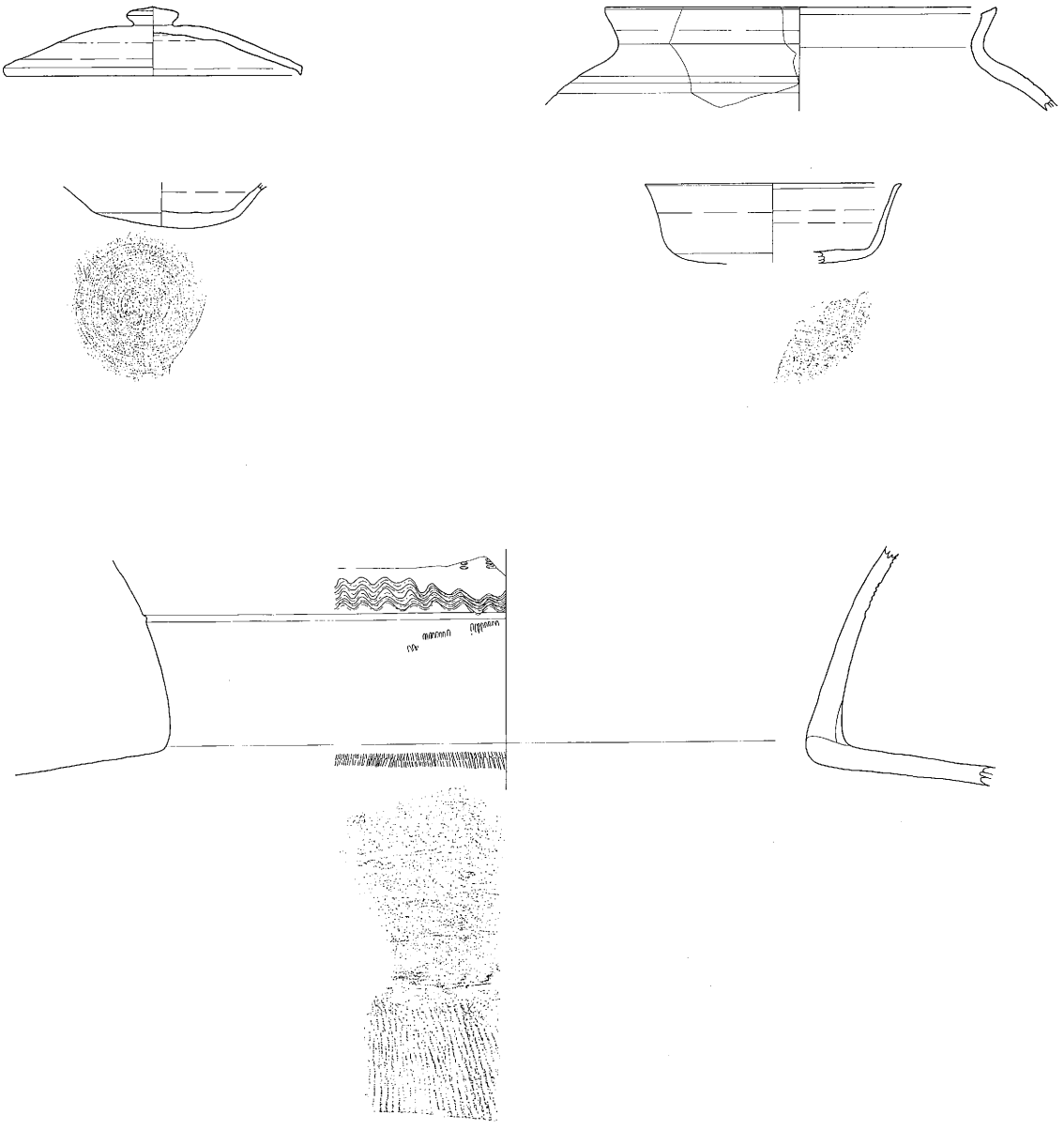
24図　立ヶ花表山



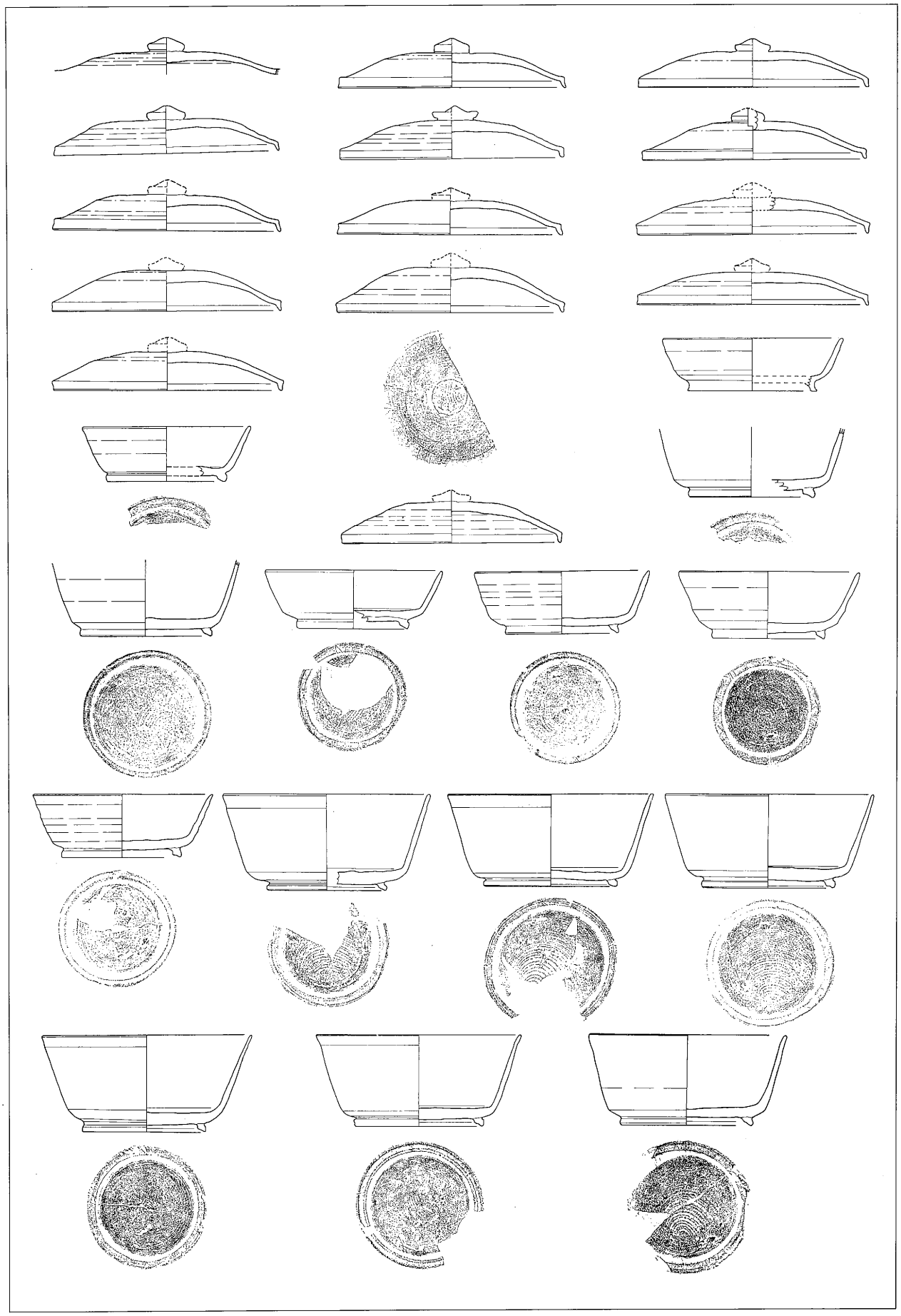
25図　立ヶ花表山



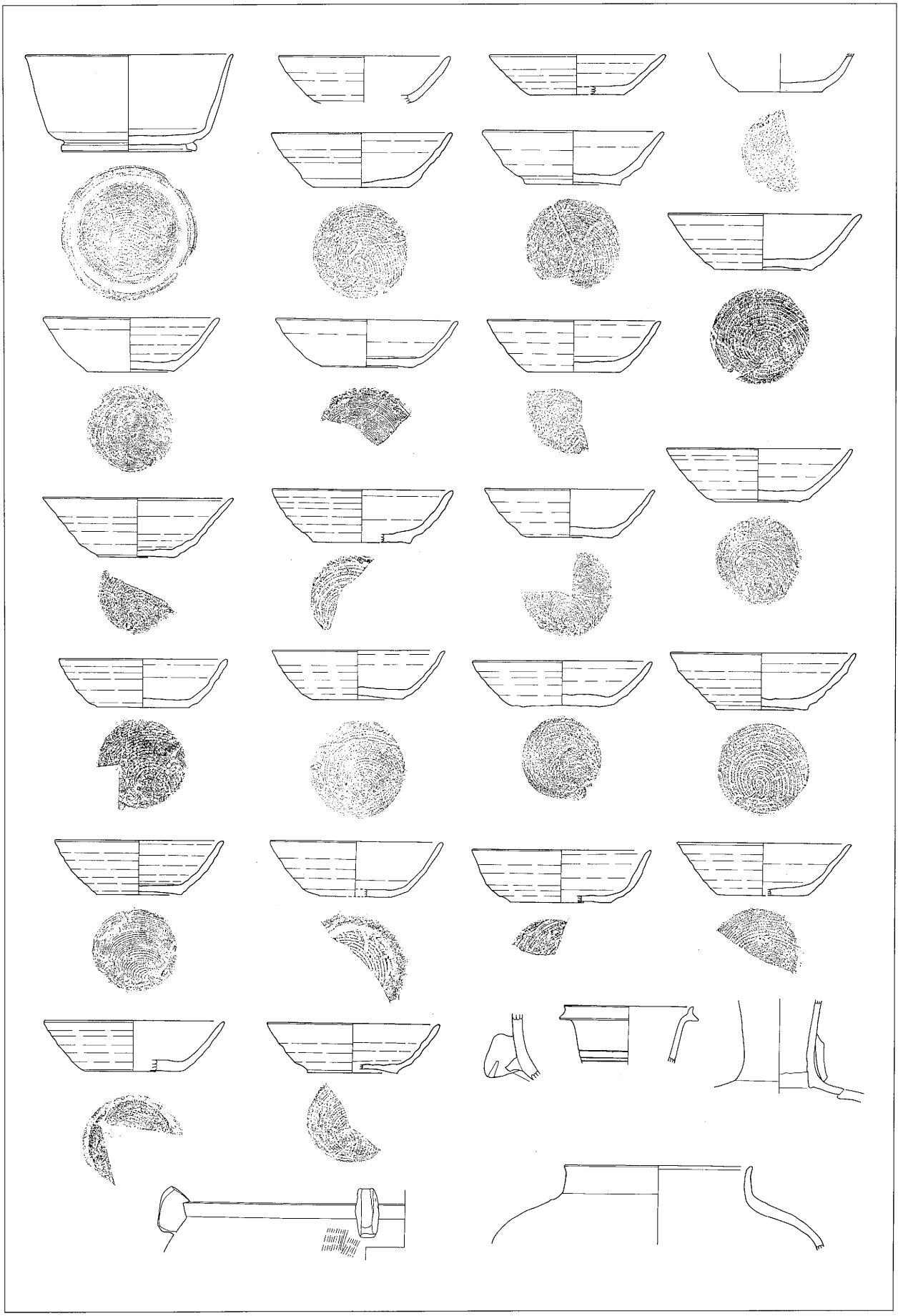
26図　茶臼峯 9 号窯



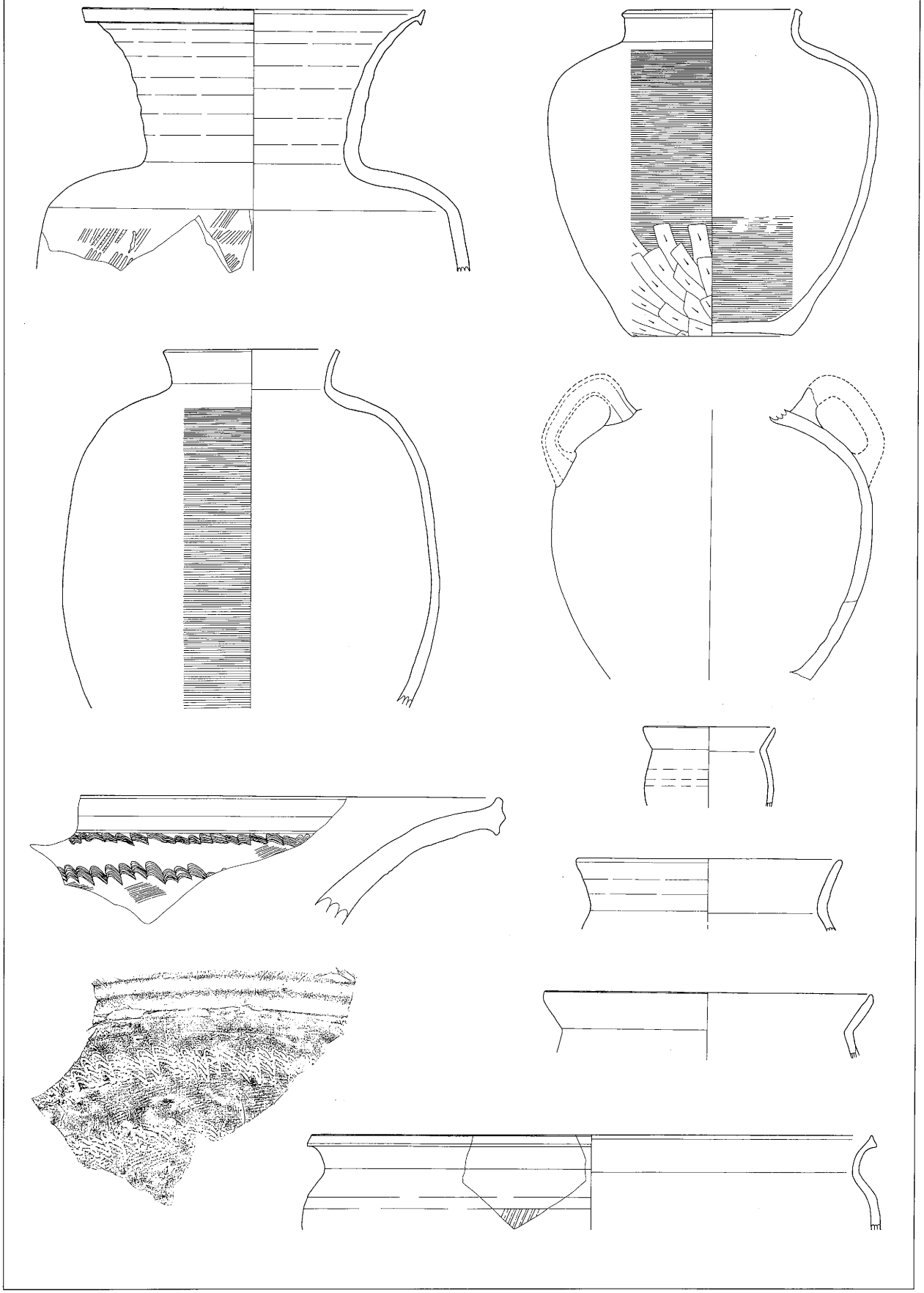
27図　茶臼峯7号窯



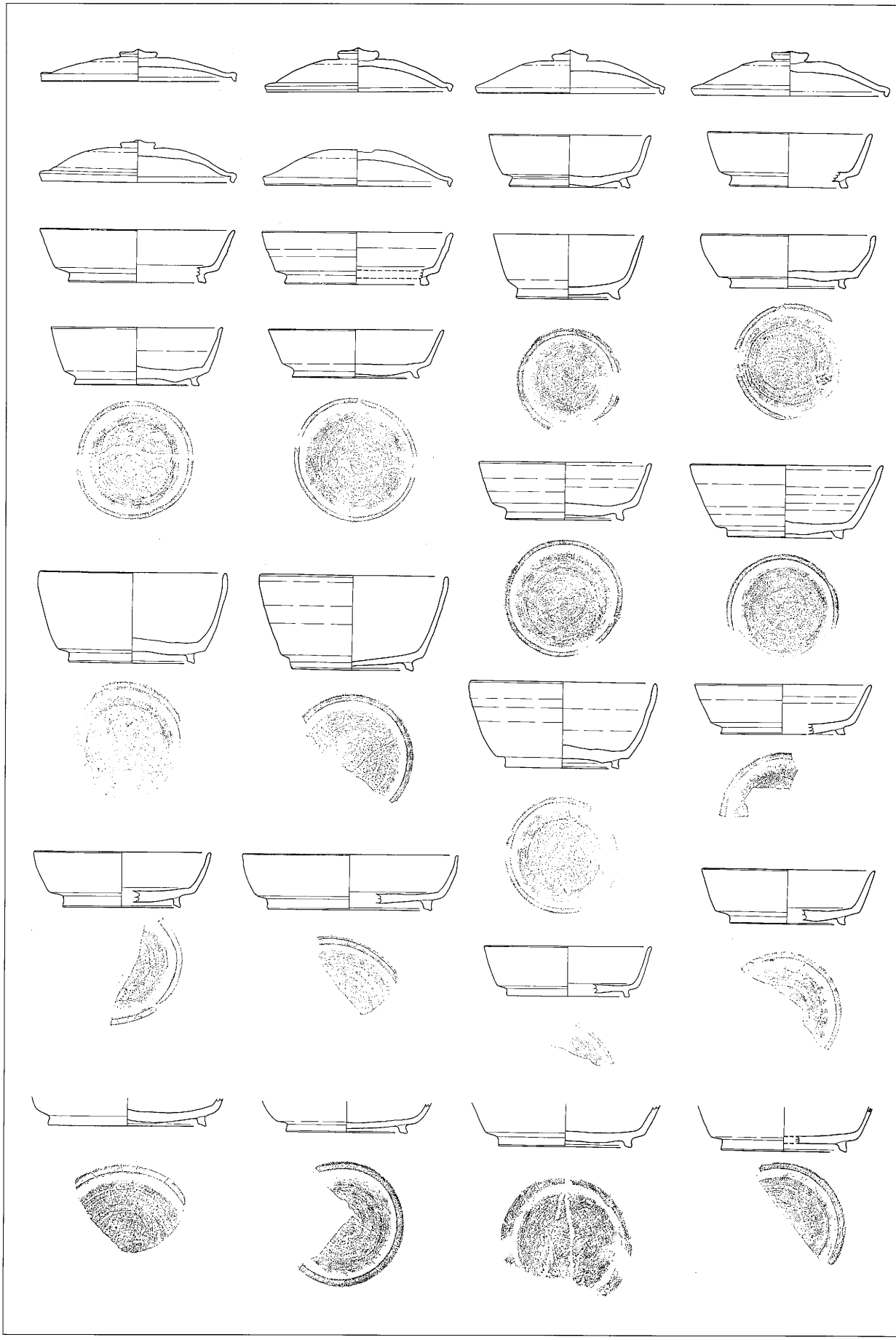
28図　中原



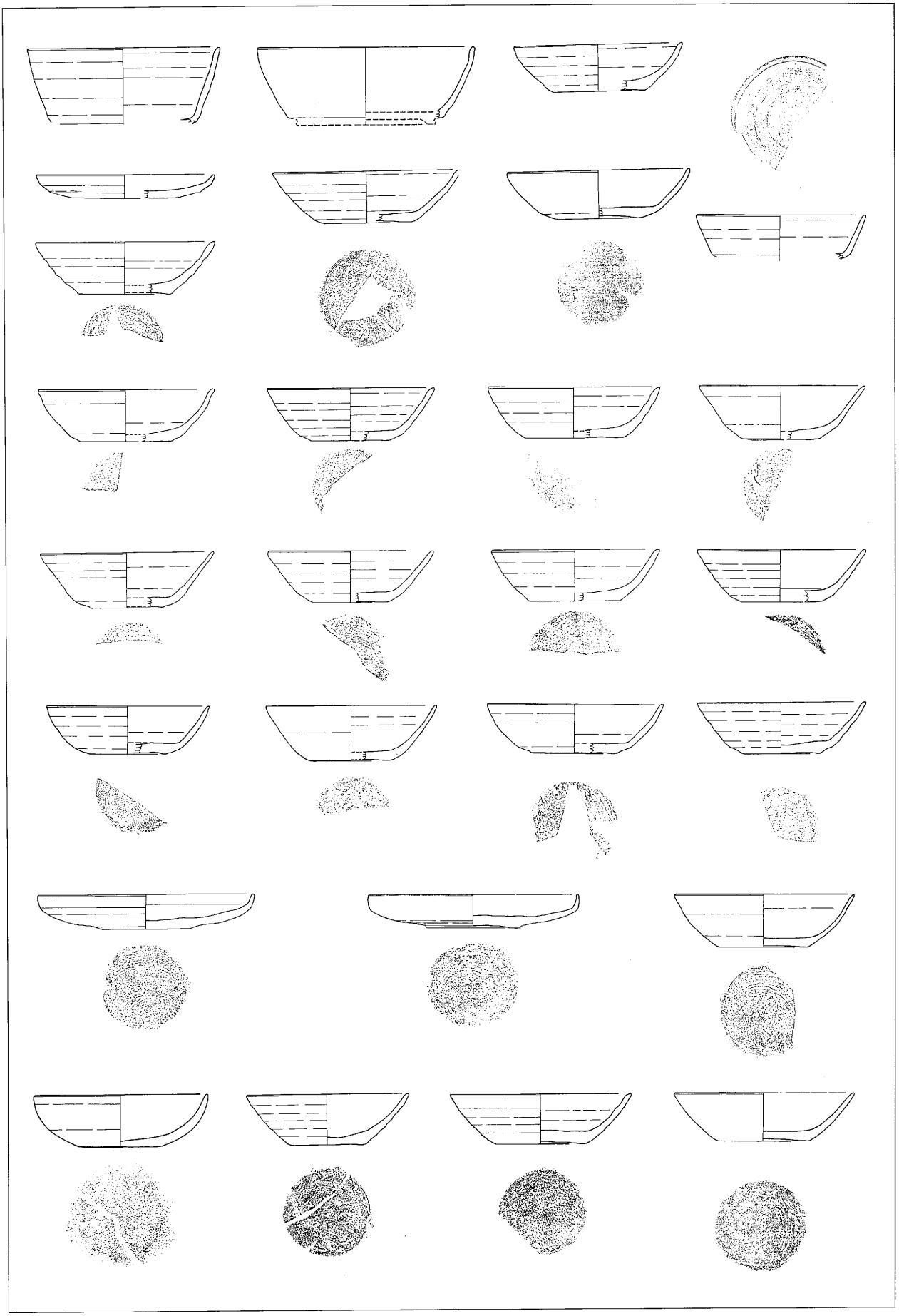
29図　中原



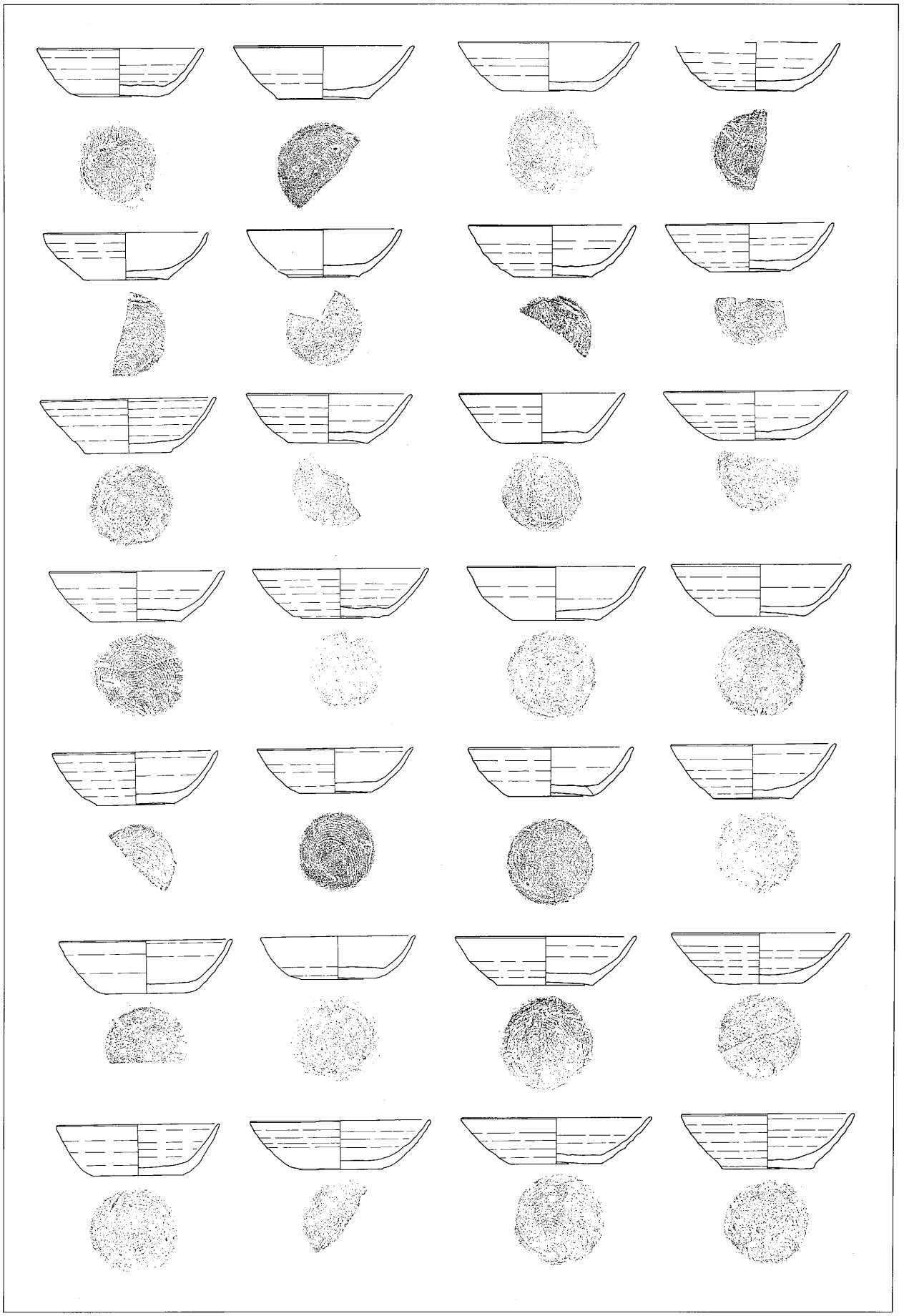
30図　中原



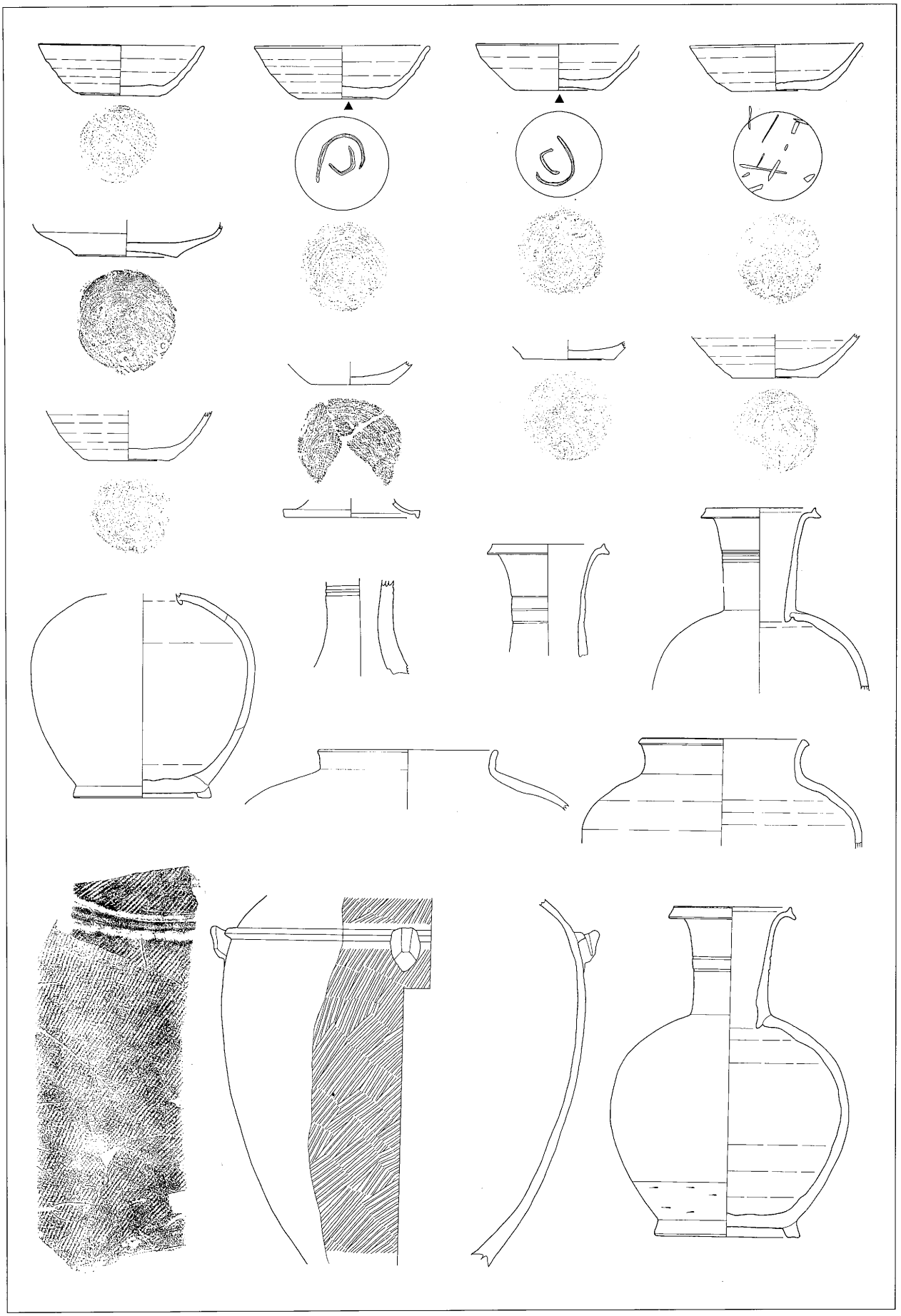
31図　立ヶ花



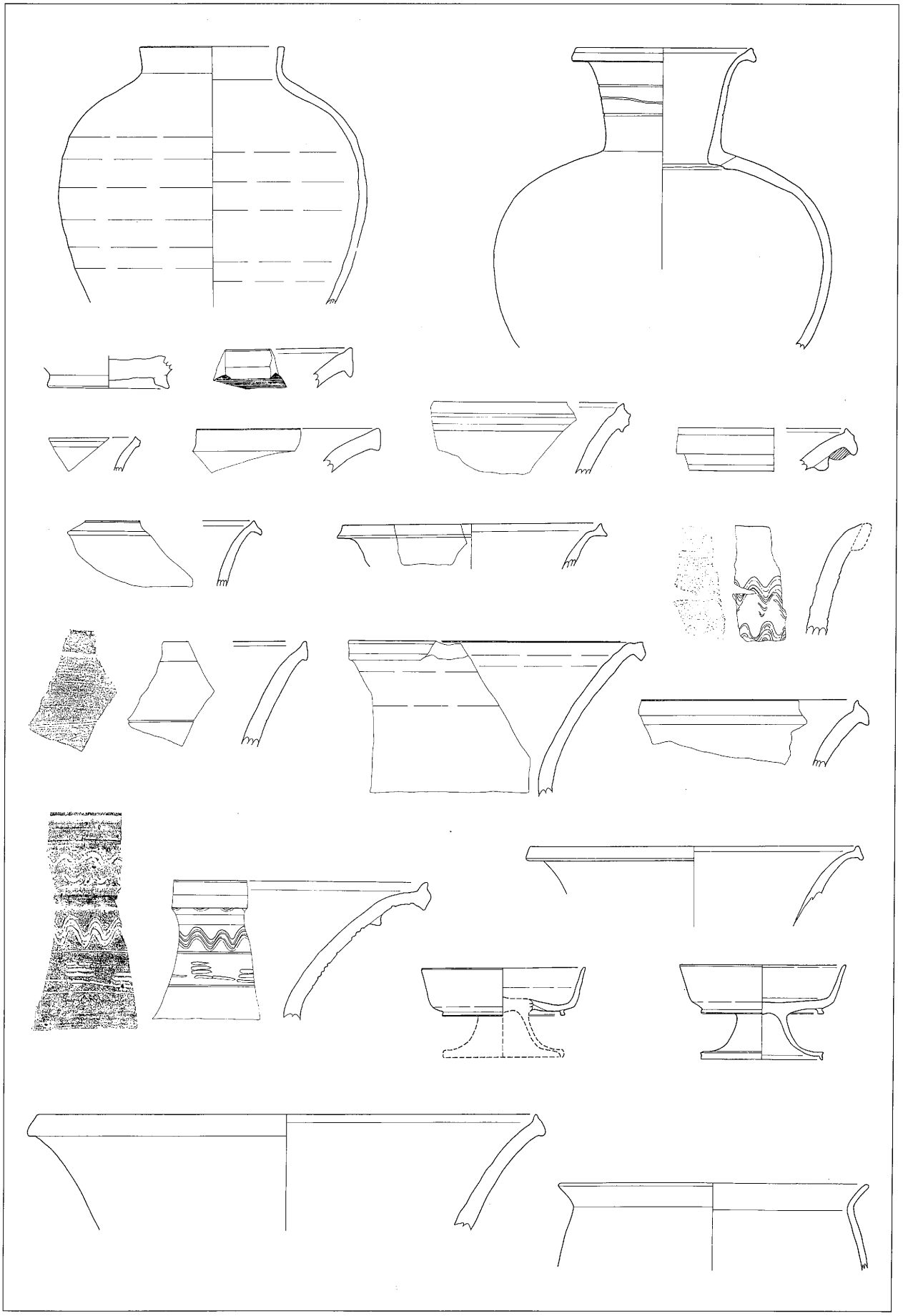
32図　立ヶ花



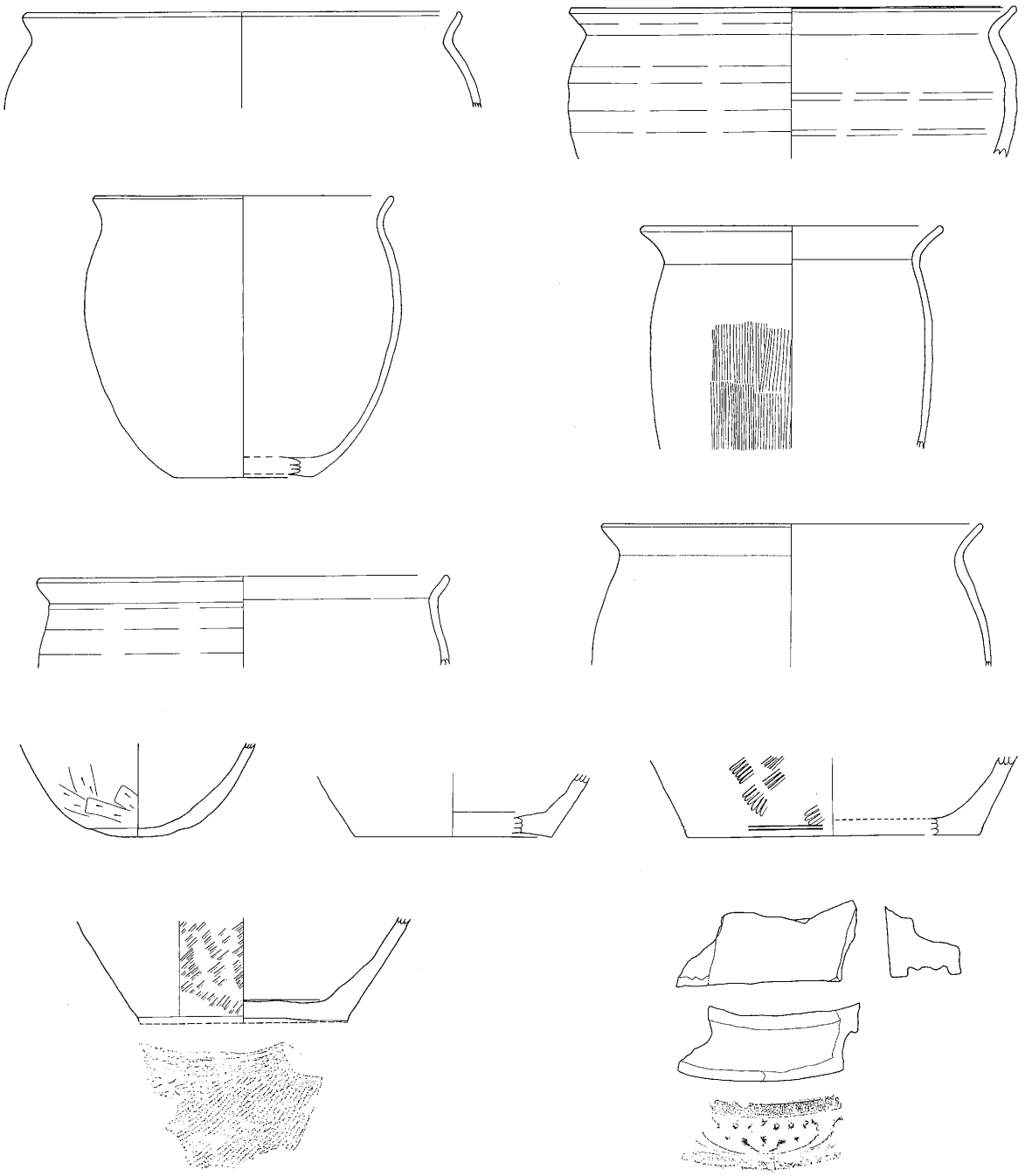
33図　立ヶ花



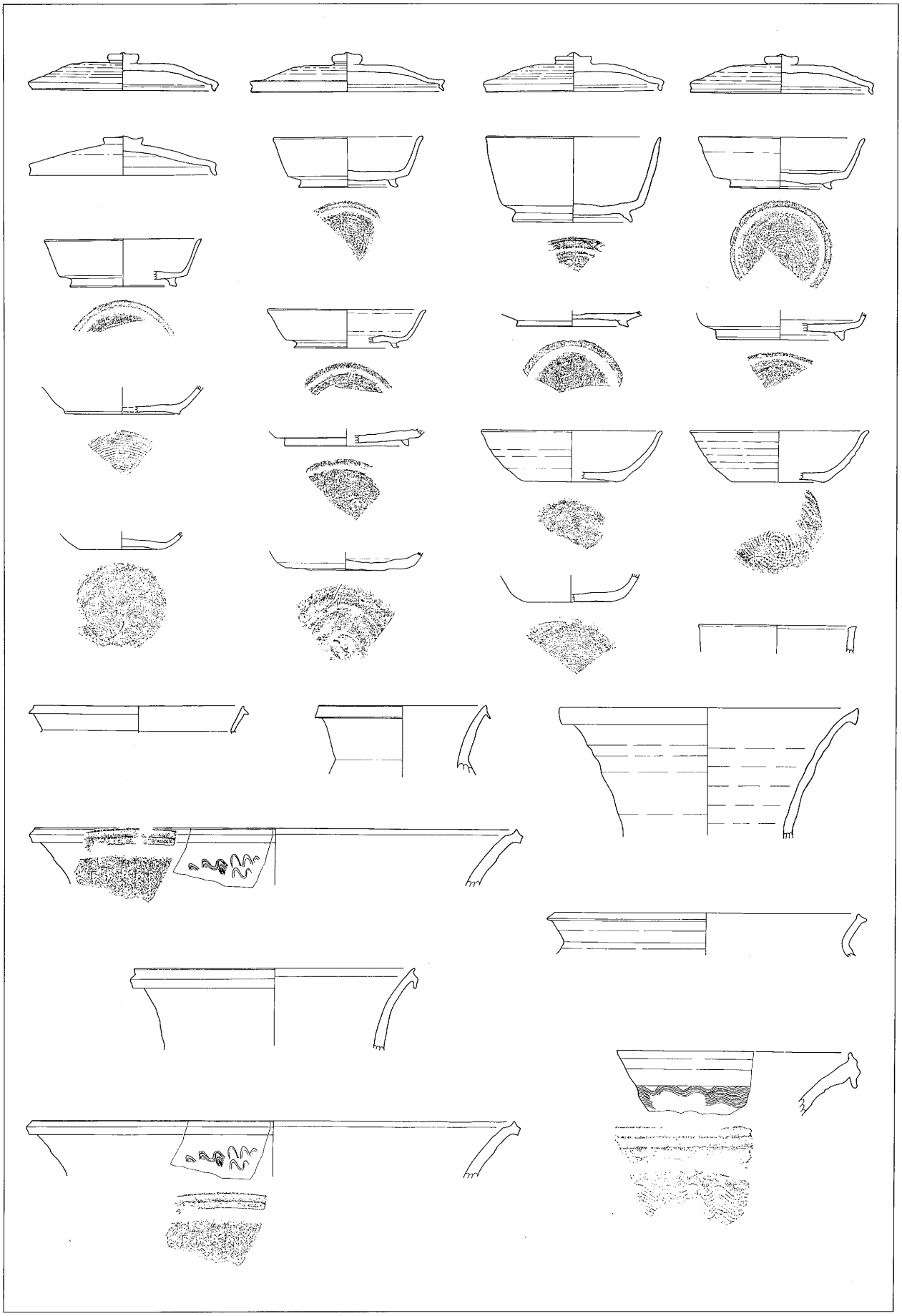
34図　立ヶ花



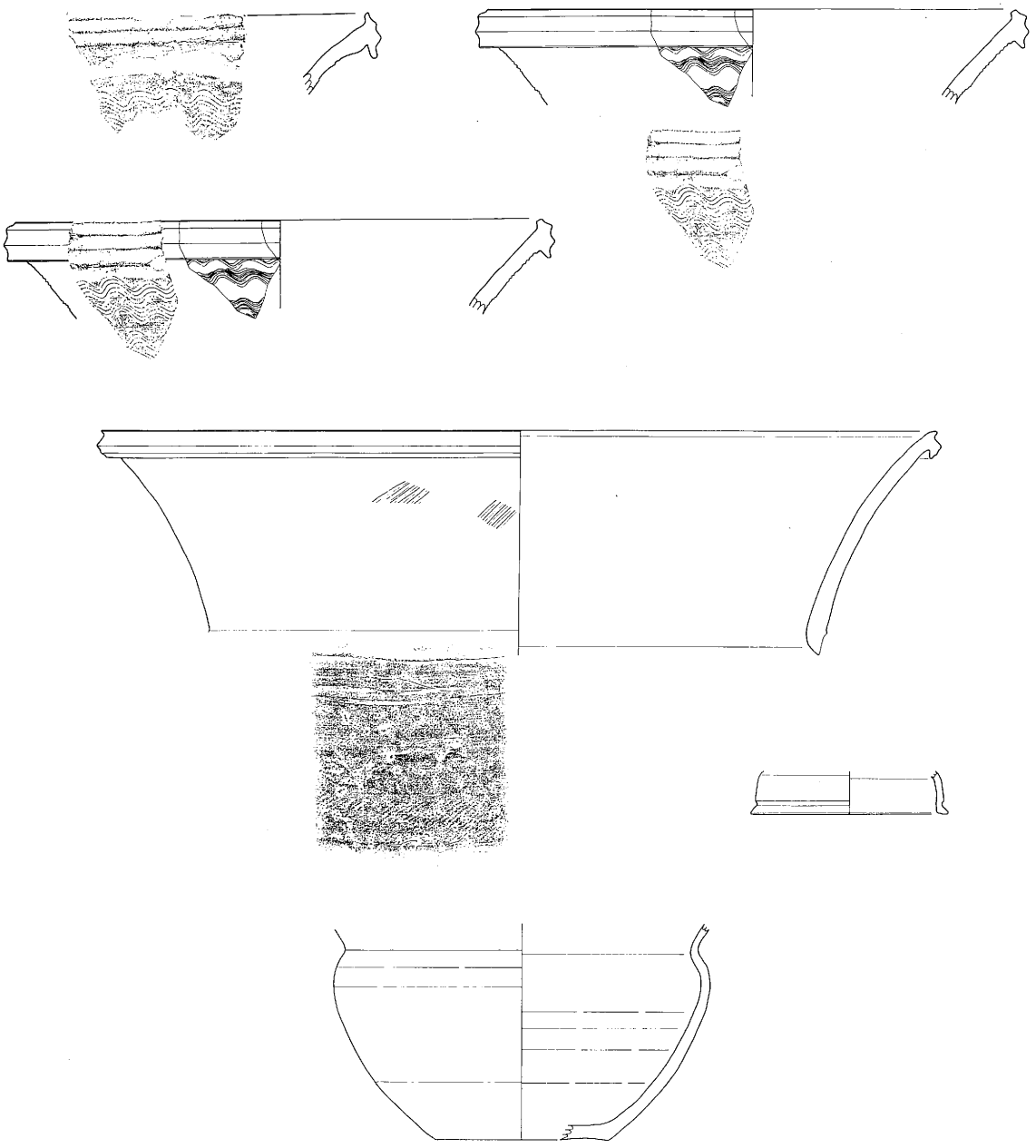
35図　立ヶ花



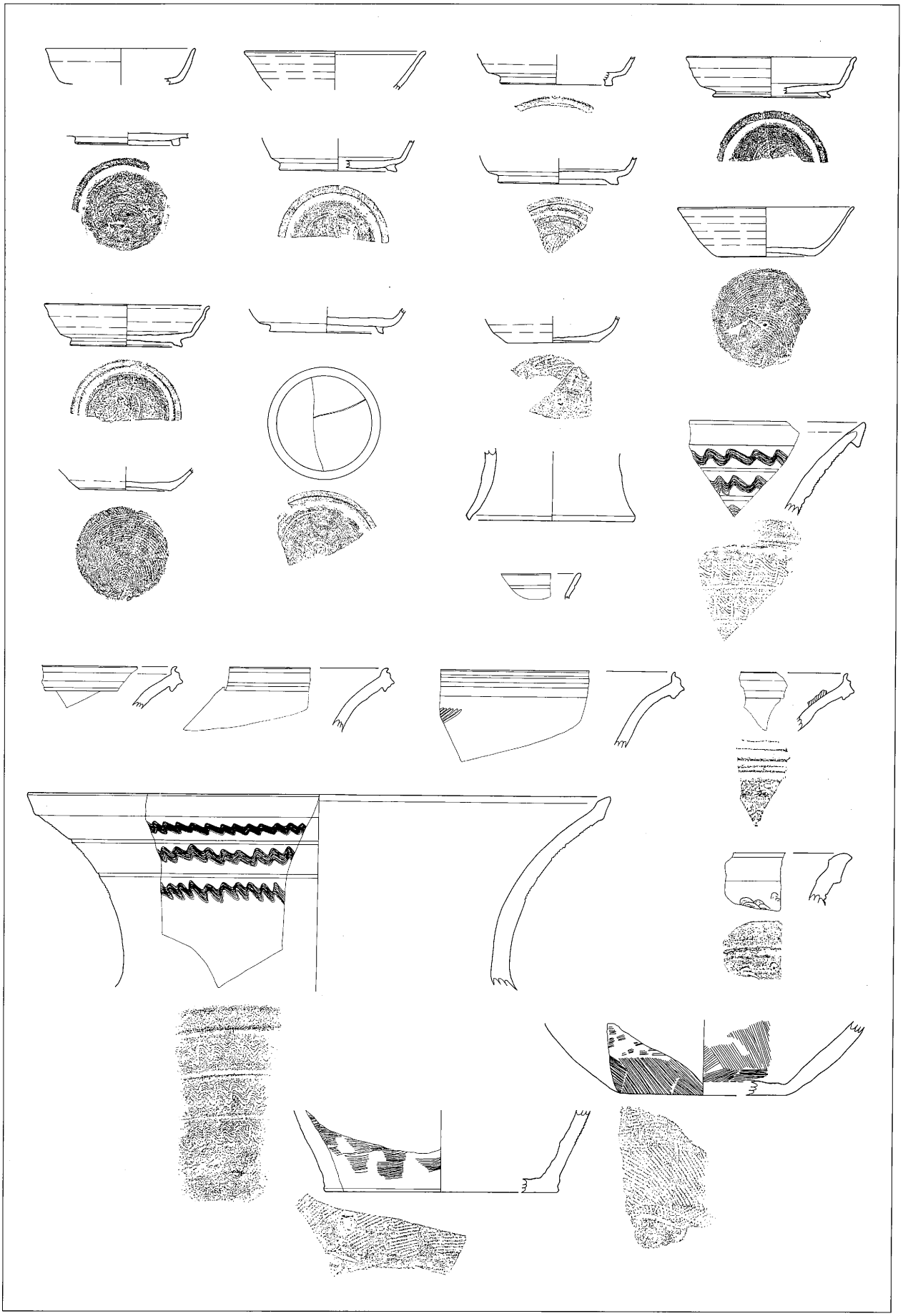
36図　立ヶ花



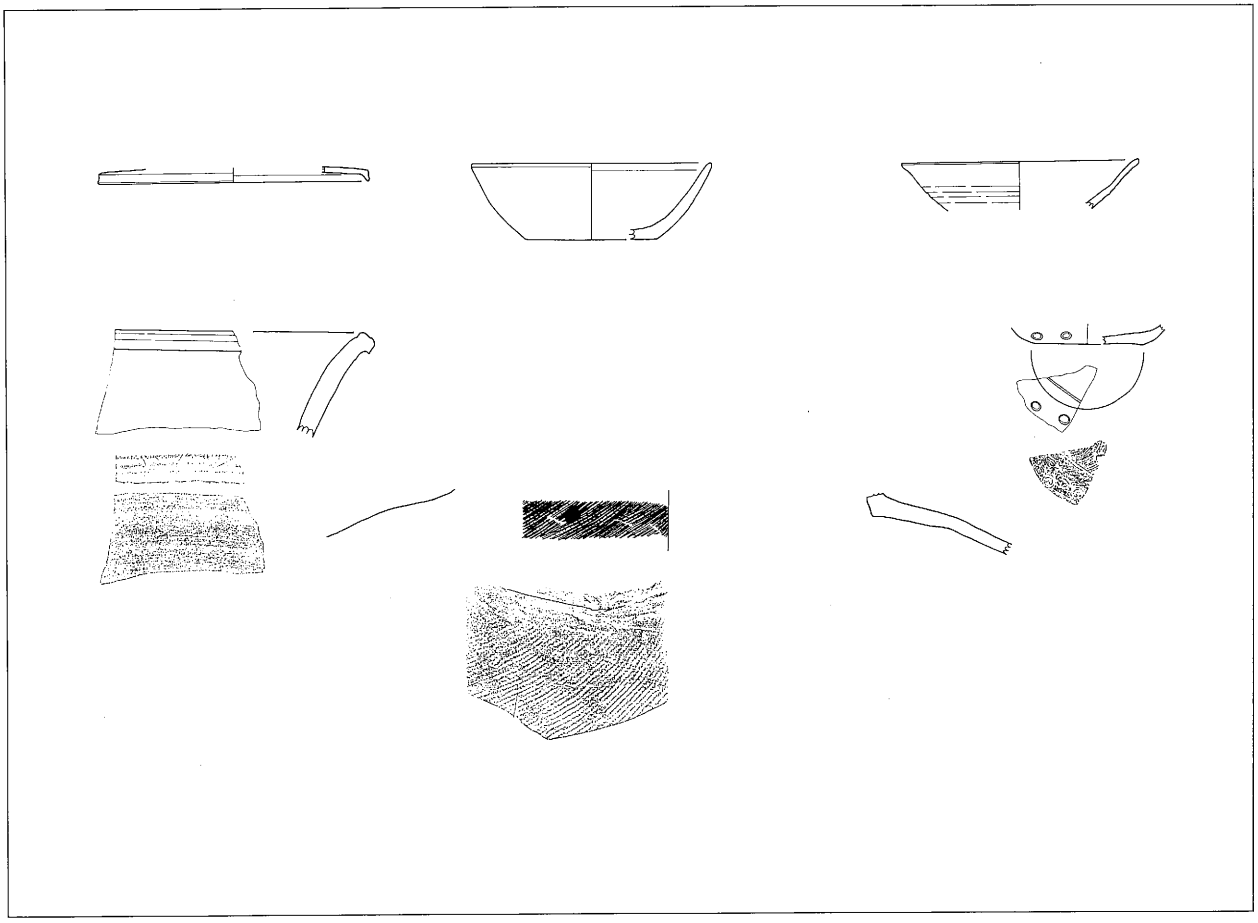
37図　上の山



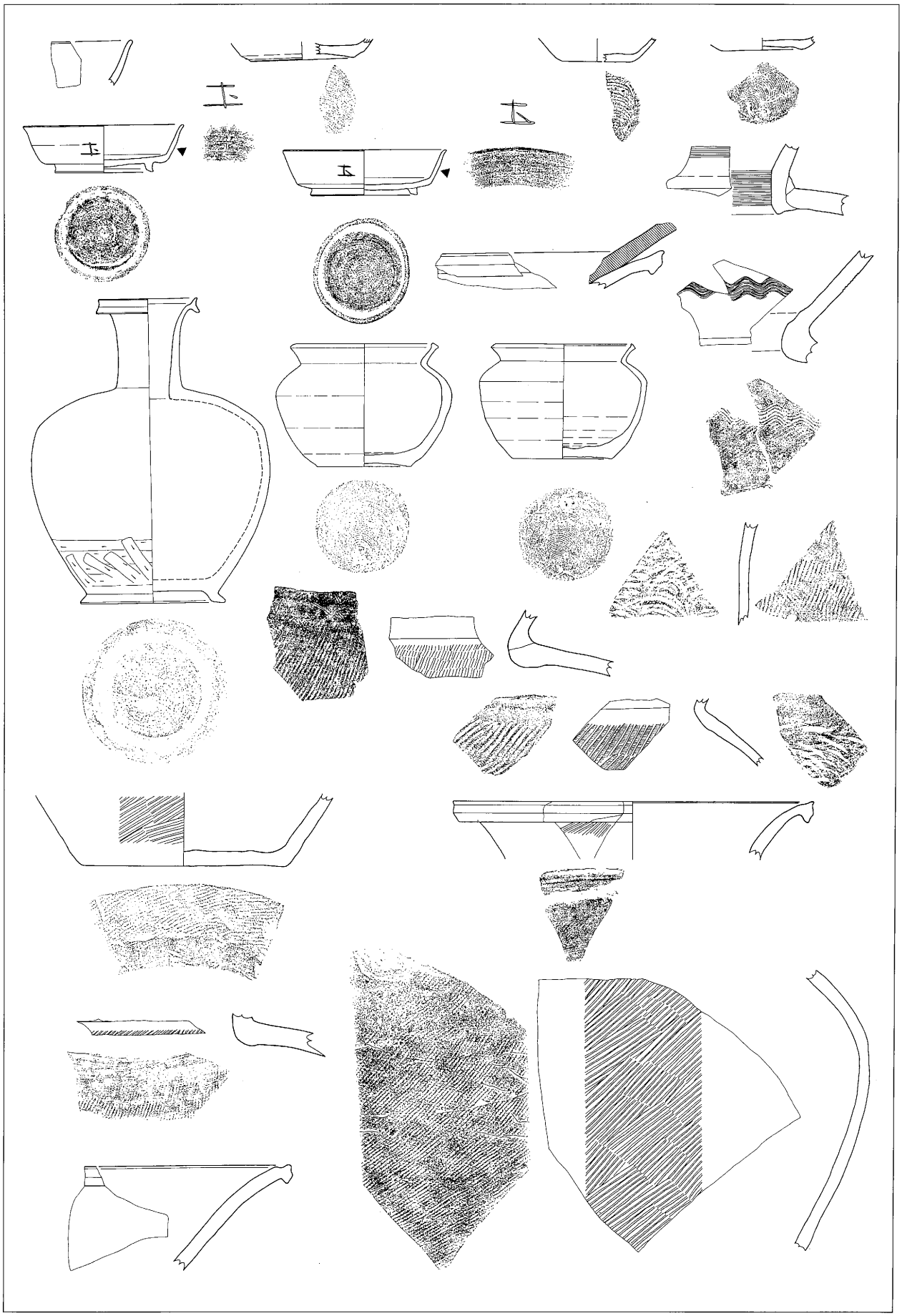
38図　上の山



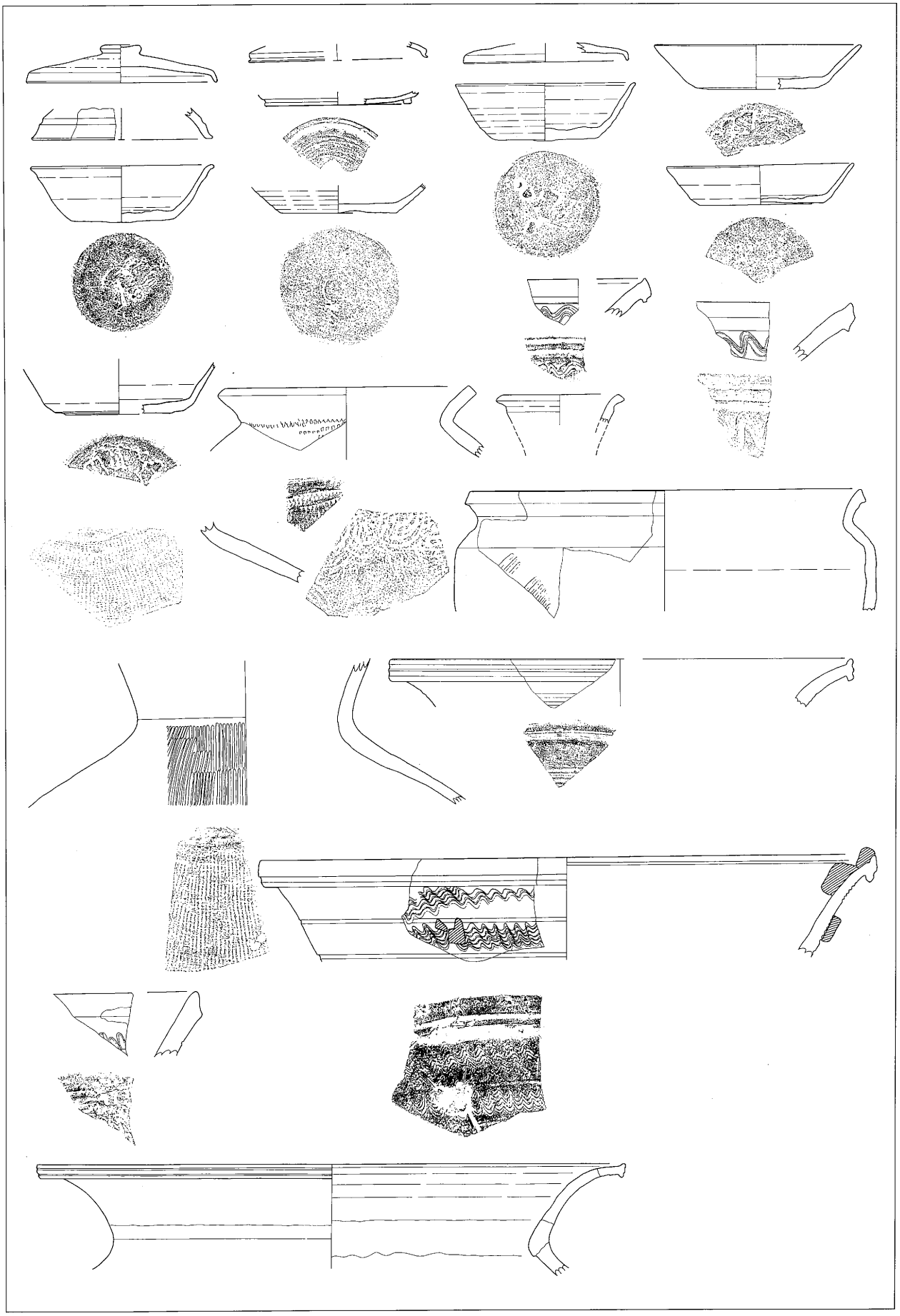
39図　茶臼峯 3 号窯



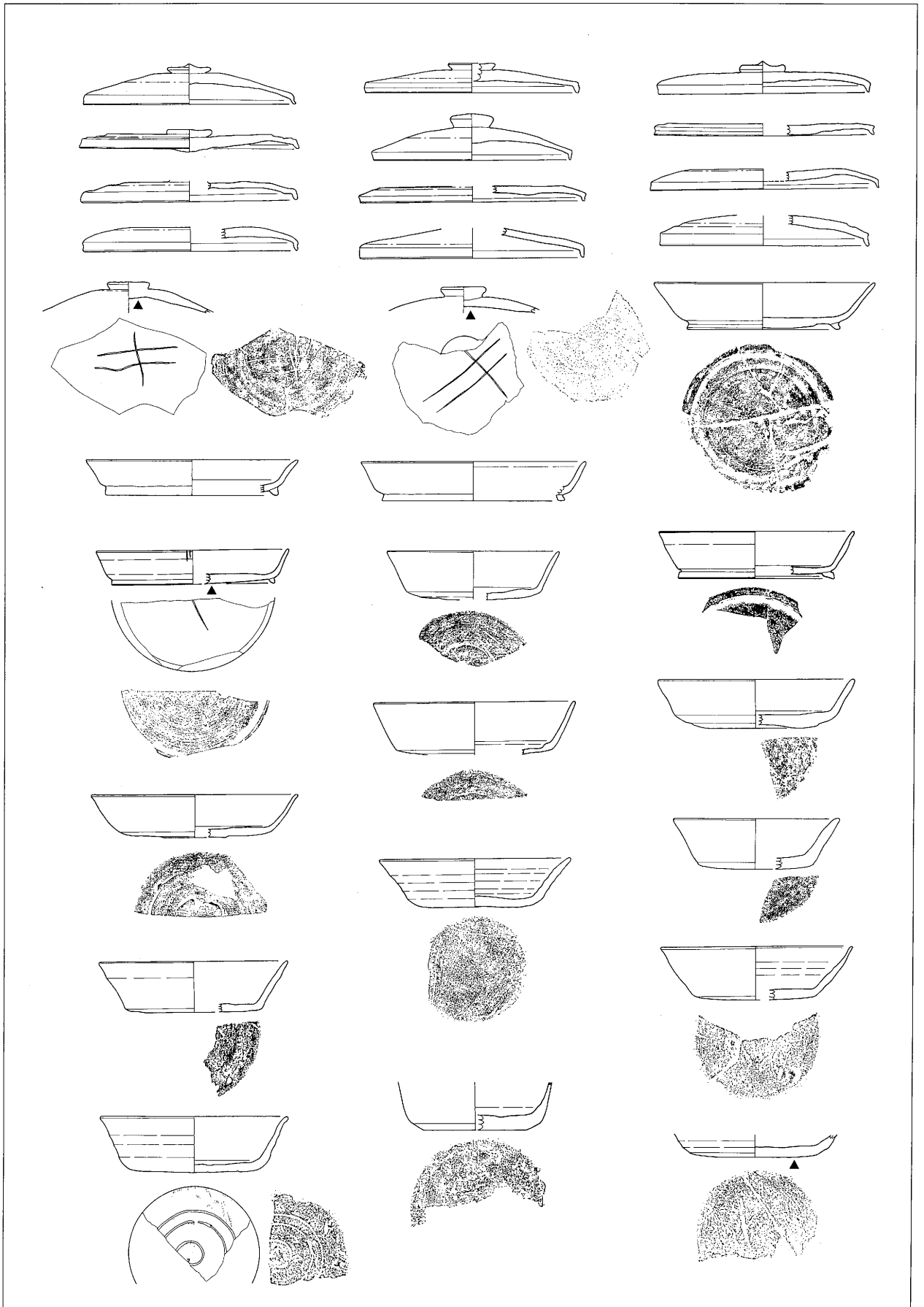
40図　茶臼峯 4 号窯



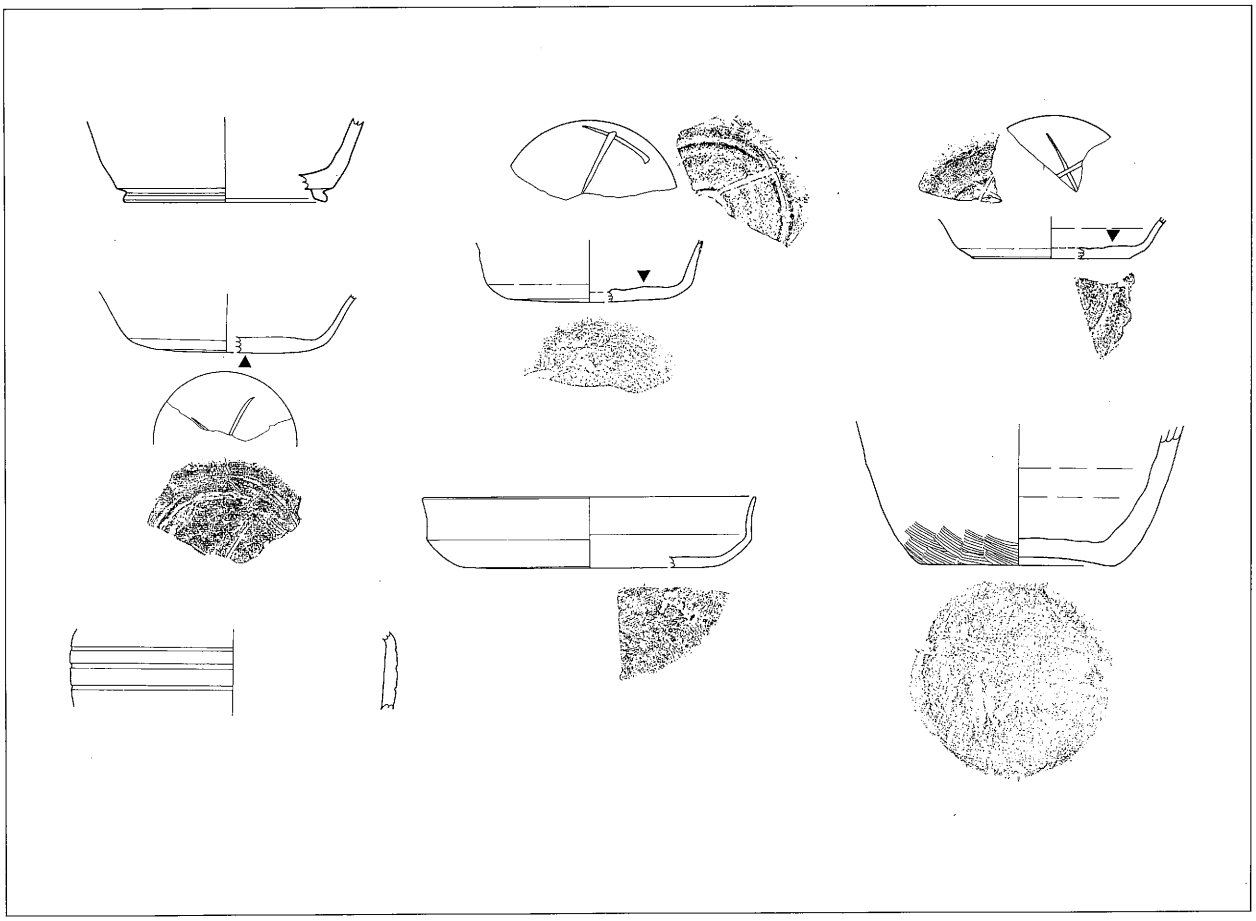
41図　茶臼峯5号窯



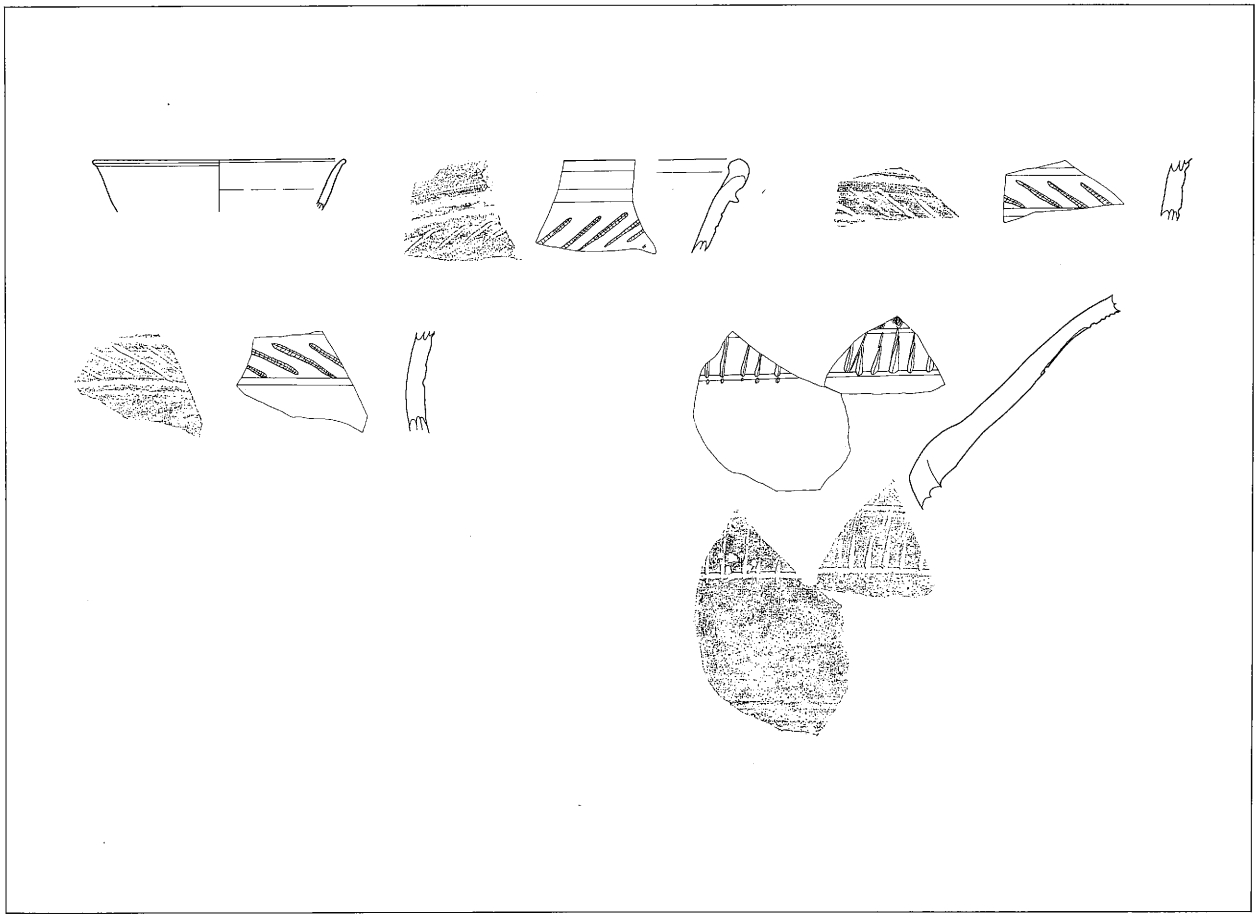
42図　大久保



43図　清水山



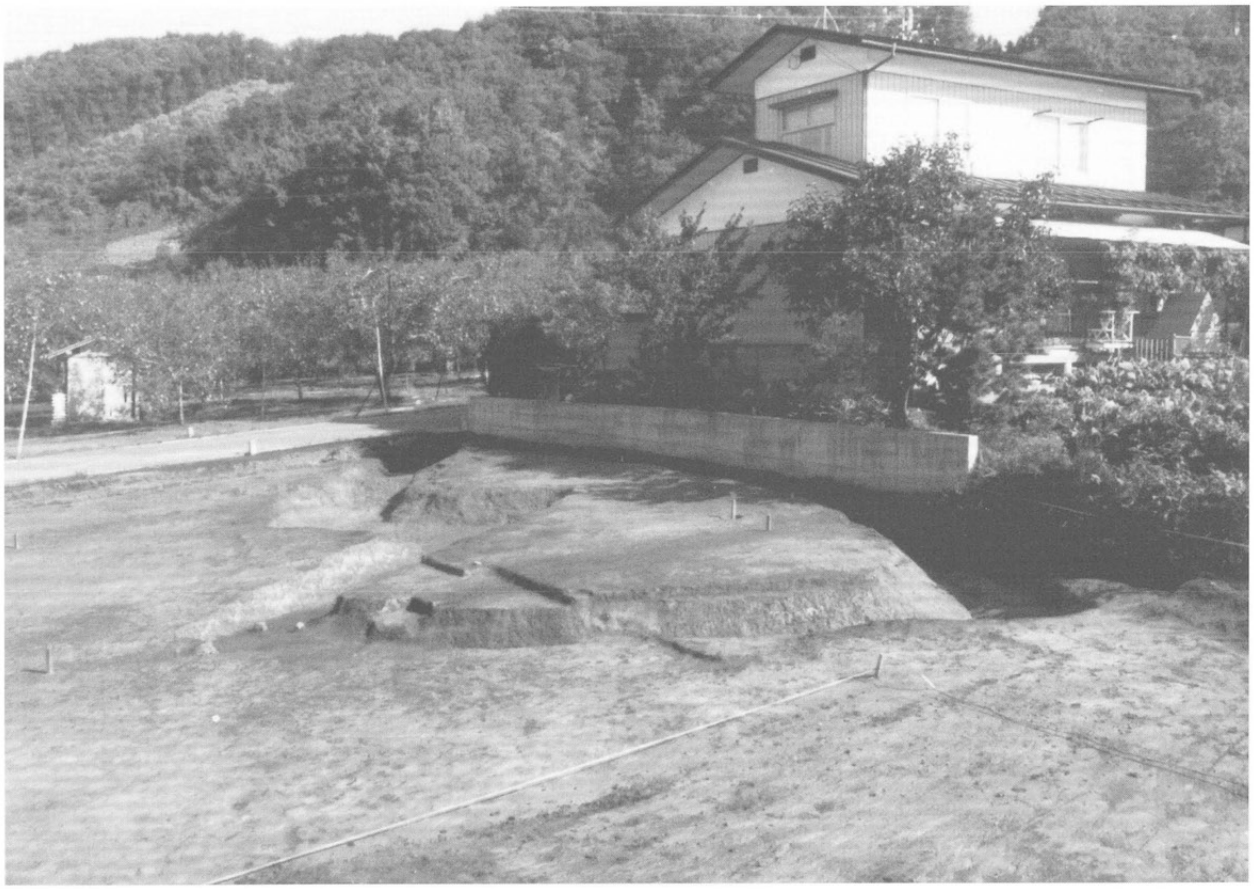
44図　清水山



45図　茶臼峯

写真図版

前方後方形周溝墓調査風景



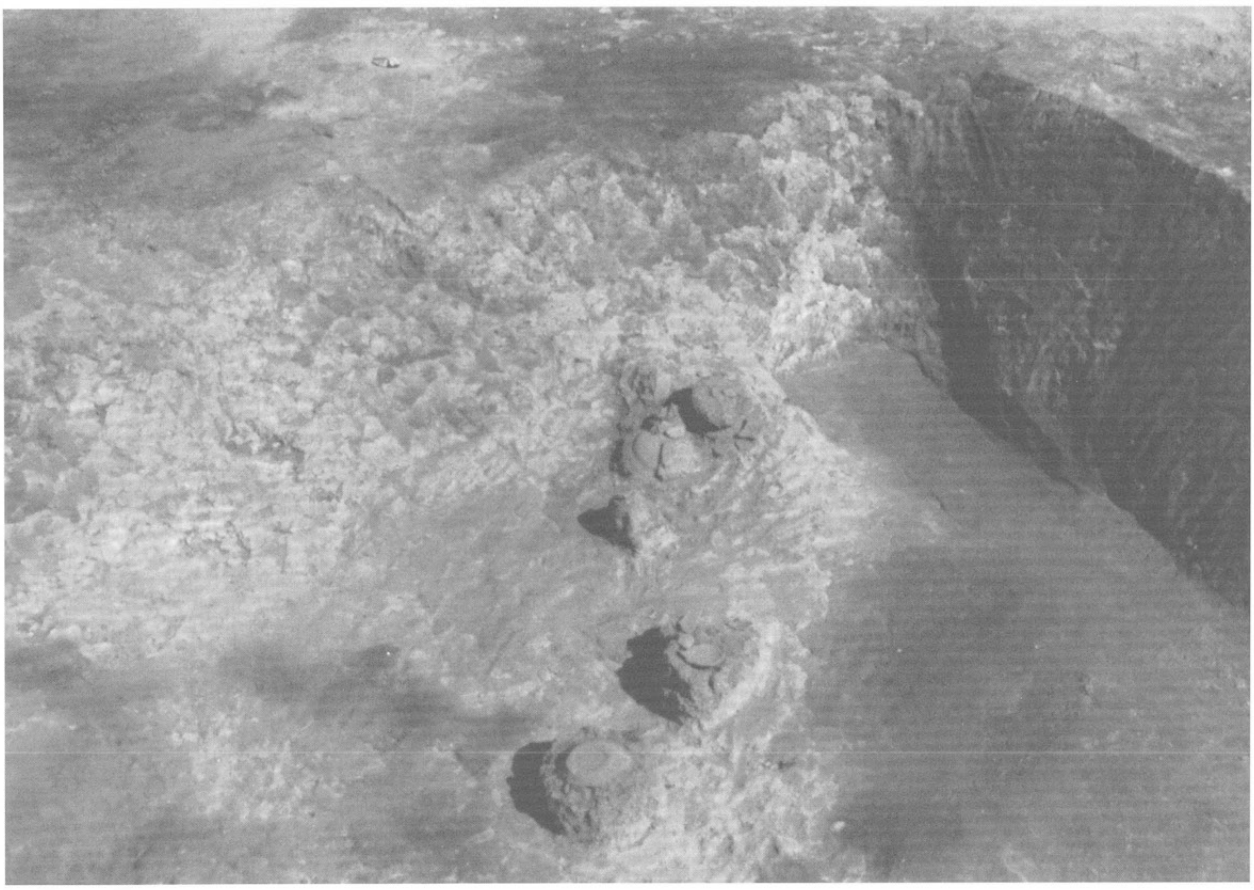
前方後方形周溝墓

前方後方形周溝墓

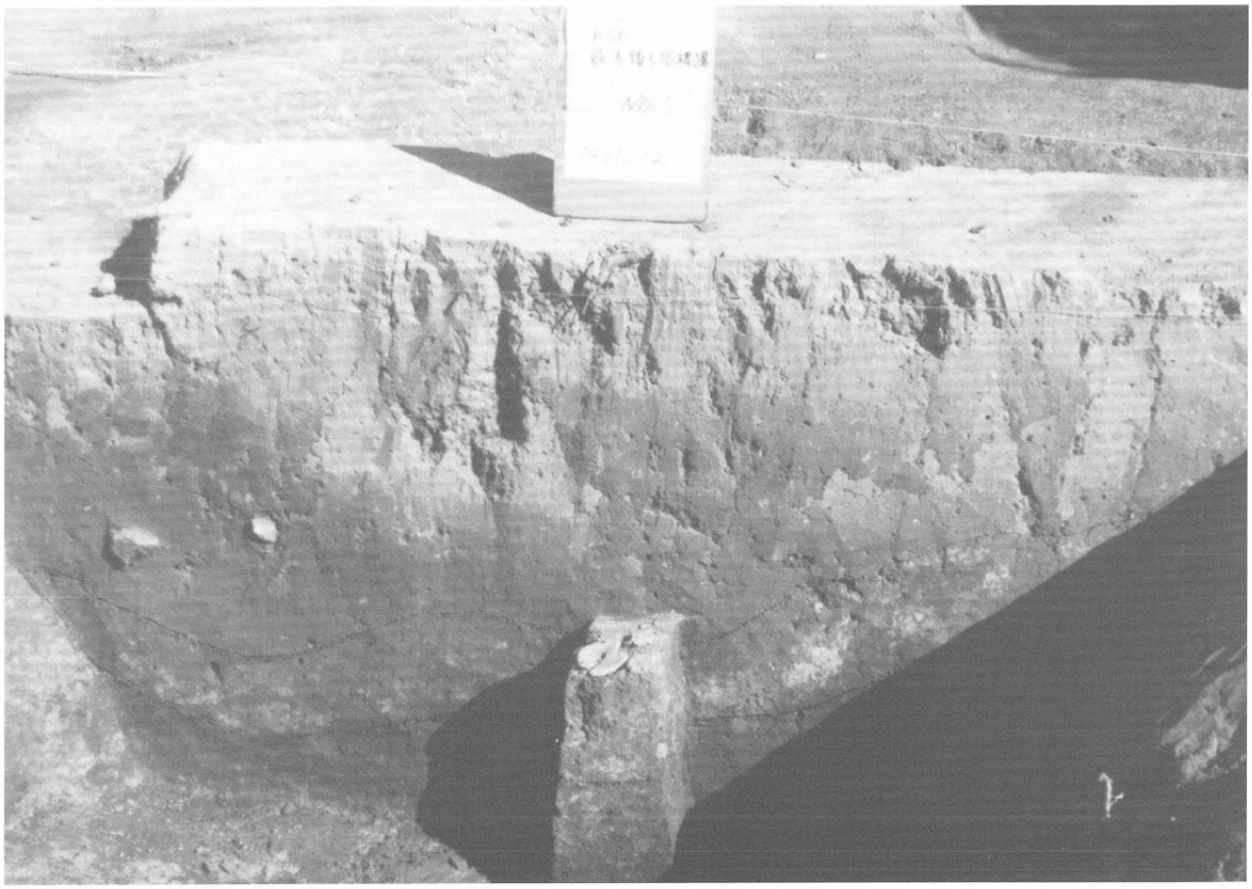
前方後方形周溝墓

前方後方形周溝墓周溝内土器出土状況

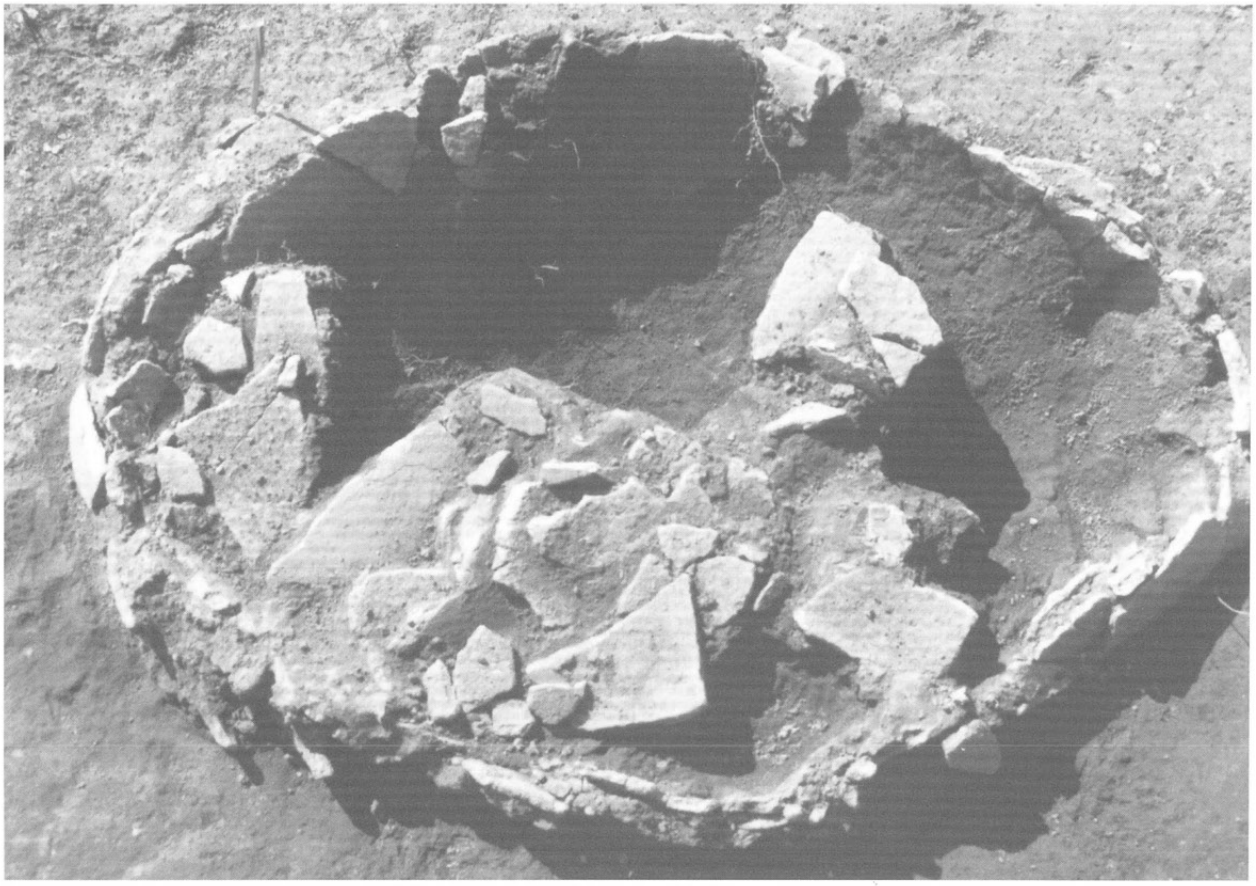
前方後方形周溝墓周溝内土器出土状況

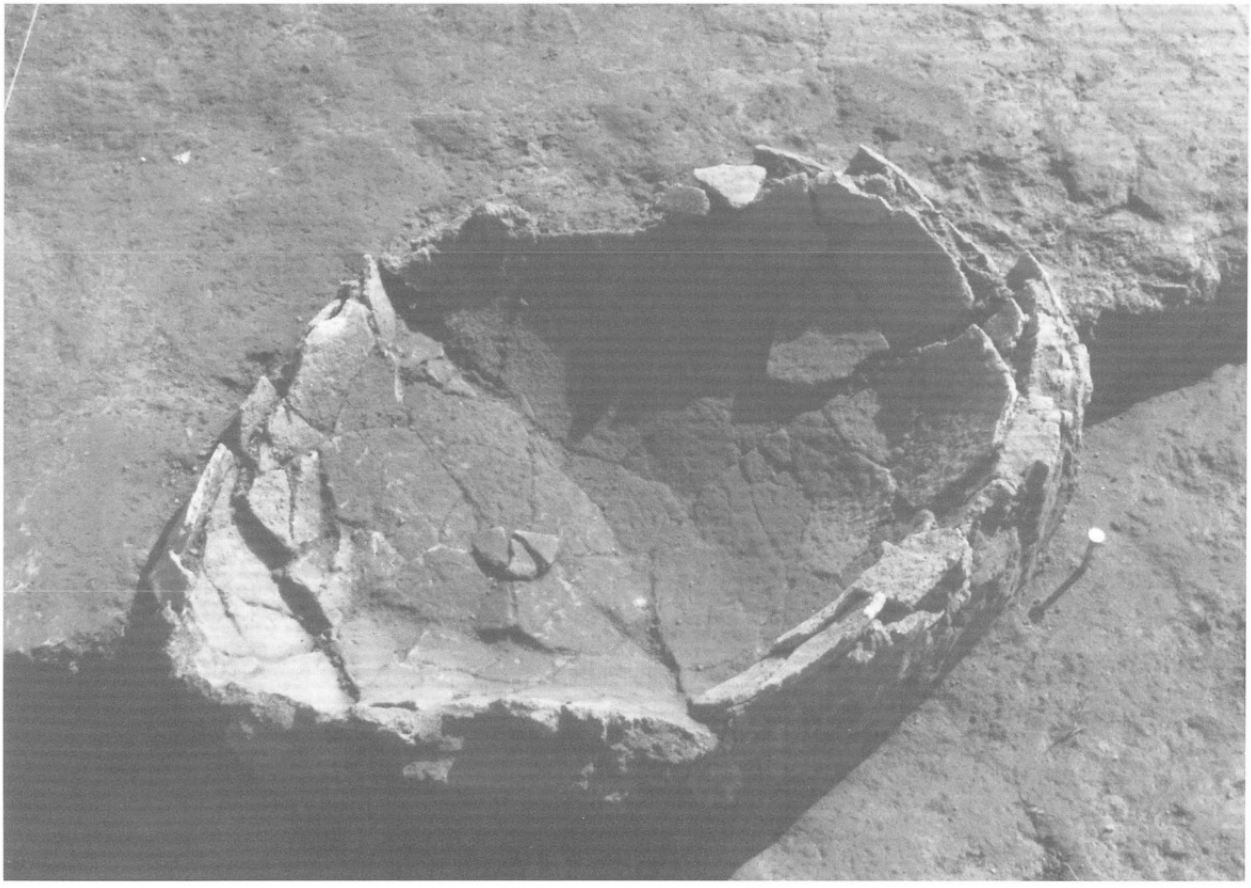


前方後方形周溝墓周溝内土器出土状況



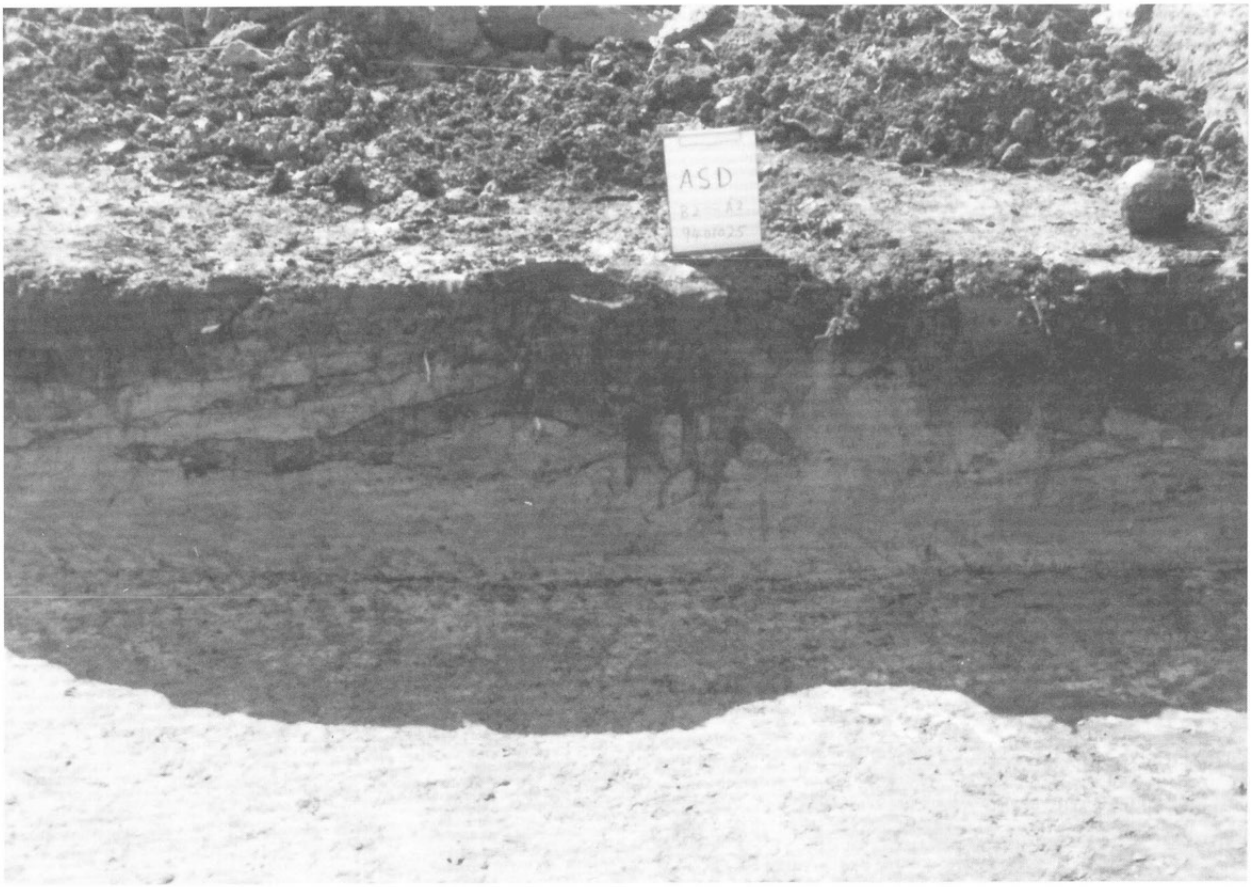
前方後方形周溝墓周溝土層（C－D）



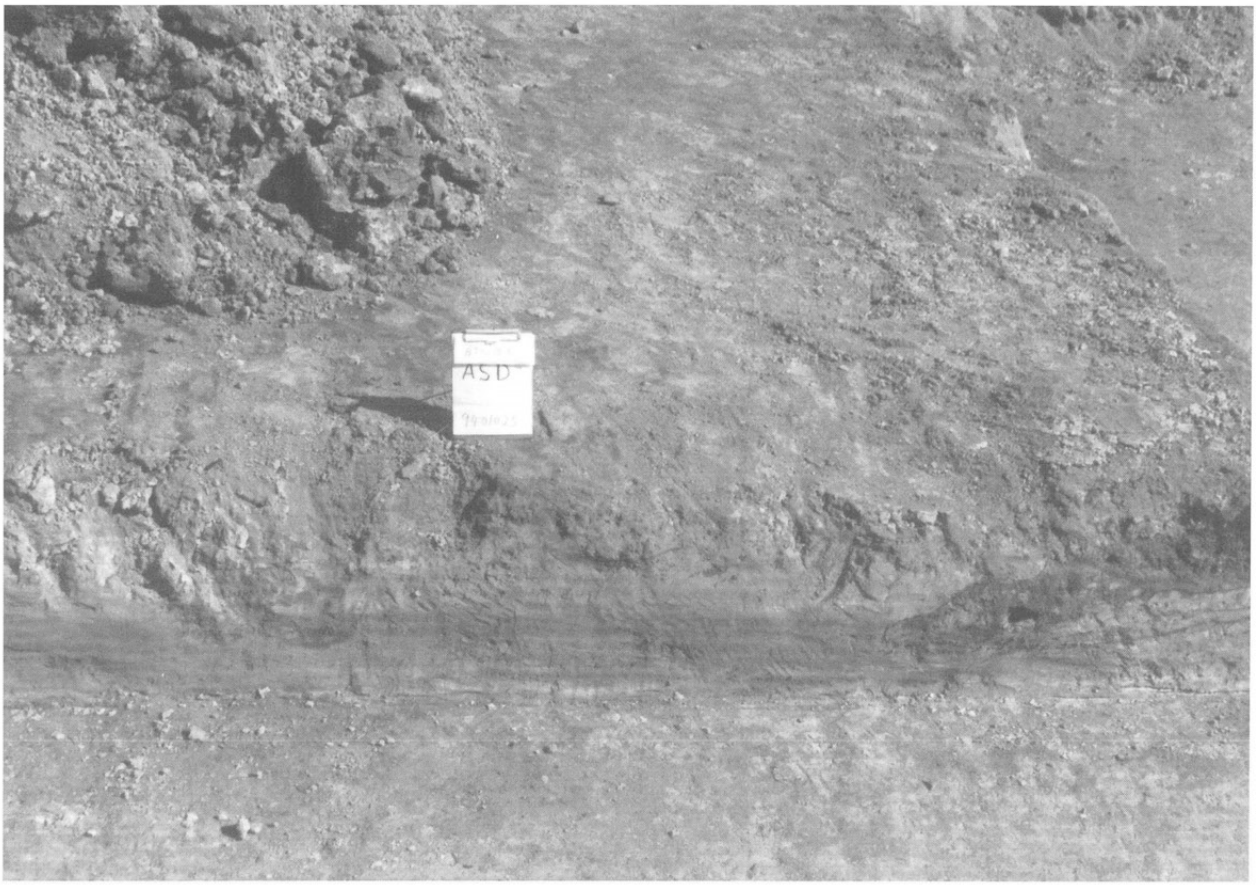


壺棺墓

粘土採掘穴断面



粘土採掘穴土層

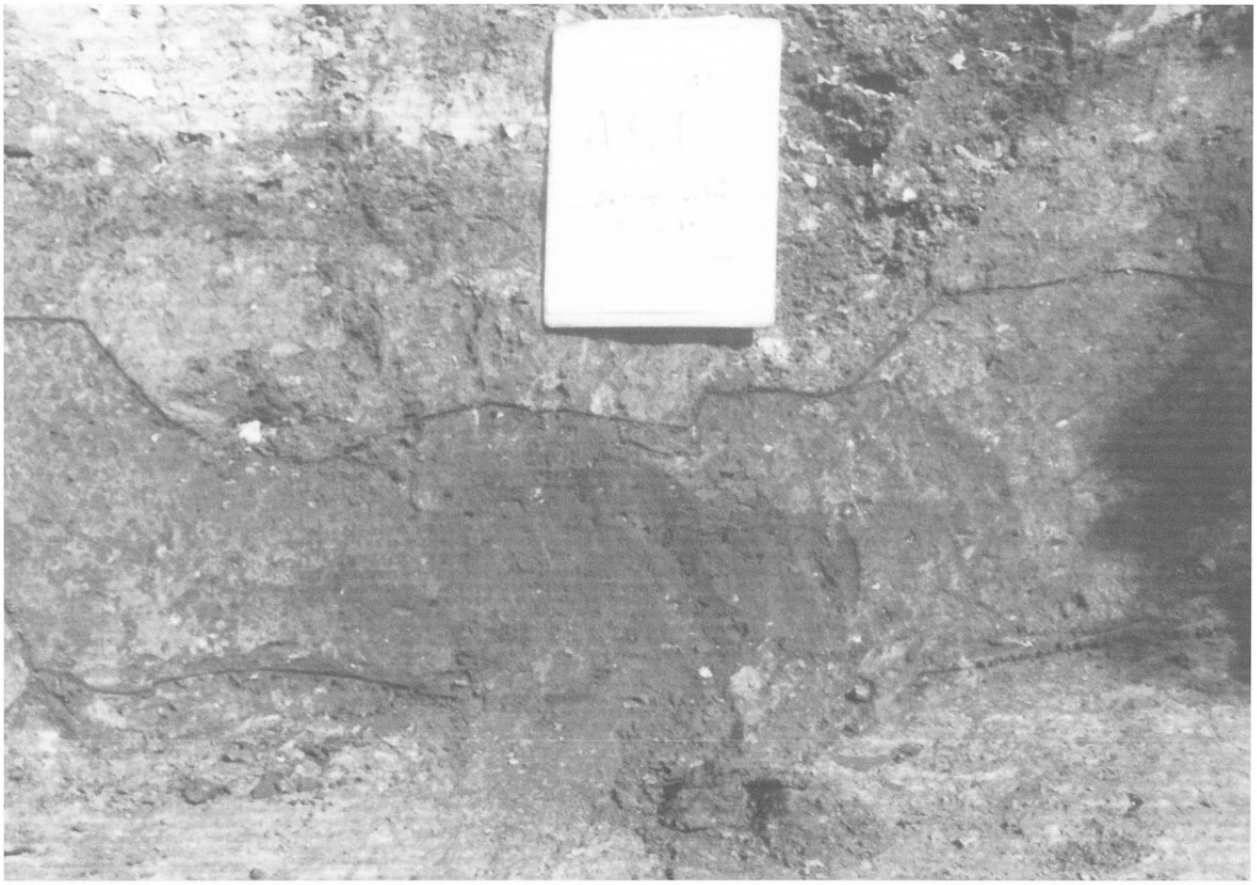


粘土採掘穴土層

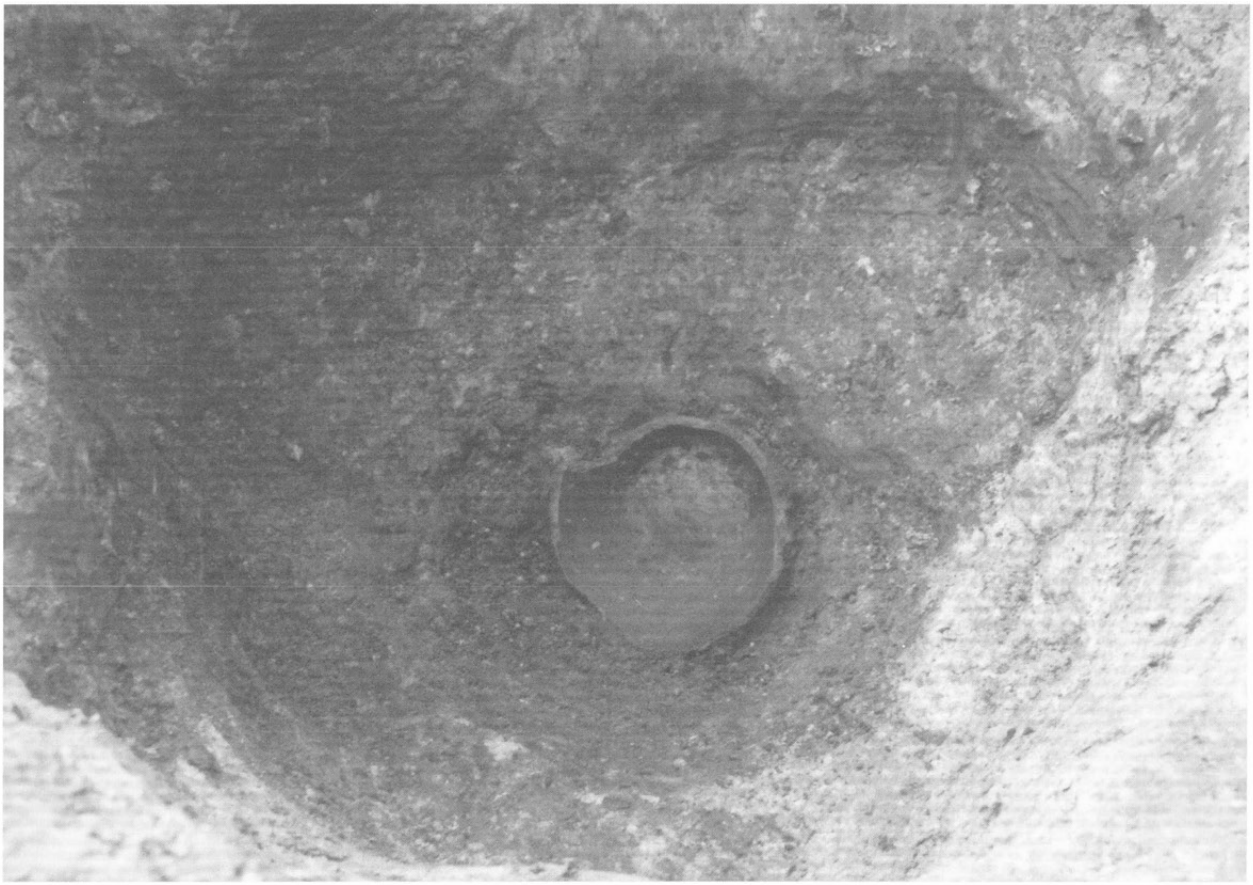
粘土採掘穴土層

粘土採掘穴土層

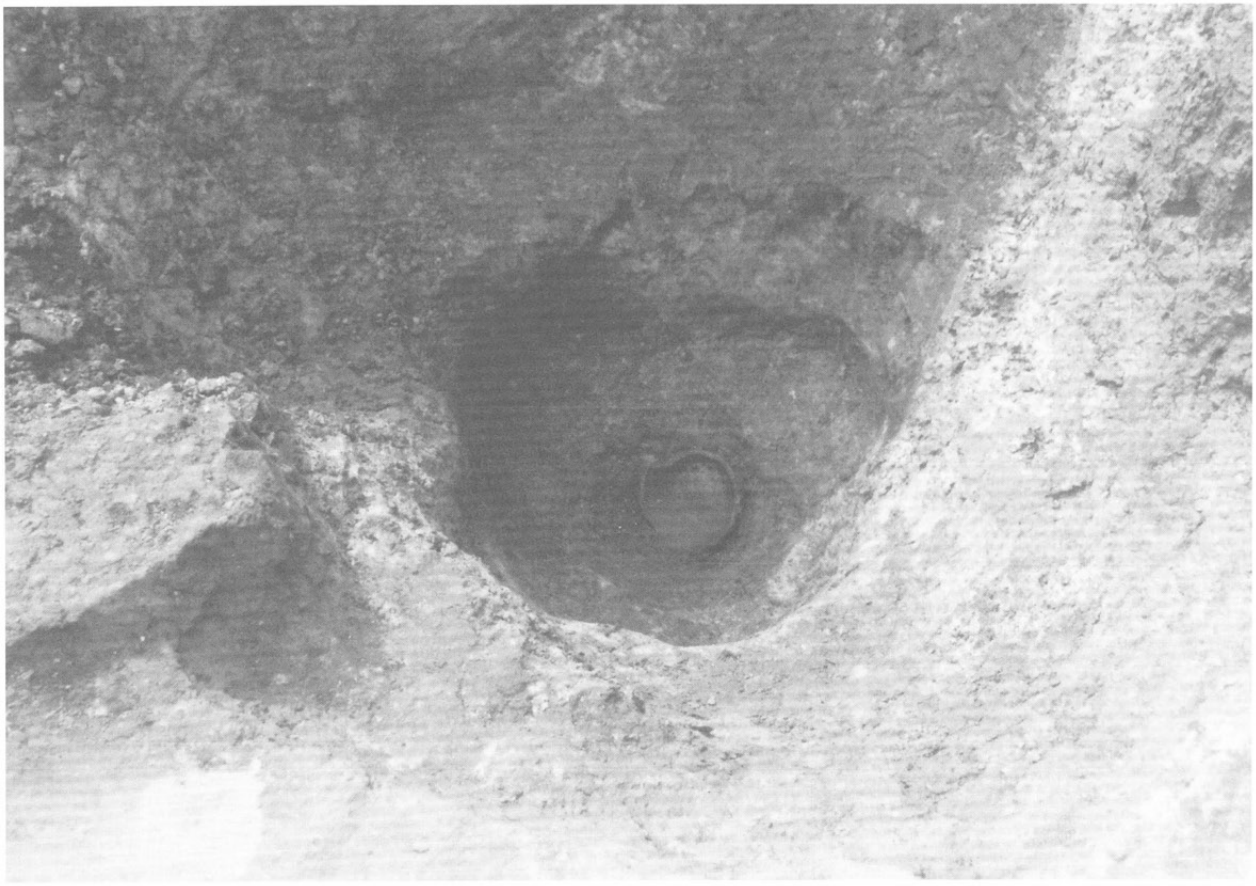
粘土採掘穴土層



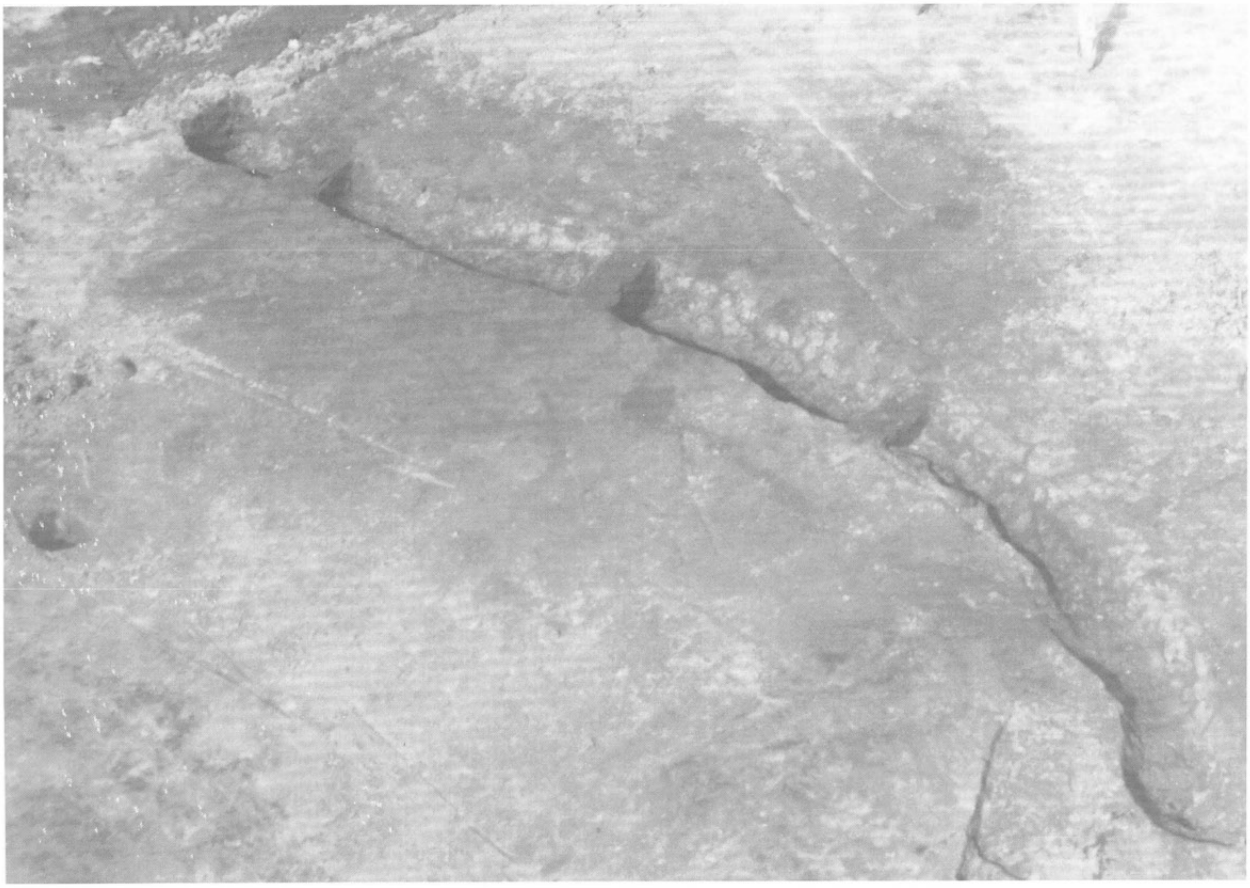
粘土採掘穴土層



粘土採掘穴土器出土状況



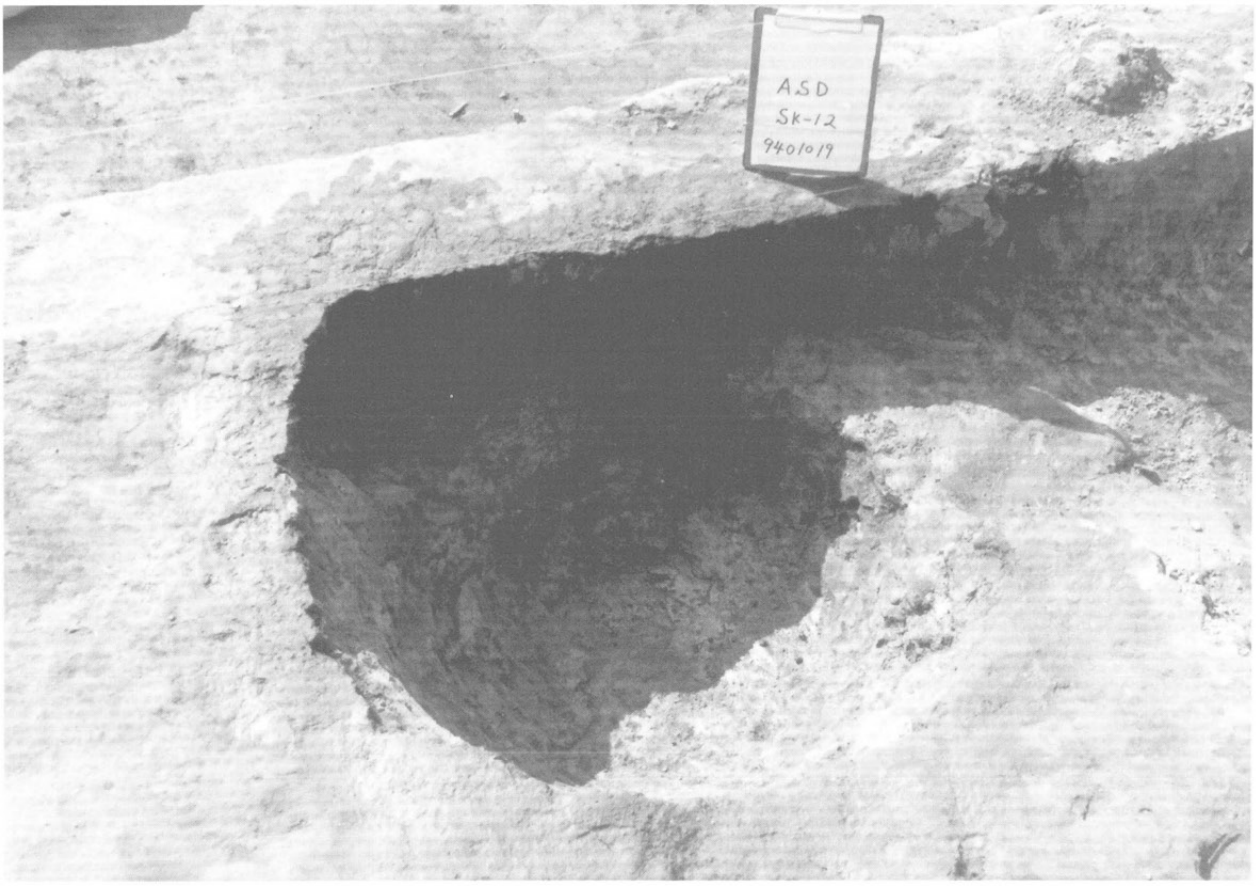
粘土採掘穴



第1号溝

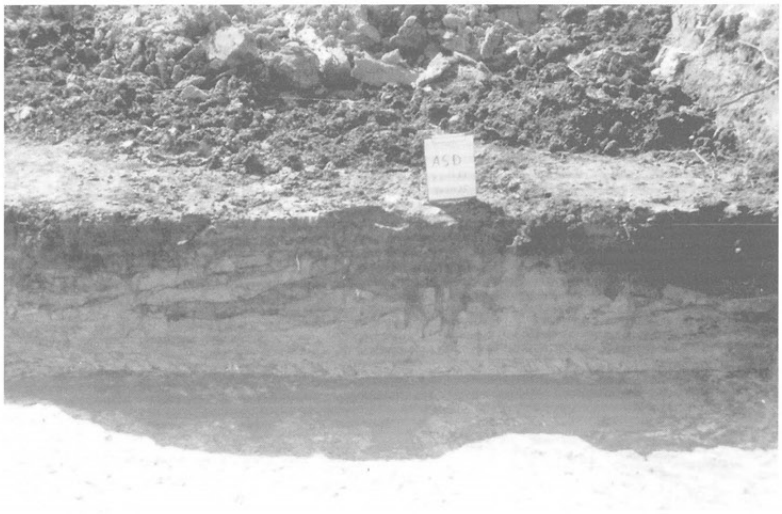
第 3 号土坑

第 1 号土坑

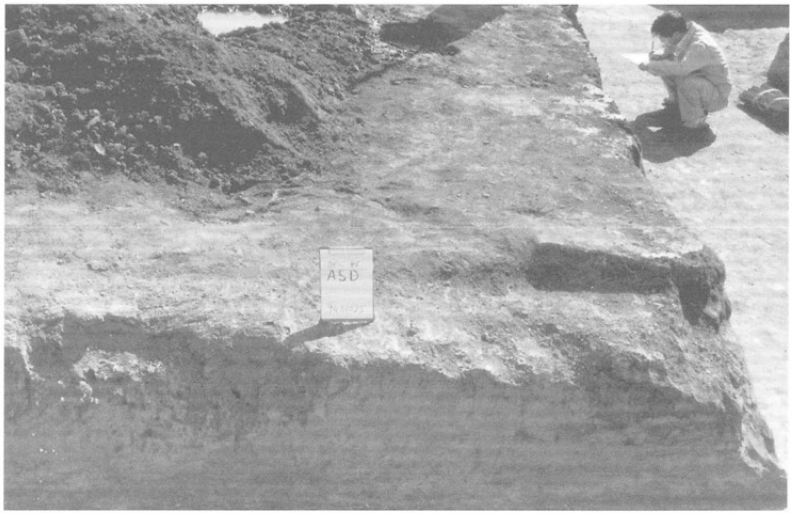


第 3 号土坑

第 7 号土坑



ASD


ASD

安源寺遺跡発掘調査報告書

印　　刷　　平成７年３月20日
発　行　日　　平成７年３月31日
編集・発行　　中野市教育委員会
　　中野市三好町１－３－19
印　刷　所　　カシヨ株式会社